

伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二一年 第九十四号

**国立国会図書館蔵
伊能大図 第99図（相模・伊豆・駿河）**

表紙の図は相模国西南部の伊能大図である。酒匂川の西に位置する小田原は、西国から江戸へ向かう入口に位置し、戦国時代末期には関東一円を支配した北条氏の拠点となっていた。

交通の要衝であったこともあり、中世以来、政争の舞台となつた地でもある。戦国時代、北条氏がここに居城を構えてからも、北方から上杉、武田等の度重なる攻撃を受け、最後は秀吉による小田原攻めで難攻不落思われていた總構えの小田原城が開城したのは、天正18年（1590）である。

北条氏滅亡後は、徳川の支配下に置かれ、徳川の下で小田原攻めに功のあつた大久保忠世が城主となつたが、慶長19年（1614）に子の忠隣が改易され、一時期、城主不在の番城や後に越後高田に移つた稻葉氏が城主となつた時期があつたが、貞享3年（1686）に大久保氏の子孫である忠朝が再び小田原城主となり、以後は幕末まで大久保氏の居城となつていた。伊能隊が測量した当時の城の規模は、内郭だけでも東西十町、南北五町とされ、伊能図に描かれている城の中でも規模の大きい城といえよう。

江戸から東海道を西に向かうと、小田原を起点に道が四方に分岐する。西に向かうのが東海道で、北に向かう道は御殿場を通り、甲斐に向かう。南に向かう道は伊豆半島東岸を海岸沿いに南下する。

伊能隊が第2次、第4次の測量後、西国の測量に向かう途中、小田原を通過するのは、第5次、第6次、第8次、第9次と、東山道経由で西に向かい甲州街道を帰路にした第7次測量以外は、全て小田原に宿泊している。

第2次測量では、往路で相模、伊豆の海岸沿いを測量し、伊豆半島を一周して帰路で東海道を測量し

て江戸に戻つている。その後、第4、5、6次測量では、西国測量に向かう往復の途中、小田原を通過している。第8次測量では、東海道の平塚、藤沢から北に向かい、大山を経由して関本で二手に別れ、支隊が関本から小田原まで測量して測線を東海道に繋いでいる。忠敬等本隊は、関本から西に向かい、富士川を南下して東海道に繋いでいる。第9次測量では、伊豆の離島を測量した帰路に御殿場から箱根を経由して測線を東海道に繋いでいる。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

菱山剛秀



伊能忠敬の測量ルート

目次

表紙解説

国立国会図書館蔵

伊能大図第99図部分（小田原周辺）

菱山剛秀

研究と話題

伊能忠敬測量の日本地図を読む

星埜由尚

一一〇〇年前の日本の姿――

玉造功

江戸府内第一次測量の記録（四）

福田仁

土佐の伊能測量

柏木隆雄

江戸実測図（東京市版）考察

玉造功

国宝紹介（器具類番号50）携帯用磁石

星埜由尚

伊能大図の復元について

星埜由尚

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」

星埜由尚

連載第二十八回

渡辺一郎・井上辰男

忠敬談話室

「伊能図完成200年記念の集い」開催

事務局

「伊能図に描かれた現存十二天守」

星埜由尚

令和の伊能大図制作

星埜由尚

明治期の模写図における山の表現

星埜由尚

銅像建立と広報の必要性

星埜由尚

日本地図の第一歩は吉岡から――伊能忠敬

星埜由尚

河崎倫代・室山孝

星埜由尚

会員だより・新入会員紹介・事務局からのお知らせ

各地のニュース

伊能図完成200年記念

星埜由尚

「伊能ウオーク」開催

星埜由尚

伊能忠敬記念館HPで初のオリジナル動画を公開！

星埜由尚

新たに「伊能小図」副本確認

星埜由尚

渡辺一郎著「伊能忠敬の日本地図」

星埜由尚

新入会員自己紹介

星埜由尚

事務局からのお知らせ



記念講演「伊能測量の日本地図を読む—200年前の日本の姿—」

2021.4.18 江東区文化センター ホール

「伊能図完成200年記念の集い*」記念講演 伊能忠敬測量の日本地図を読む —200年前の日本の姿—

星埜 由尚

はじめに

今から二〇〇年前に幕府に上呈された日本初の実測図である伊能図は、その形が現代の地図とあまり変わらないので有名です。その地図を通して知られる二百年前の日本の姿はどのようにだったか。今日は伊能図について、技術的な話ではなく地図を見るなどを主眼にして紹介したいと思います。

忠敬の前半生

これは国宝となつてゐる伊能忠敬の肖像画です。測量隊員の青木勝次郎という人が描いたと言われています。通常、国宝の絵画といえば狩野探幽とか著名な画家の作品ですが、これは無名人が描いた国宝として唯一のものです。こちらは佐原の伊能忠敬旧宅です。忠敬は前半生は商人として商売をしていました。九十九里の網元で小関家といふ名主を代々務めた家に生まれました。小関家はもうありませんが、今でも「小関」という地名が残っていて、上層の農漁民層の出身でした。十七歳で伊能家に婿入りしました。近郷近在で「デキる息子」という評判があつたのでしょうか。佐原の豪商であつた伊能家の主人として迎えられました。忠敬は日本最初の科学的実測地図製作となりましたが、後年、娘にあてた手紙の中で「本当は学問で身を立てたかった」と言っています。佐原で昼間は商売、夜は学問という生活を送り、隠居後に江戸に出て高橋至時に師事しました。至時は天文的な天文学者で、勉強しすぎて死んだ人です。いよいよ忠敬は自宅から浅草の司天台までの距離を測つて計算し、至時に報告しましたが、「それでは距離が短かすぎる」ということで、蝦夷地に行くことになりました。地球の大きさを知りたいということがきっかけで十七年にも及ぶ全国測量となつたのです。その結果、忠敬は日本全国を巡り、当時最大の旅行家にもなりました。

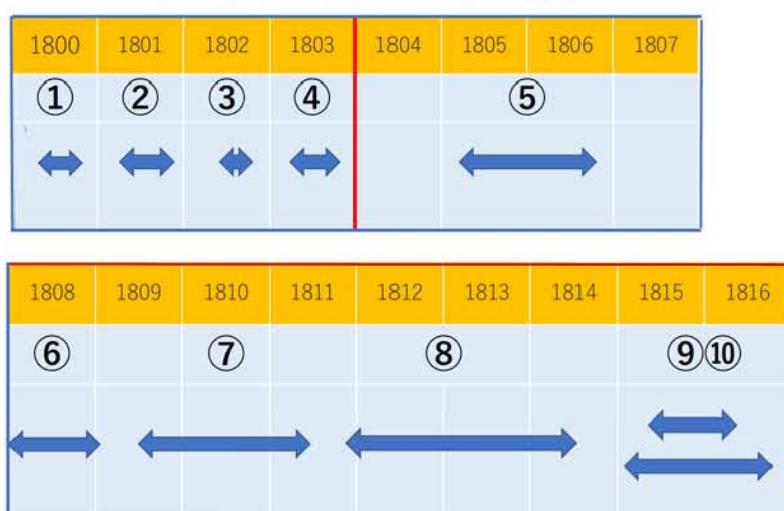
忠敬が遺したもの

忠敬が遺した主なものは『伊能図』と総称される地図類、詳細な『測量日記』、『山島方位記』な

どのデータ集で、それらは現在国宝になつています。忠敬は実際に几帳面に記録を残しました。先祖の先例から、記録の重要性をよく知つていたためだといわれます。忠敬の偉いところは商売に励んで家産を増やし、それを公的なことに使つたという点です。もちろん幕府のほうも相当費用を使つたのですが、忠敬は個人財産で公共の測量事業を行いたいと願い出て許され、十次にわたる全国測量となりました。



伊能測量の時系列



忠敬の生きた時代（一七四五—一八一八）

忠敬の時代は天災や飢饉が多く起こった時期でした。忠敬は名主として佐原の村政に携わっていましたが、飢饉の際には救恤米を出して難民を援助し、一人の飢餓者も出しませんでした。村民はもちろん領主からの信頼も厚く、忠敬が隠居を申し出ても許可されなかつたという話が伝わっています。

この時期は洋書の禁輸緩和により西洋の学問が中国経由ではなく西欧から直接入ってくるようになりました。

西洋天文学を含め洋学が興隆し、また町人文化の発展に伴って地図の刊行が盛んになり、長久保赤水の「赤水図」が出版されるなどして一般庶民も地図を購入できるようになりました。

一方、当時の社会背景として北方問題がありま

した。ロシアの南下を警戒した幕府は一七九九（寛政十二）年、東蝦夷地を松前藩から上知して幕府直轄地としました。伊能測量はその翌年に蝦夷地から開始したので、ちょうどこの時期にあたります。やがて幕府は一八〇七（文化四）年に蝦夷地全体を直轄地とし、一八二一（文政四）年になつ

て松前藩に返却しました。伊能図が完成した年です。伊能図を見る

伊能図を近くで見ると、たくさんの針穴があります。

これは地図を写す際に針を使って写した跡です。朱色の線は測量隊の測線で、これが重要です。山は絵画的に描かれ、近代の地図とは違っています。測量方法は導線法と交会法と言うやり方で、まだ三角測量ではありません。忠敬は実測を重んじ、測量しなかつたところは「不測量」として空白のままにしています。しかし蝦夷地は測量隊が行かなかつたところも書いてある。これは忠

敬の弟子だった間宮林蔵が測量して提出したデータを使つて書いたと言られています。しかし林蔵はカラフトなど酷寒の地での活動により凍傷で手

指を失つていたと云われており、林蔵の著書は、村上貞助などが助力しています。ですから、蝦夷

地のデータが本当に間宮の測量によるものなのかどうか、さらに検討の余地があります。

伊能図には大図・中図・小図の種類があり、各

図の現存状況、所蔵先等は次のようになっています。

【大図】

大日本沿海輿地全図（正本・控）全て焼失

国会大図（模写）国立国会図書館

アメリカ大図（模写）米国議会図書館

歴博大図（模写）国立歴史民俗博物館

海保大図（模写）海上保安庁海洋情報部

毛利大図（副本）山口県文書館

松浦大図（副本）松浦史料博物館

【中図】

東博中図（副本）国立博物館（大河内松平家旧藏）

フランス中図（副本）NISSHA(株)（ペイレ氏旧藏）

東博小図（副本）東京国立博物館

イギリス小図（写本）英國ナショナル・アーカイブズ

【小図】

東博小図（副本）東京国立博物館

【大図・中図・小図】

九州沿海図（測量途次の図で正本）東京国立博物館

二〇〇年前の蝦夷地

では、第一次測量の際の測量日記の記録と伊能図から、当時の蝦夷地の様子を見てみましょう。

これは礼文華山道です。大変な難所でした。忠敬らは長万部で「オムシャ」という、アイヌの長に幕府役人が盃を与える儀式を見学しています。平沢屏山というアイヌ画で知られる絵師が函館のオムシャの様子を描いた図があります。伊能隊が到達した最東端はニシベツ（本別海）ですが、そこに行くまでにいろいろな人たちに行き遭つてい



第一次測量成果(1800)
松前距蝦夷行程測量分図
(国立公文書館)

襟裳岬



最終成果(1821)

ます。上知していた時期なので幕府役人が現地に沢山いて行つたり来たりしていました。蝦夷地は未開で人跡未踏の地という印象がありますが、実際はそうではありませんでした。ニシベツには伊能測量隊を記念して「最東端到達記念柱」が建てられています。地図ではニシベツ川を渡ったところに☆の印があり、ここに止宿して天測したようです。伊能図では厚岸に国泰寺というお寺が書いてありますが、忠敬が行つた時はこの寺はまだありませんでした。後世の間宮か誰かが行つた時の

データによって書いたのでしよう。野付半島も忠敬の測量ではありません。ノツケには「キラク」という伝説の町があり、クナシリ島に渡る船や人を管理する通行屋があつて賑わっていたと言われます。近年、発掘したところ当時の建物跡や日常の食器、墓などの遺跡が出てきました。



伊能小図(副本東京国立博物館)

天売島、焼尻島は幕末に焼尻島に漂着した米国人がいて、捕らえられ長崎に送られ、初めての英語の先生になつたと言われています。

国土の変遷を見る

伊能図には二〇〇年前の日本の姿が記録されています。そのうちから興味ある事例をいくつか見て行きましょう。これは伊能図の横浜村の部分で

児島湾の干拓



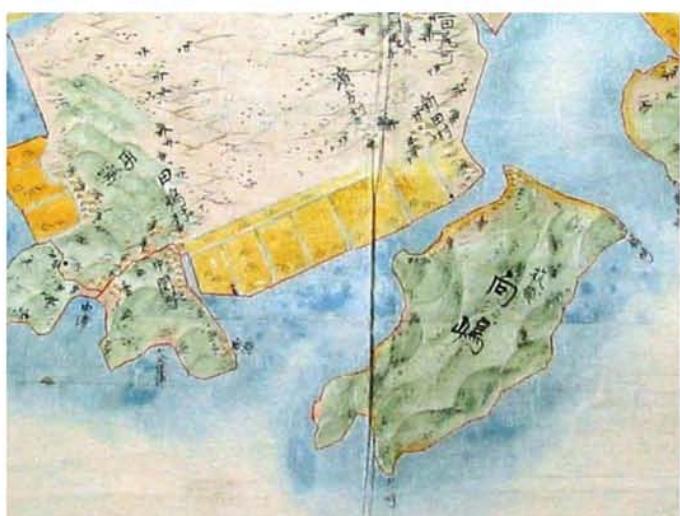
大図145号(模写本アメリカ議会図書館)

すが、往時は砂洲が横に長く延びており、まさに「横浜」でした。金沢八景は入江が奥に入り込んだ風光明媚な海岸で岬には一覧亭がありました。幕末にベアトが金沢八景を写した写真があります。今は埋立地のところも伊能図には当時の姿が残っています。

岡山県の児島湾は江戸時代から大規模な埋め立てが行われていた所です。測線が内湾をせき止めた土手の上を通つていて、ここを歩いて測量したことがわかります。七番村、九番村など番号の村や新田と名の付く村が多く、当時から広範囲に干拓が進んでいました。瀬戸内の三田尻、今の防府

市ですが、塩田が黄色く描かれています。塩田の中に家が書いてあるのは汐汲みの小屋です。

瀬戸内海の塩田（山口県防府市）



大図(副本・山口県文書館)

御両国測量絵図(伊能大図)三番 山口県文書館蔵

番所鼻自然公園に「伊能忠敬先生絶賛の地」の石碑があります。「蓋し天下の絶景なり」と伊能忠敬が絶賛したという言い伝えにより建てられました。江戸も伊能図と現代の地図を比較すると、埋立地の面積の増え方が分かります。東京の面積がどれだけ増えたか。現在江東区を通っている海岸道路は伊能図では全くの海の中です。二〇〇年間に日本の海岸線は大きく変化しました。

三陸海岸の測量

第二次測量では海上引綱を行いました。岩手県の三陸海岸の唐丹一大石浜は船で縄を引いて測りました。その様子を再現したテレビ番組がありました。「縄が重くて大変だった」そうです。大石浜には「伊能忠敬海上引綱之地」記念碑が建っています。唐丹には葛西昌丕という地元の学者が伊能忠敬の測量に感激して建てた「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」があります。これは文化十一(一八四四)年、忠敬の存命中のことです。伊能測量の記念碑として江戸時代に建てられた唯一のものです。

天候との闘い

三陸海岸から北上し、青森県三沢市付近に来たとき、浜三沢と平沼村間で大吹雪に遭いました。「ホワイトアウト」状態で駕籠の戸障子が吹き飛び、「駕籠の中にも雪が吹き込んで外と同じ」になり、やつとのことで平沼村に着いた、とあります。

地元の対応の良しあし

地元の対応も様々でした。加賀藩では伊能隊は冷遇されました。上からのお達しで、村役人に村高や人口などを聞いても拒絶され、村名くらいしか教えてもらえなかつたと測量日記に書いてあります。海岸から金沢城下まで、間縄を使わず量程測量しています。薩摩半島の南端、開聞岳を望む

直線に引かれ、途中の地名もありません。もう一件、加賀藩のあとの大糸魚川藩では「糸魚川事件」が起きました。町役人に姫川は大河で水量が多くて危険だから上流を渡れといわれましたが、実際は小河だつたので町役人たちを叱つたところ、それを根にもつて江戸の藩主へ訴えられました。藩主から勘定所、天文方へと伝えられ、忠敬は六日町で至時から公式の戒告文を受け取るという仕儀となりました。

北陸諸藩で測量隊は軽く扱われた一方、多くの藩では測量隊を厚遇しました。鳥羽藩では隊員を饗應し、人員や資材を提供するなど、丁寧な対応でした。志摩市の海岸には「伊能忠敬富士山測量本土最南端之地」碑が建っています。各藩は老中からの通達を受けて対応しましたが、隣藩に問い合わせて横並びでやっています。各藩とも贈り物を多數贈つていて、土佐藩では鰹節百本といつた風でした。旅行中にたくさんもつても困るので、すぐ売り払うのですが、持ってきた人に頼んで売つてもらつたりしています。現代の我々には何とも理解しがたいことです。

また、第八次測量で五島の福江島で副隊長の坂部貞兵衛がチフスで客死した際、五島藩では三日間歌舞音曲を停止して弔意を示し、家老の墓の隣に埋葬しました。右腕を失った忠敬の落胆は大変なものでしたが、測量日記は「坂部貞兵衛病氣養生不相叶、於福江町命終」と極めて簡潔に記しており、当時の死生観を見る思いがします。

屋久島・種子島測量

屋久島・種子島の測量は第七次では風が悪く、渡海が困難なので忠敬らは断念しようとした。しかし幕府が測量を命じたため、第八次測量で

山々の表現



筑波山(中図副本東京国立博物館蔵)



日光三山(男体山・白根山・女峰山)
(大図模写本国立国会図書館蔵)



妙義山
(大図模写本国立国会図書館蔵)



立山・剣岳
(中図副本東京国立博物館蔵)



『越中四郡村々組分絵図』石黒信由 (1825)
(一財)高樹会蔵・射水市新湊博物館保管)

鹿児島から大船八隻の大船団を組んで出航しました。外様の雄藩である薩摩藩の地理情報を見たので、この機会に知りたかったのではないかと推測しています。

銚子で富士山を測る
銚子では富士山の方位を測るために長期逗留し、九日目にやっと天候に恵まれて測定できました。測量日記にはその時の喜びが記されています。測定地の犬若岬には記念碑が建っています。

奇遇なる再会
第二次測量で牡鹿半島の分浜に止宿した際、主人の秋山惣兵衛は偶然にも二十三年前の松島旅行で道連れになつた人物でした。二人は再会を喜び、惣兵衛は別れを惜しんで三日間測量に付き添いました。

江戸時代の人情の厚さを見る思いです。

奥北に稀なる所

下北半島の田名部(むつ市)では学問や芸芸を嗜む地元の人々の歓待を受けました。『測量日記』に「此の所は奥北に稀なる所にて寺院、医師、其の外表立し人々学文を好み、詩歌もなる人あり」と意外な

驚きをもつて地元との交流を記しています。

鬼死骸の伝説

岩手の一ノ関に「鬼死骸」という所があります。昔、坂上田村麻呂が鬼を退治して胴体を埋めた所が鬼死骸、首が飛んで落ちた所が鬼首だそうです。

対馬から朝鮮を測る

対馬では高台にある遠見番所から朝鮮半島、すなわち大陸の山を測っています。当時、対馬藩は幕府から朝鮮との外交を任せられていました。

神社仏閣への関心

大和路測量では南都の古刹を訪ね回り、わざわざ當麻寺まで行って測量しています。富士山裾野の伊能図にも多くの浅間神社や富士五山のお寺が書いてあって、伊能図は見るほどに興味が尽きません。

(ほしの・よしひさ 特別顧問 元国土地理院長)

* 「伊能図完成二〇〇年記念の集い」記念講演会
日時 令和3年4月18日(日) 13:30~15:00
場所 東京都江東区東陽4-11-3
江東区文化センター ホール

注

* 「伊能図完成二〇〇年記念の集い」記念講演会
日時 令和3年4月18日(日) 13:30~15:00
場所 東京都江東区東陽4-11-3
江東区文化センター ホール
主催 伊能図完成二〇〇年記念事業推進協議会
(伊能忠敬研究会は、協議会の構成団体)

江戸府内第一次測量の記録(四)
—文化十二年二月八日の「日記」—

—文化十二年二月八日の『日記』—

玉造功

二月八日の測量は、第七次測量の出発地点の王子村と江戸府内を、また第三次、第四次、第八次測量の帰着点である中山道板橋宿と江戸府内を繋ぐものであつた。

図1に朱線で加筆したように、王子村~~飛~~印から日光御成街道を江戸方面に南下して駒込の(3)印まで測量し、(3)から(4)印までは前日に測量を済ませてるので無測量で進んだ。駒込(本郷)追分(カ)からは中山道を北上し(5)印を経て板橋宿までを測量し(6)印に繋いだ。

この地域は江戸の北郊で御料(幕府直轄地、明治以降に天領とも呼ばれる)や私領(大名領・旗

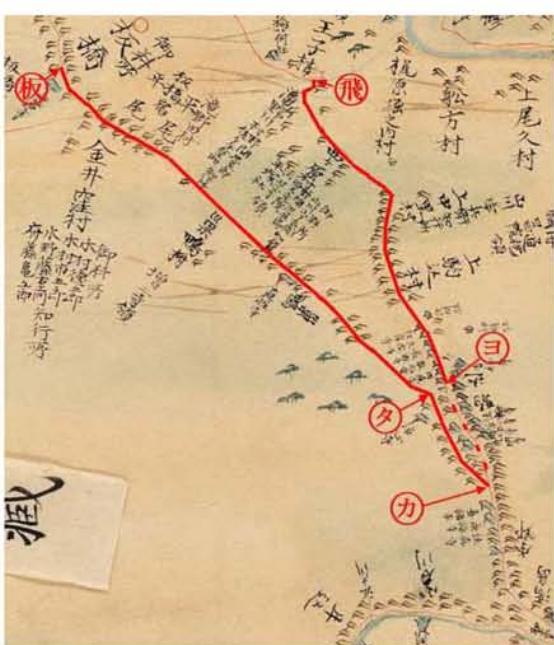


図1 『大日本沿海輿地全図』第90図に加筆

本領)、寺社領が錯綜する農村地域であり、中山道や日光御成街道沿いには町場も見られる。幕府編纂の地誌の面から見ても、駒込や巣鴨までは『町方書上』を提出しており『御府内備考』に記載されるが、王子、西ヶ原、板橋は御府内を除いて編纂された『新編武藏風土記稿』に記載されており、江戸の境界領域であった。

・幸隆寺：幸龍寺の誤記。『浅草寺書上 甲七』によれば、將軍家光が幸龍寺に豊島郡王子郷の五十石の朱印地を寄進したという。

・三給・六給：一つの村が複数の領主によつて

・三給・六給　：一つの村が複数の領主によつて支配されることを相給といふ。王子村は王子権現社と王子稻荷社を管理する別当寺の金輪寺、芝愛宕権現社の別当寺の円福寺、浅草の幸龍寺の三寺の寺領であつたので三給といふ。西ヶ原村は六給であるが、図1や図6では「御料所」、「日記」ではより具体的に代官の大貫治右衛門支配所と記している。

字一軒茶屋 一里塚 (本郷追分より
一リといふ 左一町ばかり引込松生山という又御殿山という
右板橋道追分 (左側ばかり 上中里村地先

字二軒茶屋 一里塚（本郷追分より
一リといふ）左一町ばかり右板橋道追分

左一町ばかり引込松生山という又御殿山とい
う右板橋道追分

左側ばかり
上中里村地先

王子村：王子村のあたりは、江戸北郊の行楽地として名高かつた。安藤優一郎(2005)によるところ、「春は王子稻荷の初午、飛鳥山の花見、夏は王子稻荷の祭礼 石神井川沿岸の滝浴み、王子の萤狩り、秋は石神井川沿岸の滝野川地域の紅葉狩り、虫聞き、冬は王子・飛鳥山の雪見」で江戸の人気行楽地になったという。

十方庵敬順(1762～1832)は『遊歴雑記』に文化・文政期の江戸市中の名所旧跡、風習などを詳細に書き残した。王子村については「あふぎや(図3の扇屋)、海老屋の二軒茶屋は、軒をならべて高宅を巧みに作り、料理の美味に庖丁の手際なる。器物には善尽し美尽し、客の需めに応ずるは邊鄙には賞すべきか。」片鄙ながら、王子稻荷の門前より飛鳥山の麓まで、その間凡四町余、酒楼茶屋おののおの軒を同ふし、繁華の土地にも劣らぬ」と記している。この扇屋に宿泊したのが忠敬の第七次測量隊である。

文化六已年八月二十八日：第七次(九州第一次)測量の出発の集合地点は王子村の茶屋扇子屋(扇屋)であった。ところが荒川大洪水のた

地として名高かつた。安藤優一郎(2005)によるところ、「春は王子稻荷の初午、飛鳥山の花見、夏は王子稻荷の祭礼 石神井川沿岸の滝浴み、王子の萤狩り、秋は石神井川沿岸の滝野川地域の紅葉狩り、虫聞き、冬は王子・飛鳥山の雪見」で江戸の人気行楽地になったという。

十方庵敬順(1762～1832)は『遊歴雑記』に文化・文政期の江戸市中の名所旧跡、風習などを詳細に書き残した。王子村については「あふぎや(図3の扇屋)、海老屋の二軒茶屋は、軒をならべて高宅を巧みに作り、料理の美味に庖丁の手際なる。器物には善尽し美尽し、客の需めに応ずるは邊鄙には賞すべきか。」片鄙ながら、王子稻荷の門前より飛鳥山の麓まで、その間凡四町余、酒楼茶屋おののおの軒を同ふし、繁華の土地にも劣らぬ」と記している。この扇屋に宿泊したのが忠敬の第七次測量隊である。

文化六已年八月二十八日：第七次(九州第一次)測量の出発の集合地点は王子村の茶屋扇子屋(扇屋)であった。ところが荒川大洪水のた



図2 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

め川留めとなつて扇子屋弥右衛門に泊まることになつた。忠敬は「此茶屋家作も広く庭に流水を用、風景好」と評している。



図3 広重 江戸高名会亭尽 王子扇屋

王子川飛鳥橋：『新編武藏風土記稿』には「長五間の板橋にて飛鳥山下の用水堀に架す」とある。『江戸名所図会』で確認すると図4の右下に描かれている橋がこの日の測量出発地点の飛鳥橋である。

一里塚：この一里塚は現存し、大正十一年には「西ヶ原一里塚」として国の史跡に指定された。この一里塚の保存に尽力したのが、渋沢栄一とのことである。

装束榎：図2には測線とは無関係な木が王子村の北に描かれ「装束榎」と記されている。こ



図5 広重 名所江戸百景から 王子装束ゑの木大晦日の狐火



図4 広重 東都名所 飛鳥山全図から



・老之助坂：『武藏国風土記稿』の西ヶ原村の項に「大炊介坂」について「保坂大炊介といふもの住せし地」というとある。老之助坂は大炊介坂の誤記か。

・平塚大明神社：『武藏国風土記稿』によると、八幡太郎源義家がこの地の領主の豊島氏に鎧と守り本尊を与えた。豊島氏は城の鎮護として鎧を埋めて塚を築いたが、高さがないので平塚ともよばれた。

・御鳥見御用屋敷：この地域は岩淵筋という将军家の鷹場に属した。『武藏国風土記稿』の下駒込村の項によると、御鷹部屋（飼育施設）、御鷹匠屋敷、御鷹匠同心組屋敷、御鷹仕込場などもあつた。

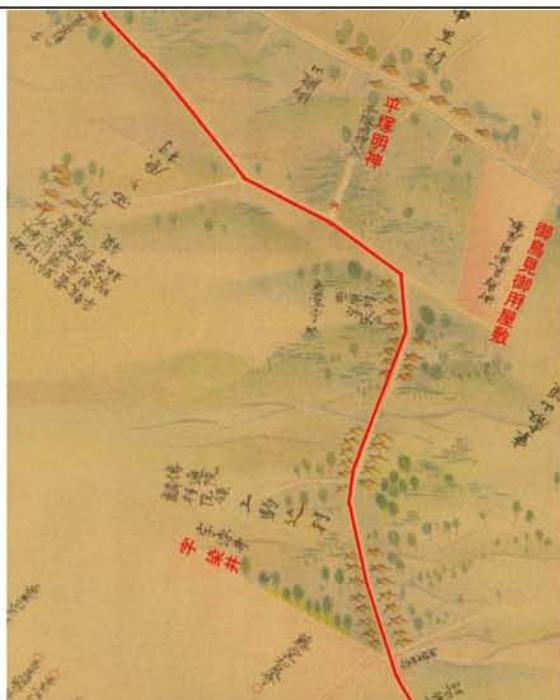


図6 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

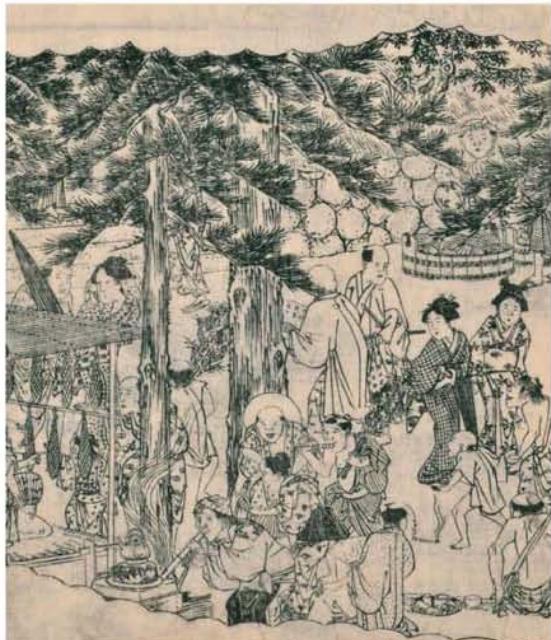


図8 江戸名所図会 駒込富士浅間社 六月朔日富士詣

・**麟昌院**：麟祥院の誤記。
・**上駒込村**：『武藏国風土記稿』に「此辺は薄土なれば樹木に宜く、穀物に宜からず。」庭樹及び盆栽等に草木を作りて産業とするもの多し」とある。小字の「染井」については、將軍吉宗

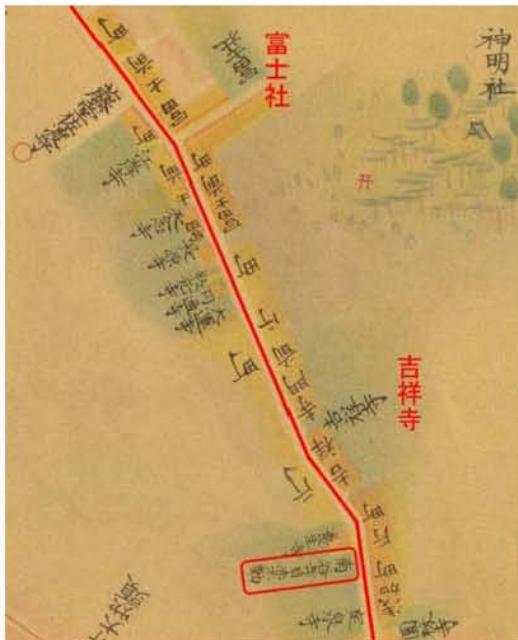


図7 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

が植木屋伊藤伊兵衛家の花壇、植木溜を御覧になり霧島つづじなど二十九種類の御用木を命じたことなどを詳細に紹介している。この地はソメイヨシノを生み出すなど、江戸のガーデニングブームを支えていた。

□**白須甲斐守下屋敷**：江戸府内図で確認する

と、白須甲斐守下屋敷は松平但馬守屋敷の向かい側であるので、欠字は「左」である。

江岸寺：曹洞宗の見海山江岸寺。

・**富士の社**：江戸時代には「江戸八百八講、講中八万人」といわれるほどに富士講が流行し、多くの富士塚がつくられた。駒込の富士浅間社も代表的な富士塚として知られる。『新編武藏風土記稿』では「一丈余の塚上に鎮座す。」

例祭毎年六月朔

日。前日より参詣

の人群集す。此

日、小児の飴物に

麦藁をもて作り

し蛇を売る」と記

している。



図9 守貞謹稿 富士詣の麦藁

・**天念寺、教覚寺、南國寺**：文政九年に各寺が幕府に提出した『駒込寺院書上參』で確認すると天然寺、教元寺、南谷寺の誤記である。図7も天念寺としているが、こちらも誤記である。

・**吉祥寺**：図10では学寮が目につく。吉祥寺は曹洞宗の寺院で、僧侶を養成する梅檀林が置かれ、多くの学僧が仏教と漢学を学び、駒沢大学の前身となつた。

元々は神田駿河台に所在したが、明暦の大火灾を期に駒込に移転した。吉田伸之（2015）によると、明暦三年の大火灾では江戸城や大名屋敷群

を含む江戸の大半が焼き尽くされた。幕府は「江戸市中の空間構造をリセットするかのように、一回りも二回りも外縁部へと拡張する方向で、江戸の大規模復興に乗り出した」という。

明暦の大火灾では吉祥寺以外にも高林寺、天栄寺、定泉寺などの寺院が駒込に移転を命じられ、駒込の日光御成街道沿いに寺町とその門前町を形成することになった。

江戸府内図では図7のよう、寺社地は緑色で区別されている。

・**目赤不動**：元来は伊賀国の赤目山に由来する赤目不動尊を祀る庵であった。『駒込寺院書上參』に記載された南谷寺の書上によると、将軍家光が御鷹狩りの折りに庵に立ち寄り、「赤目不動尊ヲ目赤ト以来申すべき旨、御上意ニテ」、この日の日記の記録者は目黒か目赤かの判断が付かなかつたよう両方を併記している。

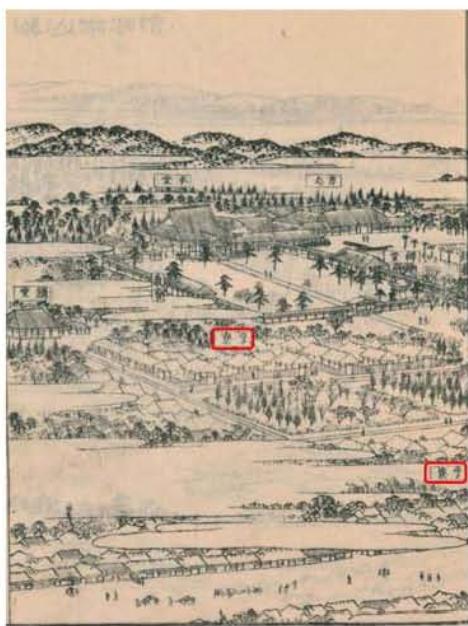


図10 江戸名所図会 吉祥寺

土物店：土物とは土のついたままの野菜のこと。近隣の農民たちが江戸市中へ野菜を売りにいく途中で、この地で休憩するのを常とした。いつしか天栄寺門前、高林寺門前、浅嘉町で青物市が始まり、「御府内備考」では十四軒の青物問屋の名を記している。そのためこの辺りは「土物店」、「駒込辻のやつちやば」と呼ばれ、神田、千住と共に江戸三大青物市場の一つとして知られた。

図11の赤枠で囲った「四軒寺町 御先手組」は測量隊員の坂部貞兵衛と青木勝次郎が住んでいた組屋敷である。

柴山傳左衛門が記録した第六次測量の隊員名簿（伊能測量隊旅中日記 上）『愛媛県立歴史文化博物館研究紀要』第6号によると、坂部貞兵衛と青木勝次郎は「御先手 能勢市十郎組同心」と記されている。武鑑によると能勢市十郎は一千石の旗本で、御先手御鉄砲頭をつとめていた。与力六騎と同心三十人を配下に置き、その組屋敷は駒込であつた。

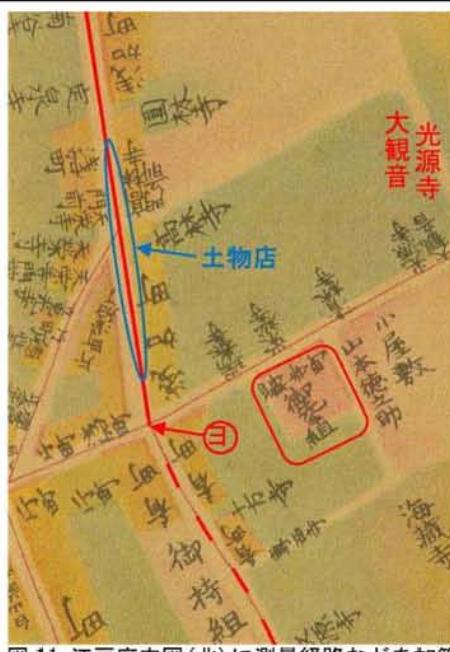


図 11 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

第六次測量に出立する際、忠敬一行は出発地点の王子村に向かう途中、駒込大觀音前で坂部貞兵衛と出会い、同道して青木勝次郎方に立寄つて、一緒に王子村に向かつた。

西善寺：図12の西善寺には、国後島・押堤島など北方探検で知られる近藤重蔵の墓がある。

忠敬の『江戸日記』の文化四年六月十二日に近藤重蔵に中図二枚を貸したとの記事があり、両者の交流がうかがえる。

駒込片町：中山道沿いのこの地域は、御用地として没収され武家屋敷や寺領となり、村民は中山道の東側に移され片側町となつたため、駒込片町と称した。

九軒屋敷：『駒込町方書上』によると、御家人など九人の拝領町屋敷



図12 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

であつたことから駒込九軒屋敷が町名となつた。此の辺の中山道の道幅は四間であつた。

三条辰之丞：図12に「三上」とあるように「三條」は誤記。『寛政譜』によると三上辰之丞季

達は五百五十俵の蔵米取。戸田主水：五〇〇石の旗本戸田氏友のことである。『日記』では「主水」、図12では「主膳」と記載されているが、『寛政譜』で確認すると、通称として「主膳、源五郎、主水」と記載されている。後に嫡男の戸田伊豆守氏栄は浦賀奉行としてペリー艦隊来航時の折衝役となつた。阿部備中守屋敷：備後福山藩の中屋敷で九万坪余の広大なものであった。幕末の藩主阿部正弘は老中首座としてペリーの浦賀来航から日米和親条約の締結に至る開国問題を主導した。

白山権現：加賀白山の白山神社を勧請したも

ので小石川の鎮守であり、江戸における白山信仰の中心となつた。また將軍綱吉と生母桂昌院の保護を受けたことで知られる。

小石川御数屋町：小石川御数寄屋町の「寄」を書きおとしている。『御府内備考』によると天和年間に御数寄屋坊主の拝領町屋敷となつたことに由来する。御数寄屋坊主は茶室・茶礼・茶器をつかさどり、將軍・大名・諸役人に茶を調進した。

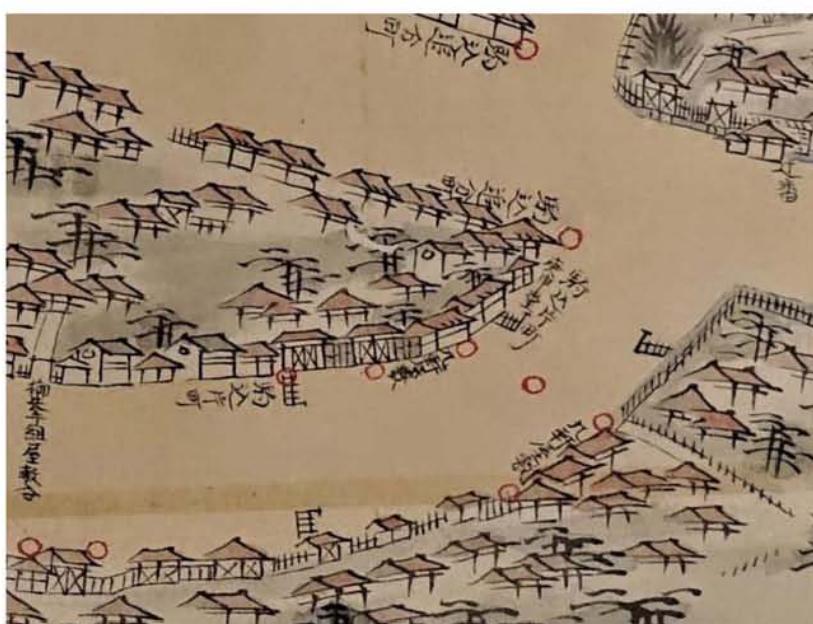


図13 中山道分間延絵図 駒込追分・駒込片町

兵橋屋鋪	此邊俗に 鶏声ヶ久保といふ
右土井大炊頭屋鋪限	(左大久保八五郎屋敷、左坪井善太郎屋鋪、左土井淡路守屋敷、左酒井河内守屋敷)
右土井大炊頭屋鋪限、右野間太門屋敷、右横通り、右関口藤七郎屋鋪、右山口	(真次郎屋敷、右横町、右小泉八兵衛屋敷、右太田伊織屋鋪、左酒井雅楽頭守屋敷)
右天野清兵衛屋敷	(左天野清兵衛屋敷、右天野清兵衛屋敷)
木戸巢鴨御駕籠町	(木戸巢鴨御駕籠町、又右横町中町通り)
是より右松平加賀守中屋鋪	(左右横町、右長谷川長五郎屋鋪)
是より巣鴨町下組	(町家と成る。又右横町、左横町中町通り)
是より巣鴨町上組	(木戸巢鴨御駕籠町、又右横町中町通り)
巣鴨中組	(巣鴨町下組、右駒木根大内記屋鋪)
巣鴨中組	(巣鴨町上組、右横町木戸)
備中守下屋鋪	(備中守下屋鋪)
巢鴨上中組	(巢鴨上中組、御用屋敷、渋江長伯御預)
巢鴨上組	(巢鴨上組、右横町木戸)
備中守下屋鋪	(備中守下屋鋪)

・鶏声ヶ久保：図14にも「此邊曰鶏声ヶ久保」とあるが、図15のように傾城ヶ窪とも呼ばれた。『御府内備考』によると、むかし土井大炊頭利勝の屋敷の地中から夜ごと鶏の声が聞こえたため、地面を掘ったところ金の鶏が出てきたことからこの名が付いたとある。図14を見ると、この先の中山道は大名や旗本の武家屋敷が続くので、鶏声ヶ窪が町場の最後の場所だったのだろう。図15には人馬の往来で賑わう中山道の様子がうかがえる。『本郷区史』によると、図15左侧の「即席御料理」とある料亭万金は中山道の立場茶屋に始まり、奥州諸大名の送迎休憩所にもてられるようになつたという。右上に「卵の厚焼大鉢へ数万金」とあり、厚焼玉子が名物なのだろうか。

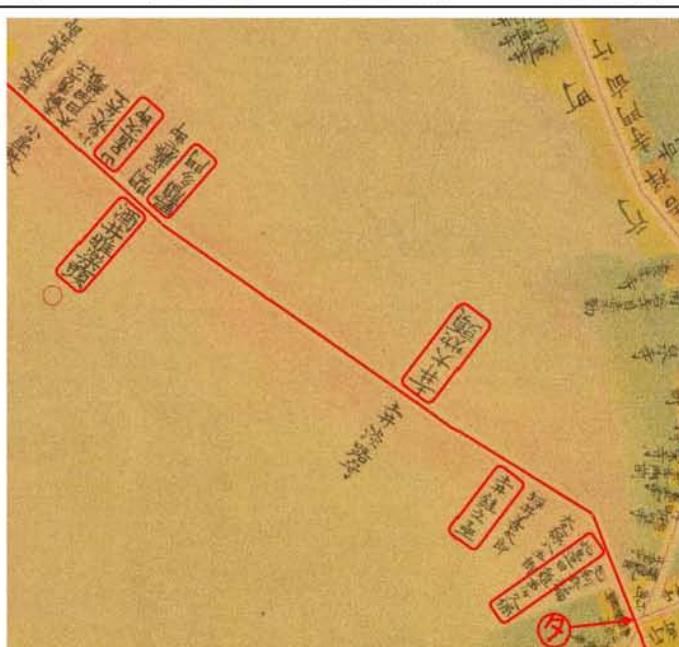


図14 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆



図15 広重 江戸高名会亭尽 白山傾城ヶ窪 万金

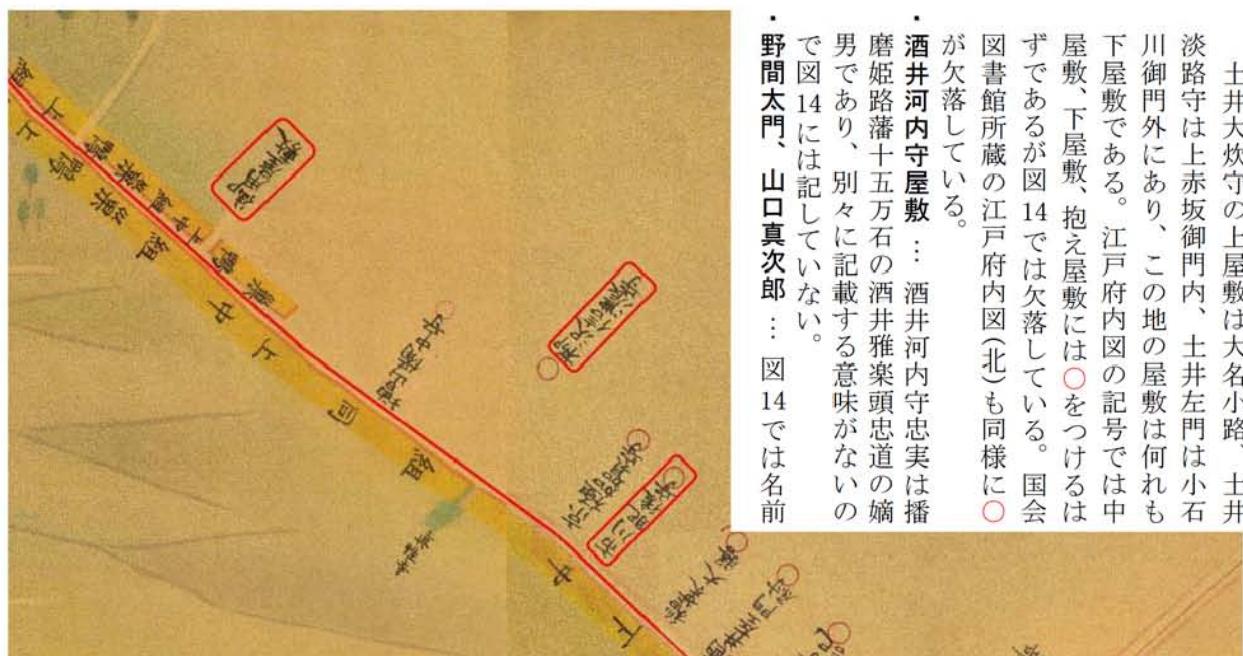


図14を見ると、鶏声ヶ久保を過ぎると中山道の両側は武家屋敷が続き、中でも土井家が目立つ。江戸初期に権勢を振るつた土井利勝に始まる下総古河藩土井家七万石が宗家で、当主の土井大炊守利厚は時の老中である。三河刈谷藩土井淡路守利以は利勝の三男の家系で二万三千石、土井左門は同じく五男の家系の五千石の旗本で銅之允に代替わりした。

図14によると、野間多聞、山口直次郎と記されているが調査未了。

巣鴨御駕籠町：『巣鴨町方并寺院書上』によると、町名は御駕籠の者五十一人の大縄拵領町屋敷となつたことによる。

大久保安芸守：図16では加賀守と記している。文化七年の時点で既に相模小田原藩主の大久保忠真は安芸守から加賀守に官職名を変更していた。

石川肥後守：図16の市川肥後守清素の誤記。一千石の寄合席の旗本。

柳沢信濃守屋敷：元禄八年に五代將軍徳川綱吉の側用人柳沢吉保がこの地を賜つて下屋敷を造り、回遊式築山泉水庭園の六義園を作庭した。

御用屋敷、渋江長伯御預：『沿革図書』二十貞によると、寛政十年に奥詰御医師の渋江長伯が管理する薬園となつた。

土井大炊守の上屋敷は大名小路、土井川御門外にあり、この地の屋敷は何れも下屋敷である。江戸府内図の記号では中屋敷、下屋敷、抱え屋敷には○をつけるはずであるが図14では欠落している。国会図書館所蔵の江戸府内図(北)も同様に○が欠落している。

酒井河内守屋敷：酒井河内守忠実は播磨姫路藩十五万石の酒井雅楽頭忠道の嫡男であり、別々に記載する意味がないので図14には記していない。

野間太門、山口真次郎：図14では名前

芝増寺領 巢鴨村	右庚申塚大子道 左大塚道追分	滝野川村	宇三軒原 支配所 板橋宿
芝増上寺領 巣鴨村	(右に庚申塚。右口子道 左大塚道追分)	滝野川村	宇三軒家 (大岡□□□) 支配所 板橋宿
一里塚	(此所より一町ばかり右へ引込 加州下屋鋪)	一里塚	(左側ばかり 滝野川村入会字平尾 右共板橋宿左)
白子道追分	(地蔵の前、文化十一戌年 五月二十二日御用杭印繋ぎ畢る)	白子道追分	(一里二十〇 町〇五間五尺 追分より合 一里〇六町二十〇間五尺)
惣圖	三十四町辛酉同文 七時帰宿	惣圖	三十四町辛酉同文 七時帰宿

庚申塚：原文の「口子道」の個所は虫損しているが、庚申塚は中山道と王子道・大塚道が交差する場所にあるので「王子道」と判断出来る。

『遊歴雜記』には、庚申塚の四ツ角には立場（休息所）があり、よしず匂いをして煎茶を売る茶店四軒を団子茶屋と称すると記載されている。図17には休息する人々が描かれ、手前では団子を焼いている。図の右上に見えるのが庚申塚であろうか。

大岡□□□：名前が虫損で判別出来ないが、「支配所」とあり代官支配地を示しているので

代官の名前が記載されている。『県令譜』や『武鑑』などから武藏国担当の代官である大岡源右衛門であろう。

加州下屋敷：二十一万七千九百三十五坪の加賀藩下屋敷。加賀藩の江戸屋敷は中山道に沿つた本郷の上屋敷・駒込の中屋敷・板橋平尾の下屋敷と、深川黒江町の藏屋敷という四屋敷体制をとつていた。

中山道の最初の宿場で日本橋から二里である。往来する旅行者が絶え間なく、旅籠や酒屋が軒端を連ね、繁昌している土地である。宿場の中程を流れる石神井川に架かる小橋があり、板橋の名はこれに由来する。

文化十一戌年五月二十二日：第八次測量を終えて、川越から白子村（現埼玉県和光市）を経て平尾宿で中山道に出た。平尾宿は板橋宿の南側の入口であり、川越街道との分岐点（白子道追分）でもあった。『測量日記』には「板橋宿中山道に出、追分地蔵の前迄、一里十町十八間」とある。追分地蔵の前の板橋の御用杭に繋いだがある。追分地蔵の前の板橋の御用杭に繋いだとあるが、図18のどの辺にあつたのだろうか。『歴史の道調査報告書 中山道』によると、中山道と名所図会』の本文には次のように記している。

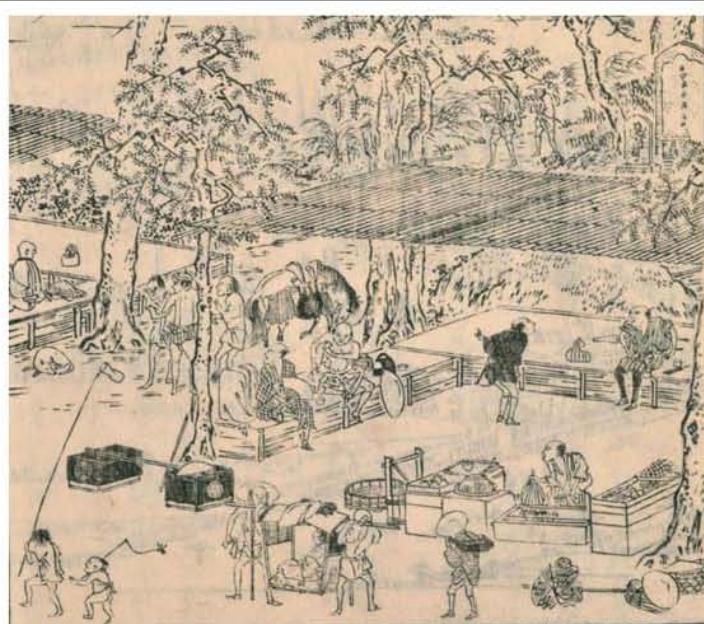


図17 江戸名所図会 巢鴨庚申塚

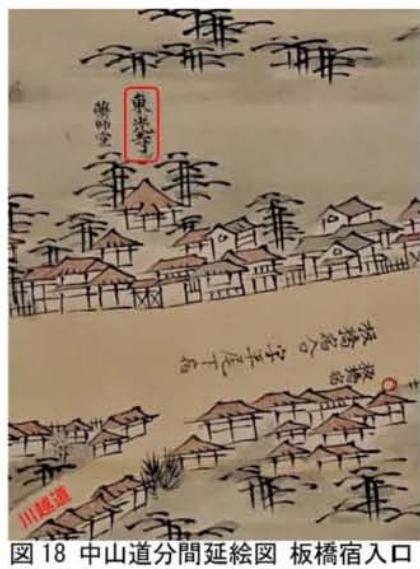


図18 中山道分間延絵図 板橋宿入口

川越街道の追分にあつた地蔵は現存しており、東光寺に移されているという。東光寺HPによると、図20の中守護の地蔵は享保四年に建立されたもので全高三メートルとのことである。

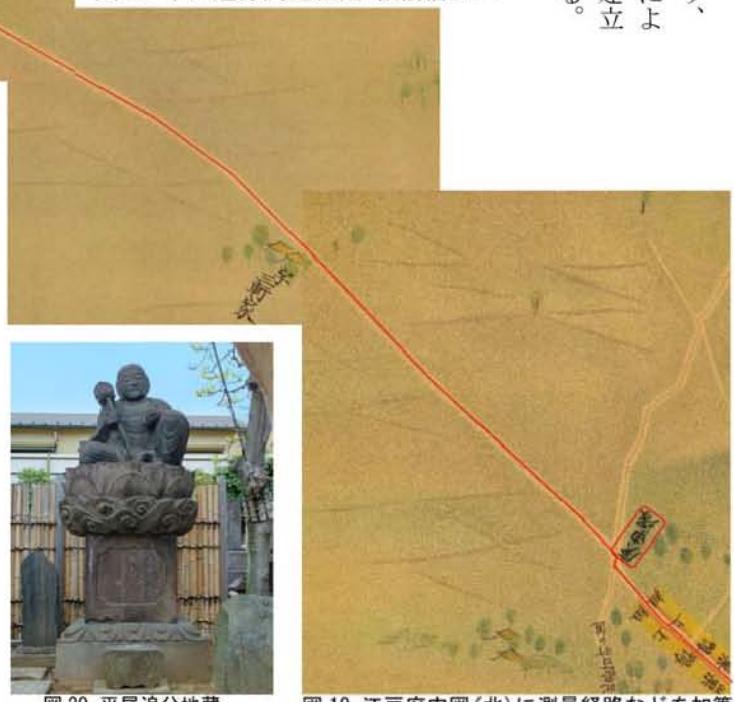


図19 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆



図20 平尾追分地蔵

【図版の出典】

『日記』の図版は香取市立伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。

図2・6・7・11・12・14・16・19の江戸府内図は『東京市史稿市街篇附図第二』による。

図1・3・4・5・8・9・10・15・17は国会図書館

デジタルコレクションによる。

図13・18は東京国立博物館所蔵である。

図20は板橋区の東光寺のHPによる。

【参考史料】

- ・『町方書上』『寺社書上』(文政八～十一年)
- ・『御府内備考』(文政十二年)

- ・新編武藏風土記稿』(文政十三年)
- ・『十方庵遊歴雑記』(文化十一年)
- ・『江戸名所図会』(天保八年～)
- ・『武江年表』(嘉永二～三年)
- ・『守貞謨稿卷』(天保八年～)
- ・『伊能測量隊旅中日記 上』
- ・『愛媛県立歴史文化博物館研究紀要』第6号
- ・『寛政重修諸家譜』(寛政譜)
- ・『県令譜』
- ・『寛政重修諸家譜』(寛政譜)
- ・『武鑑』(文化十一年～十三年)
- ・『中山道分間延絵図』(文化三年)
- ・『御府内場末往還其外沿革図書』(沿革図書)
- ・『武鑑』(文化四年～安政五年)
- ・『柳営補任』(大日本近世史料)所収)

【参考文献】

- ・『都市 江戸に生きる』吉田伸之 (2015)
- ・『観光都市 江戸の誕生』安藤優一郎 (2005)
- ・『新潮新書』岩波新書 日本近世史④
- ・『歴史の道調査報告書 中山道』
- ・『京都教育庁生涯学習部文化課』(1994)
- ・『東京都立教育研究センター』(1998)
- ・『板橋区史』(1998)
- ・『文京区史』(1981)
- ・『本郷区史』(1937)
- ・『小石川区史』(1935)
- ・『北豊島郡誌』(1918)
- ・『江戸幕臣人名事典』改訂新版 (1997) 熊井保編
- ・『江戸幕臣人名事典』改訂新版 (1997) 熊井保編
- ・『寛政譜以降旗本家百科事典』(1997) 小川恭一
- ・『新人物往来社』
- ・『東洋書林』

土佐の伊能測量4 四国縦断編

福田 仁

今回は、伊能測量隊の本隊が高知城下に留まっている間、坂部貞兵衛率いる支隊（別手）が城下から北上し、伊予・土佐国境の 笹ヶ峰に到達した「四国縦断」の行程をたどってみたい。

この南北測量は、土佐藩の参勤交代道（北山道）が利用された。高知城下を出た土佐藩の大行列は、 笹ヶ峰を越えて伊予に出た後、瀬戸内海を船で渡り、播磨国などから陸路、江戸に向かった。およそ1カ月、約800キロの長旅で、総勢2800人を超える年もあつたという。

そもそもその参勤交代ルートは、船で土佐沿岸を東進し、室戸岬を回る海上ルートだった。しかし天候に大きく左右されるため享保3（1718）年、四国山地を越える北山道に変更した。これが坂部隊による四国縦断の90年前である。街道として徐々に整備された既存インフラを、伊能隊は有効活用したわけだ。

坂部隊に付き添った土佐藩役人、奥宮正樹の日記によると、伊能隊が阿波から越境して土佐・甲浦に入った初日、唐突に四国縦断の意図を告げられた。文化5（1808）年4月19日の彼の記述を、現代語訳して引用する。

事前の通知では、甲浦から宿毛までの（土佐の海岸沿いの）街道を通ることだった。これに加えて北山路（四国縦断の山岳ルート）も伊予・土佐の国境まで行くという。この件についても藩庁へ消息を遣わした。

四国縦断計画を聞かされた正樹は、即座にこれ

を重大事項と認識した。心中で「えっ？ 聞いてないんですけど！」と悲鳴を発したに違いない。正樹は、伊能隊到着から数日間、不眠不休で各種対応に追われている。そして4月24日、次のように書き記している。

笹ヶ峰までの測量は、坂部組が別行動で行くと今宵、決定した。そのことも藩庁へ申し遣わした。また昨日、「土佐の画図に各河川、主要山岳の険夷大小、札を付けて出せ」と命じられたので、記して坂部に提出した。

この手際よさも、さすがである。事前の情報収集で知った他藩の事例が念頭にあつたのだろうか。いずれにしても當時、資料一式を持ち歩かなければできない対応だ。坂部も内心、「むつ、この男で生きる！」と感嘆したに違いない。かような人間模様を（想像を交えながら）うかがえる点にも、奥宮日記の価値がある。

【高知市布師田】

3年前、「高知新聞」紙上で忠敬没後200年記念企画を終えた後、高知市布師田（ぬのしだ）在住の岡本純一さんからお声掛けがあり、浅学ながら「伊能測量と布師田」について講演させていた。布師田はかの奥宮正樹が居住し、かつ四国縦断測量の舞台ともなった、ゆかりの地である。岡本さんは住民組織「布師田の未来を考える会」の一員として、各所に歴史案内看板を設置するなど、地域学習に取り組んでこられた。そんな岡本さんの案内で今春、地域を丹念に回った結果、さまざまな痕跡が見えてきた。

高知市中心部から東北へ約4キロ。JR土佐一宮駅の東方、小山の南麓を、狭い県道が通つてい

る。これが布師田の旧参勤交代道だ。西の入り口付近に「送り番所」跡を示す看板が建てられている。道の両脇には、石垣を築いた立派な伝統家屋が多い。

「布師田ふれあいセンター」のある辺りが、この街道で最初の宿場となつた「御殿跡」。藩主の行列はここで往路に旅装を整え、帰路には旅装を解いた。

布師田の参勤交代道はいくつかのルートが存在した。旧街道の趣を今にとどめるのは、前述の送り番所跡、御殿跡などある国分川北岸の道で、グーグルマップには「土佐北街道」と表示される。川の南岸にもルートがあつた。伊能図の測線を見れば、支隊はこの南岸ルートを測量している。

支隊が四国縦断に出発した5月1日、奥宮日記に「布師田村庄屋、奥田常右衛門家にて昼食出す」とある。「考える会」の歴史パンフレットによると、近くの「葛木男神社」拝殿再建の棟札（文化元年）に「大庄屋、奥田常右衛門」の名前があるという。



右手の家屋辺りが奥宮邸跡。

手前道路の左手が国分川

年代的にもまさに同一人物。岡本さんが、南岸

にある庄屋敷跡を教えてくれた。測量ルートのすぐ脇だつたはずだ。

奥宮正樹邸跡は、この庄屋敷跡から、国分川を隔てて直線距離で約350メートル北東。北岸の旧街道沿いに、奥宮家跡を示す歴史看板が設置されている。

奥宮家跡のすぐ東に「真言宗西山寺」がある。本堂の裏手から北へ続く小道を、道なりに100メートルほど登ると、「寿宝明神」の石の鳥居と小さな社がある。そのすぐ背後が、奥宮家の墓所。正樹の墓石は正面に「奥宮弁三郎正樹」、側面に「嘉永六癸丑歳 四月十三日歿」「年七十五」と刻まれている。なお、たびたび引用させてもらう奥宮日記は、本誌84号と86号（平成30年）に全文が掲載されているので、ぜひご覧いただきたい。



奥宮弁三郎正樹の墓（右端）

【推測あれこれ】

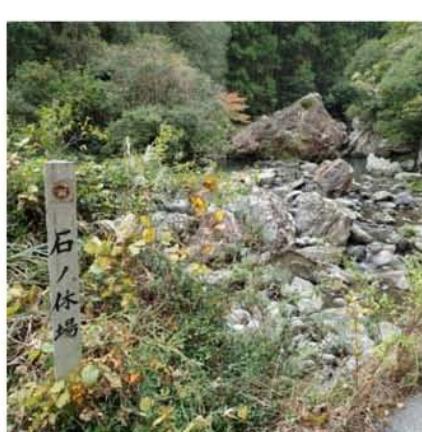
布師田地区の東端、県道「後免—中島—高知線」脇の畑に、郡境の石碑がある。上部が欠損し、傾きながらも、けなげにそこに存在し続けた。石には「（従）是西 土佐郡」「（従）是東 長岡郡」と

刻まれている。今も正確に高知市布師田と南国市岡豊町中島の境である。伊能図中、朱の丸印で示された郡境は、この場所だろうか。なお同様の石碑が約300メートル西の土手際にもあるが、これは「別の場所から移設された」とも伝わるが、本来の設置場所など詳細は不明という。



「(従)是土佐郡」と書かれた郡境の石碑

伊能図を見れば、常通寺島村で、朱の側線が逆「く」の字に折れ曲がっている。「この形状で思い当たる場所はありますか？」と岡本さん尋ねると、即座に車で案内してくれた。上述の県道を東へ進む。途中、旧中島村の住宅地に差し掛かると、道幅狭く、車の行き違いは困難。ここもわずかながら、旧街道の趣が残っている。到達した場所は、変則的な十字路。そこから左手（北東）へ、伊能図とほぼ同じと思われる角度で、気持ち良いほど一直線の道が伸びている。過去には、ここから東進すれば室戸方面へ。左手に折れれば北山道。そんな重要な分岐だったそうだ。坂部隊は、この地点で北山道へと方向を転じたのではないだろうか？ 以上、推測ではあるが、何かの参考になれば



奥宮日記にも出てくる「石の休場」

ここからは3年前、権若峠を含む北山道を、筆者が自転車と徒步で北上した道中を紹介する。高知城下を自転車で出発した後、亀岩を経由して、何度も迷いながら登り口に到達。「権若峠・釣瓶登山口」と書かれた標柱がある。日を改めて、徒步でこの権若峠を登る。平成の中ごろには、住民らがこのルートを「歴史の道」として整備していたようだ。現在では所々で倒木が道をふさいでいるほか、道が土砂で埋まって消えている場所も

ばかり書き記しておく。

【権若峠】

奥宮日記に、亀岩で休んだ後、「権若（ごんにやく）坂」から険しい山道になつたとある。坂を上がり詰めた権若峠は標高約550メートル、北山道で最初の難所だ。以下、奥宮日記よりの引用。権若坂の山路は険しかった。石ヶ休場、中の休場、峠の休場などがあった。（略）山道は木々の枝に覆われ、曲がりくねり、思うように縄も引けない。所々で器具による計測※を行つた。

（※小象限儀で高低を計測している。）

見受けられる。登山者は、ほぼ途絶えているようだ。

道は曲がりくねっている上に、木々が茂って見通しが悪い。伊能測量の時代には、少なくとも現状よりは街道らしく整備されていたはず。そうだとしても、この山中で、よく測量が成り立つたものだ。あちこちにかつての「休場（やすば）」を示す古びた看板があった。急斜面でわずかに開けたなだらかな場所では、看板に「中休場（行列を止め、人馬を休ませた）」と書かれていた。

高度を上げるにつれ、ますます道は判然としなくなつた。そろそろ峠かと思うころ、背の高いスキやセイタカアワダチソウが密生するやぶに、行く手を阻まれた。視界が閉ざされ、身体の自由も利かない。あきらめて引き返そうとした時、数メートル先に人工物の一部が見えた。やぶをかき分けると、権若峠を示す標石だつた。地形的には、いわゆる鞍部（あんぶ）。少し開けた場所で来た方向を振り返れば、太平洋と南国市との平野が視界に入つた。峠から北へと降りていこうとしたが、道の痕跡すら見当たらず、南麓へと引き返した。

【權若縣】

支隊の宿泊地の一つが穴内（あない）村。昭和39年に穴内川ダムが完成し、集落は湖底に沈んだ。過日、南麓からたどり着いた権若峠を、今度は北麓のダム湖から目指して、自らの足跡をつけようと試みた。北側のルートも、基本的にはなげようとした。それでも所々に、色あせ破損した「北山道」の案内板があり、自分の進む方向が間違っていることが分かる。地図とコンパスを頼りに、地形を読みながら、権若峠に到達した。低山なの



棚田地帯を下り、本山の町へ



穴内川ダム湖。旧村落は湖底に

穴内—国見峠—古田をつなぐ山越えの北山道は地形図にそれらしきルートがうかがえたものの、現状が分からないので、少し西の県道を自転車で走った。標高約800メートルの赤荒峠を、主に

愛媛・高知県境の笠ヶ峰は、標高1016メートル。その南麓（高知県側）に位置するのが立川の集落だ。江戸期には、集落内を流れる溪流を挟んで東に下名（しもみよう）、西に上名（かみみよう）と二つの番所が存在した。

愛媛・高知県境の笠ヶ峰は、標高1016メートル。その南麓（高知県側）に位置するのが立川の集落だ。江戸期には、集落内を流れる渓流を挟んで東に下名（しもみよう）、西に上名（かみみよう）と二つの番所が存在した。

【本山町一大豊町】

は自転車を押しながら越えた後、棚田の絶景を見渡しながら坂を急降下。下りきると、吉野川沿いに本山の町が開けている。

は自転車を押しながら越えた後、棚田の絶景を見渡しながら坂を急降下。下りきると、吉野川沿いに本山の町が開けている。

内—土佐を結ぶ交易拠点として栄えた過去がうかがえる。



奥宮正樹が宿泊した立川番所（右）。
左に高知自動車道

代道は、愛媛県側（四国中央市）では「土佐街道」と呼ばれる。 笹ヶ峰山頂を、今度は愛媛県側から目指す。新宮インター近くに車を停め、土佐街道を登った。案内板はどれも古びて、倒壊したものも見受けられる。それでも道は広く明瞭で、迷う心配は全くなかった。



笹ヶ峰の南山腹より南を臨む。
右下に高知自動車道

隊員の一人、柴山伝左衛門は同日の「旅中日記」に、「元（本）山頼右衛門預かり番所」に宿泊したと記している。「番所よほど広し」とも。これがつまり西の上名の番所だ。「旧立川番所保存会」の石川靖朗さんが、「本山氏番所」跡地を案内してくれた。跡地は地元で「ごてんとこ（御殿処）」と呼ばれてきたという。二つの番所間の距離は、直線で約350メートル。

聞けば石川さんは、この本山庄屋の子孫という。開いてくれた特大の家系図の中に「本山頼右衛門」の名を見つけることができた。今回の旅も、測量協力者の子孫の方との出会いがあった。立川から笹ヶ峰までの旧街道は、やはり各所で崩落。あきらめ切れず大きく迂回した山道でも大規模な崩落があり、高知県側から笹ヶ峰山頂を目指すことは断念した。

【愛媛県・四国中央市】
高知県側で「北山道」などと呼ばれる旧参勤交代

奥宮日記には笹ヶ峰山頂の国界に到達した時、「予州（伊予）より名主めぐ人二人出會たり」「名主の一人は宇摩郡の大庄屋なり」とある。伊予側から大庄屋らが険路を登り、伊能隊到着を待ち受けていた。忠敬の「測量日記」には「予州より出迎者」として5人の名を列挙し、彼らから瀬戸内までの各村の道のりを聴取したむね記述されている。

文化5年4～6月にかけて土佐を歩いた伊能隊は、次に伊予に入り、時計回りの四国沿岸の測量を続行。同年9月、坂部隊が瀬戸内海側（現四国中央市）から南下して笹ヶ峰に到達した。9月10日の柴山日記に、「去五月六日、土佐高知城下より入りし打止杭に繋ぎ終る」とある。

伊能図に描かれた四国を見れば、その中央を朱の測線が貫いている。曲がりくねりながらも、瀬戸内海と太平洋がしっかりと結ばれている。険路とはいえ、四国という島を最短距離で横切る、理にかなったルート選択だった。忠敬以下、毎日の現場作業をこなす一方で、先々の行程の情報収集や検討作業にも、相当の労力をつぎ込んだことだろう。彼らを突き動かした情熱の根源に、遠く思いをはせた。

絡にも、この犬の飛脚は活躍したのだろうか？



四国縦断ルートで最も標高が高い
笹ヶ峰山頂



徳島大学附属図書館所蔵「大日本沿海図稿（南海）」

(徳島大学附属図書館館ホームページ「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」で閲覧可能)

URL : <https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/z/z013.html>

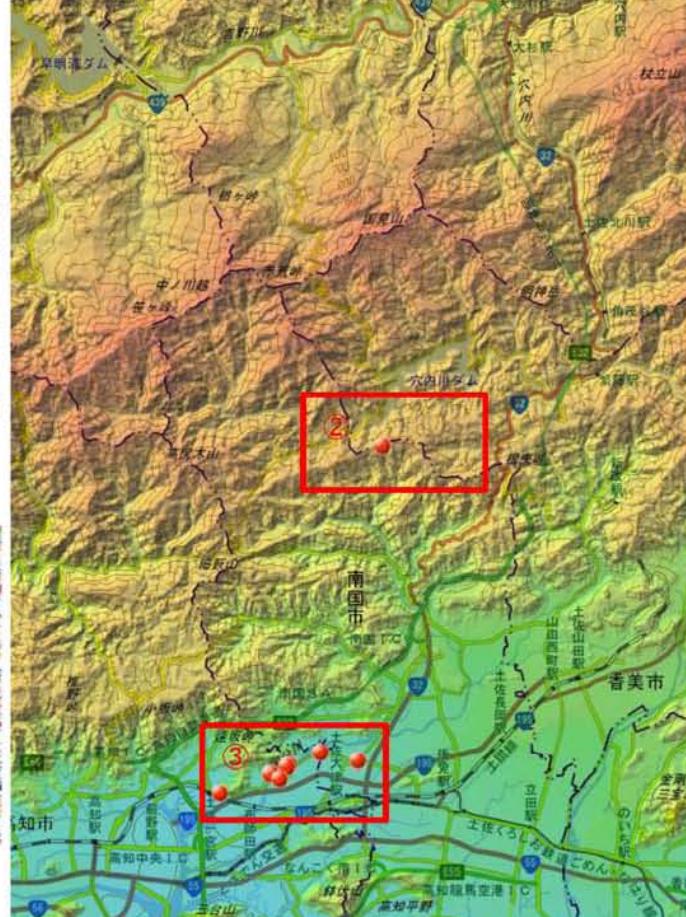
主な地点の位置図



右図①の範囲の拡大図



右図②の範囲の拡大図



右図③の範囲の拡大図



主な地点の経緯度

「地理院地図」に主な地点を表示

場所	緯度	経度
布師田・石渕「送り番所」跡	33度34分43.79秒	133度34分49.28秒
御殿跡	33度35分0.47秒	133度35分42.30秒
奥宮家跡	33度35分6.23秒	133度35分58.86秒
西山寺（背後に奥宮家墓所）	33度35分8.98秒	133度36分0.43秒
奥田庄屋敷跡（昼食場所）	33度34分56.33秒	133度35分50.83秒
郡境の石碑（高知市・南国市境）	33度35分19.16秒	133度36分34.05秒
常通寺分岐（逆「く」の字カーブ）	33度35分12.19秒	133度37分13.98秒
権若峰	33度39分46.45秒	133度37分39.99秒
旧立川番所書院（奥宮正樹宿泊）	33度50分55.75秒	133度38分58.12秒
本山氏番所跡（柴山伝左衛門宿泊）	33度50分48.05秒	133度38分48.60秒

江戸実測図（東京市版）考察

柏木 隆雄

東河伊能君墓銘并叙 江都一齋佐藤坦爲文

靖国通りに面する神田神保町の古書街から猿楽町寄りに少し入った所にS書房がある。

古書店と言うよりも、昔風に古書肆と名乗つているような店である。間口は一間もない。書架と書架の間を人ひとりやつと通れる狭さの小さな店半世紀を越してこの地域に事務所を持つ小生。古書店街を逍遙する長年の経験から、どの店が何を得意とするか、また専門かはおおよそ見当がつく。

S書房は歴史物、特に蝦夷、アイヌ、北海道開拓に関する古本が揃つていて界隈では一番かと思う。伊能忠敬測量の「江戸実測図」一鋪はこのS書房で購入した。大谷亮吉「伊能忠敬」の初版本を以前この店から求めたことから店主とも顔なじみになり、店の在庫目録が時々送られてくる。最近のものにこのような記載があつた。

伊能忠敬測量「江戸実測図」掲。東京市役所篇
昭3彩色一部小汚れ20枚〇〇〇円

どんなものかと、さつそく店を訪ねた。

重々しい錦地表装の函に20枚の測量図が二度折りされ重ねて納められていた。一枚の大きさは縦78センチ、横106センチ、紙は少し焼けているが、測量図の文字は鮮明で、押えた色調の絵図もそれほど褪色していない。この実測図には小冊子の解説書が付いている。外題は「東京市史稿市街篇附図第三」書き出しの部分を原文のママ写す。

江戸實測圖ハ、東河伊能忠敬ノ手ニ成ル。忠敬ハ佐藤坦撰スル所ノ墓銘叙記ス如ク、

以下は浅草源空寺の忠敬の墓石に刻された顕彰文が丸写しで記されている。

続いては、高橋景保の文書からの転載で、実測図測量から完成に至る経過、測量日程、従事者の詳細が記されている。

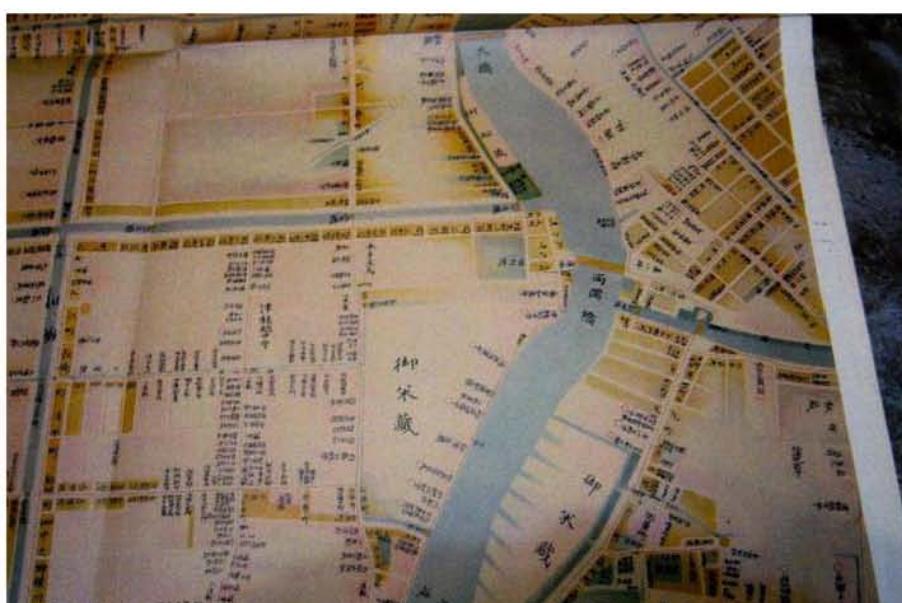
奉命により、忠敬が十余年をかけて、五畿七道二島の沿海、街道を測量し日本全図となつたが、ここに江戸実測図を加えて江都の詳細を明らかにした。

文化十四年丁丑 秘書監兼日官臣高橋景保謹誌と末尾に記されているので、これは幕府への上呈時、実測図に添えた文書である。

以上を前文として東京市篇の解説書は、忠敬の「江戸実測図」をこの時節に、なぜ出版したのかの本意を縷々記述しているので、原文を転写する。

而シテ上呈スル所ノ諸圖ハ、藏シテ紅葉山文庫ニ存セシモ、王政維新後、政府權大外史塚本明毅等ヲシテ地誌ヲ纂修セシメ、日本輿地大小圖沿海實測錄以下、参考用トシテ之ヲ地誌課ニ保管シ、明治六年五月五日ノ皇城炎上ニ際シ、一朝舉げテ烏有ニ歸セシム。乃チ忠敬ノ裔伊能氏ニ諭シテ之ガ副本ヲ献セシム。江戸實測圖副本、同ク献中ニ在リ。而來内閣文庫ニ藏シ、東京帝國大學圖書館之ヲ保蔵シタリ。大正三年三月東京大正博覽會開催ノ擧有ルヤ、東京市役所市史編纂室史料ヲ出陳スルニ方リ、審美書院ニ命シテ之ヲ贍寫セシメ、久保田鼎董督下ニ京橋九州俱樂部樓上ニ於テ影寫シタル者、即チ本圖也。是時堅九尺四寸横六尺四寸及堅一丈五寸横六尺ノ二幅ナリシヲ合シテ堅一丈九尺七寸五分横一丈二尺四寸ノ一圖トス。然ルニ大學圖書館保管スル所ノ原圖ハ、大正十二年九

月一日ノ震火ニ燒失シ、僅ニ一幅ヲ存スル市ノ寫本亦年ト共ニ漸ク褪色シ、紙上往々痕影ヲ失スル也。今之ヲ東京市史稿市街篇附圖第三ニ收メ、凸版印刷會社ヲシテ假ニ二十葉ニ分チテ刷刷ニ附セシム。大小色彩一二原圖ニ同シクス。江都ニ於ケル忠敬ノ遺業、或ハ永ク潛滅セサルヲ得ルニ庶幾カラム乎。



両国橋

(追記)
写真は江戸実測図、深川永代橋周辺の部分である。よく見ると黒江町の町名が六ヶ所に付けられている。忠敬の偶居、地図御用所は、その内のどこかと疑問を抱いた。
忠敬の江戸への出府前は、伊能三郎右衛門家の番頭の柏木幸七の江戸店であった。佐原からの物資の出入りに便利の川筋に面していたと思われる。
以前、本誌82号に、黒江町は松平加賀守、伊達遠江守の屋敷に隣接していると書いたがお殿様の屋敷の敷地内で商売をしていたとは思えない。ならば他の五ヶ所のどこか。

忠敬が、緯度一分の距離を求ようと実測した黒江町から暦局までの自筆の地図（測定メモのようないもの）では、方眼紙上に出発点を深川黒江町とだけ記しているので、位置の詳細は判らない。

現在、門前仲町の道路際に立つ忠敬住居跡の標柱は確かなものではない。地域の埋立てや都市計画による道路拡張などで、おおよそこの辺りの見識で据えられたものである。



江戸実測図表紙

なお、この江戸実測図の表装函に貼られた題紙には、朱で蔵書印が押されている。「村上蔵書印」と読みとることができる。
S書房には、村上元三氏の著作物や色紙、それに同じ蔵書印の押された古書などがあることから、この実測図は時代物作家の村上元三家から出たものと推察できる。村上氏の著作は伝記物が多く、「源義経」「平清盛」「真田十勇士」「勝海舟」「岩崎弥太郎」など。

「次郎長三国志」と共に、多くの読者を得て、また人気のテレビドラマにもなった「松平長七郎江戸日記」、村上氏はこれらの江戸物の時代背景と考証に、忠敬の江戸実測図を利用したのではない。
△
(柏木幸七子孫)



永代橋周辺拡大図

「携帯用磁石」

玉造功



図1 携帯用磁石



図2 携帯磁石の蓋と箱の中

図3は令和元年十月の伊能忠敬記念館の企画展の際に部品を組み立てたものである。各部品は図4のよう、ほぞ継ぎで組立てることが出来る。Aの円弧部や直線部には目盛りも確認できる。「携帯用磁石」という資料名で国宝指定されているが、木箱の中に納められた形狀から見て携帶用の象限儀であろう。

部品を組み立てた形状は図6の江戸中期の儒

はじめに
この「携帯用磁石」は、伊能忠敬の全国測量で使われたものではないと考えられることから、弯窓針や量程車など他の測量器具に比べて、あまり紹介されることのない国宝である。なお、図版は図6を除き千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵・提供である。

形状

図1のように木製の箱に着脱可能な真鍮製の方位盤がはめ込まれている。本体の最大長18.7cmで、盤上に縦横十文字の中心線が点々と刻まれている。蓋の部分を外すと、木箱の中には図2のように木製部品が十一点と象牙枠二点が収納されている。

図3は令和元年十月の伊能忠敬記念館の企画展の際に部品を組み立てたものである。各部品は図4のよう、ほぞ継ぎで組立てる

ことが出来る。A

の円弧部や直線部には目盛りも確認できる。「携帯用磁石」という資料名で国宝指定されているが、木箱の中に納められた形狀から見て携帶用の象限儀であろう。



図4 ほぞ継ぎ



図5 図3・Bの先端部

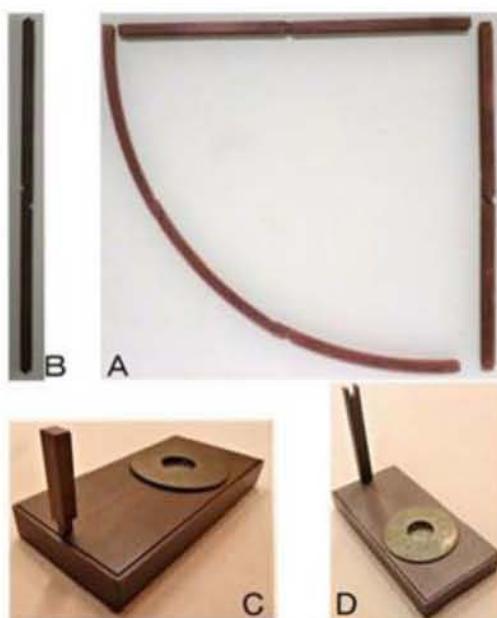


図3 組み立てた木製部品



図7 方位盤

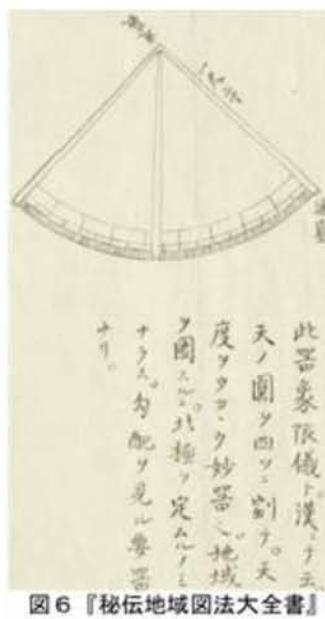


図6 『秘伝地域図法大全書』

家・書家で天文・測量に通じた細井広沢（一六五八・一七三六）が『秘伝地域図法大全書』第三冊で紹介したワタランテ（クワドラン、四分儀）に似ている。説明文を書き下して紹介すると、「此の器、象限儀と漢にて云う。天の円を四ツに割つて、大度を窺う妙器なり。地域を図するに、北極を定むるのみならず、勾配を見る要器なり。」とあり、緯度や勾配を測る機器として紹介している。

図7下側の方位盤には「乾」や「坎」などの八卦が、その上の重ねる上側の方位盤には十二支が陰刻されている。十二支の方位盤は図8のように一支（30度）を二十等分、八卦の方位盤は図9のように一卦（45度）を30等分しており、両方とも目盛りは五厘（1・5度）単位であり、全国測量で用いた器具のレベルの精度ではない。寛政六年に忠敬が佐原で実測し制作した「下利根川沿実測図」や「地境に付取替絵図」でも厘（0・3度）の単位で方位角を記載しており（会報九〇号所収の拙稿「方位角の精度」），それよりも精度は落ちる。あくまでも旅行などに携帯するための磁石・象限儀である。この携帶用磁石はその制作年代も忠敬の入手経路も不明である。

関連資料『旅行記』

（国宝文書・記録類番号218）

寛政五年二月二十九日に忠敬や久保木清淵らが佐原を出立して、伊勢参宮と関西方面への旅に出た。その旅行記である。

この旅行記では名所旧跡を訪れては、寺宝、句碑、様々な碑文、扁額等々を詳細に書き留めているが、その中に十四個所での方位測定や二個所での北極出地度の測定の記録も記されている。各地で行った方位測定の値の最小単位は「一分五厘」「二分半」「六分五厘」とあり五厘単位である。これは「携帶用磁石」の五厘単位の目盛りと一致す



図9 方位盤（八卦）部分



図8 方位盤（十二支）部分

また『旅行記』の三月九日には「駿府の宿甲州屋太兵衛と云。此地は北極出地三十五度弱に当る」、四月八日には大和多武峰で「北極出地三十五度弱」と緯度を記録しており携帶用の象限儀を持参していることがわかる。忠敬は関西旅行にこの「携帶用磁石」を持参し使用した可能性がある。

『旅行記』の方位測定の記述

『旅行記』の中から、方位測定についての記事の一部を、書き下し文にして紹介する。

- ・三月九日「久能山へ参詣しけれども、拝見叶わず。宗門の際まで登ること十町、石階十八曲、遠江潮見る。伊豆の御嶽山、巳の五分に当る。駿河より海へ成出したる岬の弁天、未の八分に当る」
- ・四月二十四日「（京都）暁、四条を立ち、祇園社、清水観音、大谷御坊、大仏、三十三間堂、日吉社、東福寺、八坂塔、伏見稻荷を拜し、暮合いで伏見船宿小国屋七兵衛へ着し、乗船して道頓堀扇屋七兵衛へ上り、朝食を致す。清水の舞台より大坂の見透し未一分なり」

【参考】

・伊能忠敬『旅行記』

（香取五郎氏の翻刻、私家版）

- ・佐久間達夫「伊能忠敬、旅先で方位や緯度測定」

（会報57号）

- ・細井広沢『秘伝地域図法大全書』

（国会図書館デジタルコレクション）

伊能大図の復元について

星埜 由尚

伊能忠敬とその測量隊が作成した「大日本沿海輿地全図」は、幕府に提出された後、明治維新後は、明治政府が管理するところとなつたが、明治6年の皇居の火事により焼失した。伊能家に保存されていた控図も明治政府に提出され、国家機関により模写図が作成された後、関東大震災により焼失したとされている。

伊能忠敬とその測量隊が作成したいわゆる伊能図は、その製作過程により正本、副本、稿本、写本及び模写本に分類されている（渡辺、2000）。渡

辺（2000）によれば、伊能測量隊が針突法により作成した地図のうち、幕府に提出された地図が正本であり、その他の副本である。写本は、正本又は副本から伊能測量隊以外により複製された地図であり、模写本は、明治期以降に伊能家控図から模写されたものを指している。稿本は、伊能測量隊の作成によるが、正本及び副本の原稿図など作成途上のものを指している。

大名等からの要望により献呈した伊能図が現存しているが、大図（縮尺 1:36000）、中図（縮尺 1:216000）及び小図（1:432000）から成る伊能図のうち、大図は、毛利藩に献呈した副本である「御両国測量絵図」（「毛利大図」と称する）及び平戸藩に献呈した平戸藩関係領域の副本^{*1}（「松浦大図」と称する）のほか、第七次測量（第一次九州測量）の後に作成した九州沿海図大図、伊豆七島、天橋立、琵琶湖など特定地域に限られた地図のほか、第一次測量の大図、東日本の測量終了後

にまとめた東日本の大図等^{*2}が現存するに過ぎず、伊能大図の全貌は、これらの副本と明治初期に陸軍、海軍及び内務省により模写され、現代に伝わった地図により窺い知るほかがない。

このため、伊能大図について考証し、それに基づいて地理学的、地図学的検討を行おうとするときに模写図から推定しなければならないという大きな問題が発生する。そのことは当然のことであるにも拘わらず、ややもすると忘却されたまま、模写図に基づいて伊能測量の測地学・地図学的検討が行われ、結論を得ることになりかねない。この問題について、改めて伊能図研究の課題として論じてみたい。

1. 模写図の意味とその限界

(1) 現存する伊能大図の模写図

現存する伊能大図の模写図は、明治初期に国家機関により模写されたものである。それらの模写図は、国立国会図書館に所蔵される内務省系統の大図（「国会大図」と称する）、アメリカ議会図書館等に所蔵される陸軍系統の大図（「アメリカ大図」と称する）、海上保安庁海洋情報部に所蔵される海軍系統の大図（「海保大図」と称する）の3系統の大図である。

海軍水路局は、1877（明治10）年内務省地理局から伊能家の控図を借り受けて謄写^{*5}を開始し、翌11年1月に伊能図300余図の模写を完了した。しかし、これらの模写図は、関東大震災によりすべて焼失した。一方、明治13年から明治20年代の前半に、これらの模写図からさらに業務参考用に縮図として模写された大図があり、海上保安庁海洋情報部に現存している。（今井、2018）

(2) 伊能大図模写図の特徴

伊能大図模写図については、これまでにも閲覧の機会があり、地図目録、図録の出版などが行われ、さまざまにその特徴が論ぜられている。ここでは、これまでに各模写図について判明していることを簡単にまとめておく。

① 内務省系統の模写図

内務省系統の模写図については、鈴木（2018）によると、工部省^{*3}は、1873（明治6）年から伊能家の控図の模写を開始した。この模写図は、国立国会図書館に現存する関東地方を中心とする伊能大図模写図に当たる可能性があるが、そのこととを裏付ける史料はない。また、1876（明治9）年には、内務省地理寮量地課による模写^{*4}、1882（明治15）年には、内務省地理局地誌課により大図177枚の模写が行われている（鈴木、2018）。現存する国立国会図書館所蔵の模写図との関係は不明である。

陸軍参謀局が1876（明治9）年に伊能図を模写したことは、『陸地測量部沿革誌』に記載されている。この模写図のうち、大図については、昭和18年参謀本部陸地測量部発行の「研究蒐録地図」に、「伊能忠敬先生測量叢話」との表題の記事があり、大図模写図214枚が陸地測量部に所蔵されていたことが分かるが（菱山、2018）、その後戦時の混乱を挟み所在不明となっていた。この大図模写図のうち207枚がアメリカ議会図書館に所蔵されていることが2001（平成13）年に明らかとなつた（渡辺、2001）。

は朱色で明瞭に模写されている。しかし、原図では直線が折点で結ばれていたはずであるが、模写によりかなり丸められている。集落は家形の符号の集合として描かれ、集落地名とともに領主大名、知行旗本の姓名が記されている。山景や耕地がそれぞれ緑色と褐色の系統の色で塗色され、樹木などもデザイン的に描かれている。交会法による目当てとなつた山など著名な山は、スケッチした姿で描かれ、火山の露出した岩石は茶色に塗色されている。また、城郭が描かれ、城主名も記されている。宿駅には朱の円記号、有名な寺社の甍が描かれている。コンパスローデも丁寧に模写されており、明治政府に献納された伊能家の控図ができるだけ原図に近い表現で模写したものと考えられる。平成9年気象庁において鈴木純子氏により見いだされ、気象庁から国会図書館に移管されたものである。

②陸軍系統の模写図

アメリカ議会図書館がその大部分を所蔵する陸軍系統の模写図は、陸地測量部沿革誌に明治9年に伊能家控図の模写を始めたことが記されており、明治初期に陸軍参謀局において模写され、その後参謀本部陸地測量部に受け継がれたものである。前述したように、戦前には陸地測量部に存在していたことが記録にあるが、平成13年に故渡辺一郎氏がアメリカの議会図書館に207図幅存在することを確認した。アメリカに渡った経緯は不明ながら、アメリカ議会図書館では重要資料として保管している。

陸軍系統の模写図の大部分を占めるアメリカ議会図書館所蔵の大図は、測線の朱色、海や川の藍

色、砂浜の黄色の塗色はあるが、他は墨色で、色彩に乏しい。但し、北海道の図（箱館・松前の図を除く）には、「第七軍管北海道之圖」の表題がある。また箱館、松前以外の図は山景を緑に塗るなど彩色されている。北海道以外は、大阪、神戸、紀伊半島沿岸部の一部のほか浜松の図が彩色されているのが例外である。浜松の図には模写中途のコンパスローデが描かれている。

陸軍系統の模写図は、測線の複写が重点に置かれ、城郭や寺社の甍はやや画一的に描かれているが、それぞれ描き方は少しずつ異なる。山景は、北海道等の図を除き、山の輪郭線のみで、交会法の目標とした山の中でも顯著な山は、その山容をスケッチにより表現している。集落は家並みの表現ではなく、いわゆる黒抹の表示となつていて。一方、これら模写図のうちでも北海道、浜松、大阪、神戸及び紀伊半島の一部の図は、山景は緑色に塗色され、樹木を示す点描がある。平地は緑色と褐色の点描で示され、湿原や台地を表現しているものと思われる。海岸も砂浜と磯浜を区別して、砂浜は黄色に塗られ、磯浜は焦げ茶色で岩礁を表現している。しかし、内務省系統の大図に比較すると塗色や山景の描写などは粗雑な印象を受ける。

これら模写図には鉛筆で方眼線が書き入れられていたことが記録にあるが、平成13年に故渡辺一郎氏がアメリカの議会図書館に207図幅存在することを確認した。アメリカに渡った経緯は不明ながら、アメリカ議会図書館では重要資料として保管している。

海軍水路局は、海図の整備に利用するため伊能大図を模写した。海上保安庁海洋情報部には、147枚の「伊能図譜写図」が所蔵されている。その模写したいわゆるアメリカ大図を見いだし、伊能大

の態様はさまざま、縮尺は2分の1に縮小されているものが多く、彩色されているものもあるが、墨一色のものもあり、山景は、いわゆるケバ式の表現となつていてるものもある。また、地名が省略され、測線も描かれていないものなど多様である。中でも、東九州の図幅は、原寸で彩色され、国会図書館所蔵の内務省系統の模写図と同様の模写図となつていている。

2. 伊能大図の復元

前述したように、伊能大図は、幕府に上呈された大日本沿海輿地全図の骨格をなす大図（正本大図と称する）が明治6年に焼失し、その後、内閣文庫から帝国大学に貸し出されていた伊能家の控図も関東大震災により焼失したとされており、原本が存在せず、どのような地図であったのか詳細は不明であった。伊能家から伊能忠敬記念館に寄贈された第四次測量までの蝦夷地及び東日本の大図、第七次測量（九州第一次測量）の終了後に作成された九州沿海図大図、その他毛利大図、松浦大図のほか個別の大図等から正本大図の全体像を類推するしかなかつた。

ところが、上記の内務省系統の模写図とされる国会大図の存在が明らかとなり、色彩も模写されていたため、この模写図が正本大図の姿の手掛けりとして注目されるようになつた。しかし、国会大図は、東北地方南部と関東地方を中心とする地域のみの地図であり、毛利大図、松浦大図が存在する地域以外の正本大図の姿については手掛けられがなかつた。そのような中で、故渡辺一郎氏がアメリカ議会図書館に保存されていた、旧陸軍が模写したいわゆるアメリカ大図を見いだし、伊能大

図214 図幅のうち207図幅までの大図の副本と模写図が揃うことになった。その後、海上保安庁海洋情報部と国立歴史民俗博物館に残りの7図幅の模写図（海保大図^{*6}と歴博大図^{*7}）が存在することが明らかとなり、伊能大図の全貌を知る手掛かりを得られることとなった。

折しも、西暦2000年に伊能測量200年を迎えて、伊能忠敬を顕彰する事業が各地で行われることとなり、伊能図を復元して床に展示することが計画された。伊能忠敬直系の子孫に当たる洋画家伊能洋氏の指導により、ほぼ無彩色のアメリカ大図と海保大図に国会大図を模範とした着色や補描を加え、「復元伊能大図」を原寸大で作製し、平成16年から各地で床展示を行った。このときの「復元伊能大図」は、現在国土地理院が所有し、一般財團法人日本地図センターが管理して求めに応じて貸し出しも行われているようである。

その後、平成18（2006）年に伊能大図の副本、模写本から成る「伊能大図総覧」が河出書房新社から刊行された。その後、故渡辺一郎氏の発案により、日本写真印刷株式会社（現名NISSHA株式会社）が「伊能大図総覧」に収載された伊能大図を主体とする伊能大図の原寸大パネルを作製した。このパネルは、副本である毛利大図と松浦大図のほか、色彩が模写されている北海道のアメリカ大図、関東一円の国会大図、歴博大図及び海保大図、彩色のないアメリカ大図と海保大図にはコンピュータ技術による彩色加工を施してデジタル化したデータから作成されている。NISSHA株式会社は、国会大図などを模範としてアメリカ大図に模写されている山景の外形線などを手掛かりにコンピュータ技術により彩色し、測線の朱色の強調なども

行い、得られたデジタルデータから特殊な素材の媒体に印刷し、パネル化したものである。このパネルを体育館などの床に敷き詰めて展示する「伊能大図フロア展」が計画され、平成21年から27年の足掛け7年間にわたり全国各地28ヶ所でこのフロア展が実施された。

このとき床展示された伊能大図パネルは、「完全復元伊能図」と称され、東京国立博物館所蔵の伊能小図とNISSHA株式会社所蔵の伊能中図（フランス中図と称されている）のデジタル複製図とともに展示された。現在は、香取市の所蔵となり、伊能忠敬記念館の管理下にある。

さらに、故渡辺一郎氏によりコンピュータ復元技術により、「令和の伊能図」と名付けた復元図の作成が計画され、横溝高一氏を中心に制作が進み、一部の完成を見ている。

3. 復元の問題点

伊能図の正本と控図は焼失し、原稿図から針突法によって作成された副本も数少なく、大図については、毛利大図と松浦大図のほか、測量途次の伊能測量隊作成の地図等は存在するが、最終上呈版「大日本沿海輿地全図」の副本は存在しない。そのような状況の中で伊能大図の正本即ち「大日本沿海輿地全図」大図の姿を推測・復元し、正本に限りなく近づけて復元することは至難の業である。

これまで伊能測量200年を契機として伊能忠敬の業績を顕彰し、その成果である伊能図の理解を高めるための普及活動の一環として復元図が床展示のために製作された。これらは、伊能忠敬の業績ではなく、「正本」、「副本」とともに一次的な清絵図であるとも考えられる。その場合、「大日本沿海輿地全図」の正本と言われるものは、原稿図から針突法により作成された複数の地図のうち、その提出先に応じて最も丁寧に仕上げられた地図であると

価されるべきであるが、復元図と称するものが複数作成され、なおかつ「完全復元伊能大図」^{*8}などと称されたことにより、伊能図の実像に対する誤解を招きかねないことも危惧される。

復元の模範とされた国会大図もあくまで模写図であり、色彩も模写ではいるが、伊能測量隊の手による第7次測量の成果に基づいて描かれた「九州沿海図大図」に比較すると、色彩表現の丁寧さが異なる。従って、復元図については、将来誤解を発生させないよう、その製作過程についての詳しい記録などのような目的から作成されたものであるか明確に記したものを感じ有必要があろう。

伊能図の作製過程による分類、即ち「正本」、「副本」、「写本」、「模写本」及び「稿本」の分類は、見直す必要もあるだろう。特に、「正本」と「副本」の別については、疑問もある。「正本」は伊能図の原本であり、「副本」は「正本」から伊能測量隊の隊員を中心にして針突法により複製物として作成されたとの先入観がある。しかし、渡辺（2000）は、「正本」と「副本」は、双方とも針突法で同時に作成されたものであることを述べており、大図の場合は、下図即ち原稿図を集成した寄図（原稿図）から針突法により複数の地図が作成されたはずであり、中図・小図の場合も座標値に基づいたか図解法によつたかは別として、下図^{*9}即ち原稿図が作成され、針突法により複数の地図が作成されたと考えられる。従つて、「正本」と「副本」に原図—複製図の関係はなく、「正本」、「副本」とともに一次的な清絵図であるとも考えられる。その場合、「大日本沿海輿地全図」の正本と言われるものは、原稿図から針突法により作成された複数の地図のうち、その提出

言えるであろう。^{*10}

伊能図の復元図を作成しようとする試みは、伊能忠敬及び伊能図の普及には貢献するものであり、その労は多とするものであるが、今後新たに復元図を作成する場合は、上述したこれまでの伊能図の分類に関する疑問や伊能図の作製過程に関する考察を十分に考慮した上で進められていくことを期待する。

注

*1 「御両国測量絵図」は、周防・長門の範囲を描いた大図の副本である。山口県文書館が所蔵している。平戸藩関係領域の副本は、平戸藩主松浦静山の求めに応じて献呈したもので、松浦から長崎、壹岐、五島を描いている。平戸市の松浦史料博物館に所蔵されている。

*2 これらの大図のうち、九州沿海図及び第一次測量の蝦夷地の大図は、東京国立博物館に所蔵され、東日本の測量終了後の大図及び伊豆七島、天橋立、琵琶湖などの地図は、伊能忠敬記念館に所蔵されている。

*3 工部省測量司は、1874(明治7)年に内務省に移管され、地理寮となる。

*4 鈴木(2018)によると、関八州大三角測量用ではないかという。

*5 当時海軍水路局では、地図の模写を謄写と称していた。

*6 海保大図は、12号(稚内)、133号(京都)、157号(呉・今治)及び164号(福山・尾道)である。12号は、海岸線と一致する測線は墨色であり、内陸の測線と宿駅記号のみ朱色である。133号は、測

線は朱色であるが、その他は墨色である。両図ともケバ式の山地表現である。157号は、彩色されているが、地名が全く記載されていない部分が多い。164号は、測線が描かれておらず、地名も非常に少ない。本来伊能図には描かれ航路が記入されている。

*7 歴博大図は、34号(江指)と35号(奥尻島)で、アメリカ大図と同じく陸軍系統の模写図である。

*8 全国各地で伊能図の床展示を行った際、コンピュータ技術によりアメリカ大図などを加工し復元図を作成したが、展示会の広報宣伝活動に資するため、「完全復元伊能大図」と称した。こ

れについては、如何に集客のためとは言え、筆者もこの名称には加担しているので、現在となつてみると、忸怩たるものがあり、反省点である。

*9 東京大学総合図書館に所蔵されている「測地原稿図」が中図・小図の下図である。(渡辺2003)

*10 渡辺(2000)もそのように述べている。

引用文献

今井健三(2018)：水路部における伊能図謄写図作成の経緯とその利用 地図 56-1 59-64

鈴木純子ほか(2008)：海上保安庁海洋情報部所蔵

「伊能図謄写図」 地図 46-1 1-12

鈴木純子(2018)：伊能図利用の軌跡 地図 56-1

9-23

菱山剛秀(2018)：陸地測量部における伊能図の利用 地図 56-1 65-70

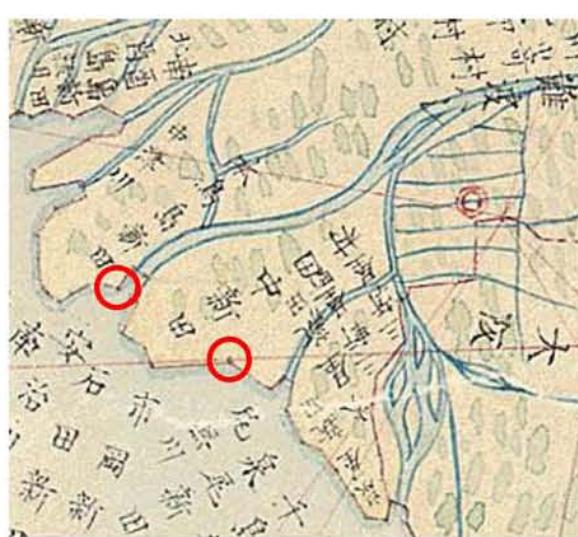
渡辺一郎(2000)「伊能忠敬の地図をよむ」 河出

書房新社

渡辺一郎(2001)：米国議会図書館で伊能大図¹¹〇六枚を発見 伊能忠敬研究 26号 6-12

渡辺一郎(2003)：東大総合図書館蔵伊能忠敬測地原図 伊能忠敬研究 32 30-33

針穴のある模写図
左の図は明治9年頃陸軍が模写した伊能中図の大坂、淀川河口部である。海岸線をよく見ると赤い測線の曲がり角に小さな点(図中の○内参照)が見える。模写したときの針穴である。明治時代の模写図に針穴がある図は珍しい。



「伊能中図」中部近畿 国土地理院蔵

元図は確認できていないが、元図の針穴を利用して測線を移写したと考えられ、極細の線とともに、測線の位置を正確に写しとろうとした担当者の姿勢が感じられる。

(編集子)

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十八回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第八次測量】（九州第二次）五島列島～長崎

自 文化10年5月24日 至 文化10年8月18日

監修 渡辺一郎 編著 井上辰男

宿泊日・旧暦
【本隊】
文化10年5月
(1813)

宿泊地
現・市町村名

宿泊宅

特記・天体観測

大図番号

25	24			
(23)	(22)			
同 神ノ浦	○ 五島列島 宇久島 平村			
同 佐世保市	同 佐世保市			
肥前屋甚太郎 泊丈右衛門 渋谷富蔵 唐津屋長兵衛 本陣地役泊四郎左衛門	油屋藤助 山田紘九郎 亀屋与左衛門			
て (幟に繋) 左右両手合測。 恒星測定	(伊能他四名)、平村字藏ノ首より大田江村、 字枕ノ浦、字牧崎(鯨見あり)、字対馬瀬、 ツブラ崎、左に姫大明神小社あり、木場村、 乙女崎、字小浦、字千崎(鯨見あり)、字ヲビ ヤ崎、字千崎浦(左に鮪納屋有)、飯良村、右 に瀬続唐人瀬遠測、黒崎にて左右合測。(今泉他 三名) (佐助病氣)、神ノ浦村人家前、平 村追分より右山沿海、同所止宿本陣前を歴て、 測所迄打上、それより山印を残迄測る。此より 裏海へ横切、切印を残、又山印より薬師崎を廻 て横切、切印に繋、飯良村、唐子崎、枝芋畠、 飯良本村、塚崎、飯良村、字宮ノ首、飯良崎 に黒崎に	平村逗留測。(伊能他四名)字久島内平村、 松原、城ノ岳道追分より左山沿海、左に当村鎮 守神島大明神あり、砂浜、鯨組の納屋場(当春 大村領川棚村浅井多兵衛鯨捕す、不漁にて鯨一 本も不取得と云)、測所を歴て、字浜蔵町、字 浜、字堀子、字塔ヶ崎、字力タノ脇、字長崎、字 福ノ下、字ク浦、右冲に深瀬遠測、字藏ノ 瀬、字藏ノ首にて沿海打止。小敷瀬(大中小三 名)字久島平村、字松原より芽場崎、小浜村、 三笠崎、小浜村枝蒲ノ浦、水葉崎、権現崎、小 浜村枝下山、江口崎、枝福浦、神ノ浦村松崎、 字白浜を歴て満切島へ渡り、松ヶ鼻小島一周 測。地方字白浜より初、神ノ浦町入江奥、平村 道追分に終る。外に平村持前子島一周。恒星測 定	二〇六	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
27	(25)	同	同	同	測定恒星測定。小黒島(門谷他三名)、赤浜滙、瀬貝崎、池ノ下にて沿海打止。右上に鎮守神島大明神。右神社、字筒井、右に志自岐大明神の社、字唐見、右に若宮大明神社あり。左上に唐見崎、字唐見、右に若宮大明神社あり。左上に猪崎、御神樂崎、字鳥山、右に真言宗鳥山満福寺、前方本殿、字大島、右に赤浜滙、瀬貝崎、池ノ下にて沿海打止。左上に大島一周年持。左上に大島一周年持。左上に大島一周年持。
26	(24)	小値賀島 笛吹村	長崎県小値賀町	本陣庄屋高量右衛門 小田八太郎 浜田屋多作 畠作平治	【門谷他三名】宇久島属手羅島を測。字曾根崎、立神瀬(大岩)、移リ瀬を歴て裏海へ横切、字ツブラ浜迄測る。移リ瀬より海苔瀬鼻を歴て海苔瀬一周測、立瀬遠測、サンハラ鼻、クダラ崎、ツブラ崎、字ツブラ浜に繋、それよりツ印を残、此より小島へ渡り一周測。ツ印よりウン崎、蟹瀬鼻、此より満切島を回て蟹瀬鼻に繋、満切小島一周測。それより曾根崎瀬に繋終る。【伊能他四名】小値賀島の内、柳村持納島を測。字広浦人家前より右山に測、ハカノ崎、アコ崎、永石浦を歴て此より山越横切向海辺裸瀬浦へ出る、又永石浦より力波七崎、裸瀬崎(瀬に繋)、裸瀬浦(横切)に繋、大河原崎又力ツカ崎(瀬に繋)、下里浦、宮崎、右に若宮大明神あり、広浦に繋終る。若宮丸昼夜。それより小値賀島内、柳村字泊浦、笛吹村道追分より右山沿海、馬篭崎、橋横印を残終。それより乗船。
26	(24)	同	同	同	【門谷他三名】宇久島属手羅島を測。字曾根崎、立神瀬(大岩)、移リ瀬を歴て裏海へ横切、字ツブラ浜迄測る。移リ瀬より海苔瀬鼻を歴て海苔瀬一周測、立瀬遠測、サンハラ鼻、クダラ崎、ツブラ崎、字ツブラ浜に繋、それよりツ印を残、此より小島へ渡り一周測。ツ印よりウン崎、蟹瀬鼻、此より満切島を回て蟹瀬鼻に繋、満切小島一周測。それより曾根崎瀬に繋終る。【伊能他四名】小値賀島の内、柳村持納島を測。字広浦人家前より右山に測、ハカノ崎、アコ崎、永石浦を歴て此より山越横切向海辺裸瀬浦へ出る、又永石浦より力波七崎、裸瀬崎(瀬に繋)、裸瀬浦(横切)に繋、大河原崎又力ツカ崎(瀬に繋)、下里浦、宮崎、右に若宮大明神あり、広浦に繋終る。若宮丸昼夜。それより小値賀島内、柳村字泊浦、笛吹村道追分より右山沿海、馬篭崎、橋横印を残終。それより乗船。

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測			
6 *	5 *	4 *	3 *	2 *	1 *	文化 10年6月 (1813)	28	29 *	(27)	小休	同		
(3)	伊能	(2)	伊能	(1)	伊能	(30)	(29)	小値賀島 笛吹村	小値賀島 柳本村	同	同		
野崎島 野崎	小値賀島 笛吹村	野崎島 野崎	小値賀島 笛吹村	野崎島 野崎	小値賀島 笛吹村	同	同	小値賀島 笛吹村	小値賀島 笛吹村	同	同		
同 小値賀町	同 小値賀町	同 小値賀町	同 小値賀町	同 小値賀町	同 小値賀町	同	同	長崎県小値賀町	同 小値賀町	同	同		
神主隠宅岩坪一善 神主岩坪三善	本陣庄屋高量右衛門 神主隠宅岩坪一善	本陣庄屋高量右衛門 神主岩坪三善	本陣庄屋高量右衛門 神主岩坪一善	本陣庄屋高量右衛門 神主岩坪三善	本陣庄屋高量右衛門 神主岩坪一善	同	同	本陣庄屋高量右衛門 浜田屋多作 畠村作平治	安川屋太郎右衛門 本陣庄屋高量右衛門 浜田屋多作 畠村作平治	同	同		
留。 波高測量不成。 測。 字古宮より右山測。 字古宮に繋。 六島一周終。 それより乗船、 飛。	【今泉他三名】野崎逗留測。 前方村持六島を 伊能は笛吹村逗留。	波高測量不成。 同所逗留。 伊能は笛吹村逗留。	笛吹村出立。 乗船、小値賀島前方村持野崎島、 字紅石より右山に測。 字野首、字曾我ノ河内、 右に神島社の華表、 神島大明神。 字カヅノ鼻、 字黒婆、 風雨に付打止。 伊能は笛吹村へ帰宿。	微雨大曇風。 出船難成逗留。	雨天逗留。	雨天逗留。	笛吹逗留測。 乗船、小値賀島属赤島一周測。 それより又乗船、小値賀島柳村の内、 字友尻より沿海測。 五凌浦、大長崎、小長崎、泊浦に繋、 小値賀島の一周終。此より笛吹村を測。 柳本村行書状平戸へ向出す。 路木島、大島の内、コロ島、斑島一周測。 江戸に六戸に繋。 大明神、北目街道、街道札場通、海辺波戸に	笛吹浦、新町崎小路、泊り浦道追分、 ノ浜を歴て測所打上げ、浦町、左淨土宗向峯山 阿弥陀寺、笛吹村字河ノ久保、測所迄測る。 又浦ノ浜より沿海測、右に郡代役所、小浜、汐井場、雷崎(懺に繋)、笛崎(懺繋)、 男島渡口を歴て男島一周測。又地方渡口より平 崎、釜田崎、馬渡、斑島渡口、外崎、浜崎、矢石 に繋。 越鼻、枝大浦、柳村、前浜江川、竹崎、矢石 尻浦にて沿海打止。此より山越横切裏海辺江川 行書状平戸へ向出す。 小値賀島の一周終。此より笛吹村を測。 柳本村行書状平戸へ向出す。 路木島、大島の内、コロ島、斑島一周測。 江戸に六戸に繋。 大明神、北目街道、街道札場通、海辺波戸に	笛吹逗留測。 乗船、小値賀島属赤島一周測。 それより又乗船、小値賀島柳村の内、 字友尻より沿海測。 五凌浦、大長崎、小長崎、泊浦に繋、 小値賀島の一周終。此より笛吹村を測。 柳本村行書状平戸へ向出す。 路木島、大島の内、コロ島、斑島一周測。 江戸に六戸に繋。 大明神、北目街道、街道札場通、海辺波戸に	206	206	206	206

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
11 *	伊能	小値賀島 笛吹村	同 小値賀町	本陣庄屋高量右衛門
(8)	野崎島 野崎	小休	野崎島 野崎	横切向海辺、字白浜へ出、此より左山沿海逆測。字頭ノ川、浦ノ内、小森崎打止。伊能は笛吹村逗留。
同 檜津村	中通島 立串村	同 小値賀町	小値賀島 笛吹村	神主隠居岩坪一善
同 新上五島町	同 新上五島町	同 小値賀町	本陣庄屋高量右衛門	神主岩坪三善
地侍川口成作 庄屋西村本右衛門	竈主柴田徳太郎 諸国屋幸左衛門	浜田屋多作 烟村作平治	浜田屋多作 本陣庄屋高量右衛門	神主隠居岩坪一善
江領有川村 横切)にて打止。 家下、右に祖父君宮、堀切(西の手青方村より に繋、赤ノ瀬鼻、領界(富江領浦村、福	立串村(古名藤頭塙竈)人家下より、右に乙宮 明神小社あり、乙印を残、此より山越横切向海 辺後浜に繋。又乙印より沿海、小串村、江川、 江川浜、後浜、字縊越浜を歷て山越横切向海辺 谷、鶴ノ瀬、灰立(此所五島富江領平戸領境 論)、立串村、字赤瀬崎、藤ノ縊鼻、それより 野崎島一周終。それより乗船。 一ツ瀬崎(左に大一ツ瀬岩遠測)、紅石に繋、大 野崎島字黒瀬より右山沿海順測、字ケセデン 鼻、左沖にケブタ瀬遠測、矢ノ浦、高崎、小森 崎に繋。それより昨日の逆測場所を飛て、字白 浜より右山順測、小和田崎、小一ツ瀬崎、大 一ツ瀬崎(左に大一ツ瀬岩遠測)、紅石に繋、大 野崎島一周終。それより乗船。 雨天逗留。午後止。測量先遠に付無測。	立串村(古名藤頭塙竈)人家下より、右に乙宮 明神小社あり、乙印を残、此より山越横切向海 辺後浜に繋。又乙印より沿海、小串村、江川、 江川浜、後浜、字縊越浜を歷て山越横切向海辺 谷、鶴ノ瀬、灰立(此所五島富江領平戸領境 論)、立串村、字赤瀬崎、藤ノ縊鼻、それより 野崎島一周終。それより乗船。 一ツ瀬崎(左に大一ツ瀬岩遠測)、紅石に繋、大 野崎島字黒瀬より右山沿海順測、字ケセデン 鼻、左沖にケブタ瀬遠測、矢ノ浦、高崎、小森 崎に繋。それより昨日の逆測場所を飛て、字白 浜より右山順測、小和田崎、小一ツ瀬崎、大 一ツ瀬崎(左に大一ツ瀬岩遠測)、紅石に繋、大 野崎島一周終。それより乗船。 雨天逗留。午後止。測量先遠に付無測。	二〇六 二〇六 二〇六 二〇六 二〇六	【今泉他三名】野崎逗留測。野崎島字野首より 横切向海辺、字白浜へ出、此より左山沿海逆 測。字頭ノ川、浦ノ内、小森崎打止。伊能は笛 吹村逗留。

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
1 3 *	1 2 *	1 0 (同 友栖村	同 新上五島町	下有川会所 預主福田兵右衛門 板屋太三治	有川村字赤ノ瀬鼻より沿海測、右に潮目宮、枝間横切、岩瀬浦村、枝太ノ浦、中ノ平、向海山辺、太ノ浦入江奥へ出、又有川村字蛤より初印迄測る。此より横切向海辺、枝茂串浦へ出る、又マ印より、鏡瀬、長瀬遠測、味山崎、茂串浦横切に繋、櫻ノ久保、三本松、鰐口川尻、有川村字下有川、止宿入口打止、測所へ打上。
同 新上五島町	同 新上五島町	同 有川村	同 新上五島町	二〇六		
辰之助 浦役鶴之助 本陣肝煎吉川平左衛門			二〇六			

						宿泊日・旧暦	
16 *		15 *		14 *		(西暦)	
(13) 小休		(12) 中通島 岩瀬浦村		(11) 同 太ノ浦村		宿泊地	
中通島 奈良尾村		中通島 岩瀬浦村		同 太ノ浦村		現・市町村名	
同 五島市		同 新上五島町		同 新上五島町		宿泊宅	
本陣桑原寿兵衛 地役桑原福右衛門 町人桑原甚兵衛	江頭甚兵衛	本陣会所 預主代官坪井聯助 浦役近藤福左衛門	本陣浦役坪井三之助 郷侍坪井繁弥	友栖村打止より恵比寿崎、(左に地ノ小島、中 小島、沖小島あり。各島遠測)、大友栖浦、中 女崎、立崎、右に羽黒大権現社あり、枝江ノ 浜、満堂鼻、高碧崎、左に相ノ島(福江、大 村)領論所遠測、潮合崎、岩瀬浦村枝大田、藤 内崎、大河原、大河原崎、小河原浦、百貫浦、 恵比須崎、右に志自岐、羽黒両合社(福江侯建 立)、枝大田人家下に繫終。(小手分)岩瀬浦 村枝大田村人家下より沿海、權現崎、南原浜、 笠崎、枝太ノ浦村、鹿子崎、鹿子浦、塔崎、水 垂フツボ浦鼻、アゼツ鼻、(右に羽黒小社あ り)、畔津、松葉崎にて打止。	本陣浦役坪井三之助 郷侍坪井繁弥	友栖村打止より恵比寿崎、(左に地ノ小島、中 小島、沖小島あり。各島遠測)、大友栖浦、中 女崎、立崎、右に羽黒大権現社あり、枝江ノ 浜、満堂鼻、高碧崎、左に相ノ島(福江、大 村)領論所遠測、潮合崎、岩瀬浦村枝大田、藤 内崎、大河原、大河原崎、小河原浦、百貫浦、 恵比須崎、右に志自岐、羽黒両合社(福江侯建 立)、枝大田人家下に繫終。(小手分)岩瀬浦 村枝大田村人家下より沿海、權現崎、南原浜、 笠崎、枝太ノ浦村、鹿子崎、鹿子浦、塔崎、水 垂フツボ浦鼻、アゼツ鼻、(右に羽黒小社あ り)、畔津、松葉崎にて打止。	特記・天体観測
至、 岩瀬浦村枝奈良尾村、 宿ノ浦界に繫終る。 より出張の上普請の鰯納屋あり)、波戸石垣に 繫。【小手分】大奈良尾納屋下、石垣より金山 崎、神名崎、枝奈良尾村、福見崎、福見、平瀬 本、竿崎出鼻を回、竿崎本に繫、字下木戸に 繫。河原浦、内河原浦、須崎浦帆上ヶ浦、帆上ヶ 代崎、見付島二ヶ所遠測、片岩崎、外網 と云、禪宗盧山寺あり、小川尻、川上に字盧山滝 渡る。松生山に志自岐、羽黒合社あり、神子 前繫、五島浦、七石崎に繫。【小手分】太ノ 浦持神山島一周測。神山島より地方本小島鼻へ 測、五郎津崎(轍に繫)、右に大王権現社、左 を權現瀬戸と云。岩瀬浦村枝神ノ浦、權現瀬戸 ノ浦字七石崎より沿海、船隠浦、元井出浦、商人 干切鼻本、干切鼻を回て干切鼻本に繫、商人 サゴ崎、白辺田崎、辻ノ鼻、浜串浦、岩瀬浦村字ミ サゴ崎にて打止終。	二〇七	二〇六	二〇六	大図番号			

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
20 *	19 *	18 *	17 *	同	同
~ 17	~ 16	~ 15	~ 14	同	同
奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	同	同	同	同	同
同 五島市	同	同	同	同	同
本陣会所 代官役荒木金次 浦役久保甚兵衛	同	同	同	同	同
小島鼻に繋、子浦、瀬黒崎、穴ノ鼻、ヲコ瀬(下、中、上)、浦に繋、千貫瀬(遠測)、浦ノ浜、池ノ小島(遠測)、押通ノ小島元干切を歴て此より小島片打、又元干切より乗船。ユイノ小島出鼻元横切、ユイノ	梶島本竈出立。梶島内字磯浜より(此より海岸大絶壁)、小河原、竹ノ尻、葦ノ浦、(右阿波國より出張の網納屋あり)、鷹ノ巣離瀬片測。又離瀬本より鷹ノ巣、和田島元干切を歴て此より小島片打、又元干切より乗船。ユイノ小島出鼻元横切、ユイノ	梶島裏手は測量不相成、見合の所終日大風、殊に絶壁に付不測、逗留。	梶島逗留測。梶島の後手は浪高にて測不成。津婦羅島を測。(此島福江領富江領論島故、測量六ヶ敷に付、此方手にて測量致候間、両領より手伝人足、小船諸器持人足、半分宛差出候様、両領差添出役中、並両領村役人も罷出候に不及、只双方より案内一人宛差出候様申渡候て測)。字大石幟より右山測、飛瀬崎、横畠、池ノ下上鼻絶壁(福江領にて椎木島。即論島)測遠幟より、津婦羅島一周終。それより(福江領にて大島繫、唐人石と云)、デノマエ浜、字大石、初幟にて八分通程測)。恒星測定	梶島逗留測。梶島内伊富貴村宇ユイノ小島本より右山沿海、坊主瀬、伊富貴村人家下、釜蓋崎、毛吹浦、野崎浦、野崎堀切浦を歴て山越横切向海辺、和田浜に出る、又堀切より縊ノ浦、越縊浦、竹ノ浦、虎瀬崎、(右梶島村人家下)、田崎浦、池崎、仏崎、磯瀬にて沿海打止。	梶島逗留測。梶島内伊富貴村宇ユイノ小島本より右山沿海、坊主瀬、伊富貴村人家下、釜蓋崎、毛吹浦、野崎浦、野崎堀切浦を歴て山越横切向海辺、和田浜に出る、又堀切より縊ノ浦、越縊浦、竹ノ浦、虎瀬崎、(右梶島村人家下)、田崎浦、池崎、仏崎、磯瀬にて沿海打止。
二〇六	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七

5		4	3	2	6月1日	5月29日	【支隊】	宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	大図番号
坂部	(2)	(7 1)	(30)	(29)	(28)	(6 27)	坂部他四名	伊能 (25)	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	同 五島市	二〇六
同 青方村	同 奈摩村	同	同	同	同	中通島 青方村	○ 五島内中通島西を測	久賀島 田ノ浦	同 五島市	現・市町村名	二〇七
同 新上五島町	同 新上五島町	同	同	同	同	同 新上五島町		藤七	山口 李弥	本陣会所 代官役荒木金次	二〇六
山下三郎右衛門	藤七	同	同	同	同	山下三郎右衛門 内野庄右衛門		伊能は残居。久賀島逗留測。久賀島字福見崎より右山沿海、外河原、駒瀬鼻、忠太ヶ浦、針ノ耳、長浜、通瀬戸鼻（多々良島と云、此所赤瀬瀬戸と云、唐人通船場所と云）、ゴウゴフ崎、巣行鼻、杉尾浜、相曾根浦、鬼ヶ崎、夏越浦、ノ浦字横網代、田ノ浦測所前打止。恒星測定	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	宿泊地	特記・天体観測
止。越流、字越首浜を歴て此より又東海辺似首村へ山切、横切印を残、又字越首浜より剥崎鼻にて打止。	青方村字鶴戸、同川尻より東海辺魚ノ目浦へ横切、浦村へ出、印を残、又奈摩本村字畠崎より右岸より左山に測、大鋸崎に繋、祝言島一周終。	青方村逗留測。船崎村熊鷹鼻より右山沿海逆測、白水鼻、奈摩村、神崎、太神崎、神崎浦、青方村逗留測。青方村魚ノ目追分より左山沿崎村界より右山沿海逆測、船崎村、俎板鼻、垂見鼻、熊鷹鼻迄測る。大風波に付、止て島測。トシヤク岩より右山測、浜泊、鋸崎、大鋸崎にて打止。	青方村字鶴戸、同川尻より東海辺魚ノ目浦へ横切、浦村へ出、印を残、又奈摩本村字畠崎より右岸より左山に測、大鋸崎に繋、祝言島一周終。	青方村字鶴戸、同川尻より東海辺魚ノ目浦へ横切、浦村へ出、印を残、又奈摩本村字畠崎より右岸より左山に測、大鋸崎に繋、祝言島一周終。	人間入口、青方本村字横網代、浦底浦、字大曾（此所に鮪鰯の納屋あり、紀州より出張して漁すと云）、青方村・船崎村界にて打止。	左山測、平瀬鼻、高鼻、荒和布島、黒崎、小島遠測、裸瀬、中知浦、ビシヤゴ瀬遠測、奈摩村枝曾根字江袋浜にて打止。それより乗船。	小値賀島笛吹浦出立。津和崎島、字戸楽崎より遠測、裸瀬、中知浦、ビシヤゴ瀬遠測、奈摩村枝曾根字江袋浜にて打止。それより乗船。	伊能は残居。久賀島逗留測。久賀島字福見崎より右山沿海、外河原、駒瀬鼻、忠太ヶ浦、針ノ耳、長浜、通瀬戸鼻（多々良島と云、此所赤瀬瀬戸と云、唐人通船場所と云）、ゴウゴフ崎、巣行鼻、杉尾浜、相曾根浦、鬼ヶ崎、夏越浦、ノ浦字横網代、田ノ浦測所前打止。恒星測定	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	宿泊地	特記・天体観測
二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇七	二〇六	大図番号	

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
12	1	10	9	8
(9)	(8)	(7)	(6)	(5)
若松島 若松村	同 浜野浦	同 飯ノ瀬戸	同	同 浜野浦
同 新上五島町	同 新上五島町	同 新上五島町	同	同 新上五島町
入江祥平 荒木左右吉、外一軒	給人伊藤助左衛門 町人安川吉郎兵衛	田中庄左衛門 田中与一郎	同	給人伊藤助左衛門 町人安川吉郎兵衛
浜野浦内今里村より道土肥へ横切、裏海道土肥浦、字地蔵田迄測る。又同所浜、字四軒屋より左山沿海順測、字地蔵田に繋、字仏崎、今里浦内三本松浜に繋終る。	浜野浦、ヤケ崎、浜泊、僧都ヶ浦、松ヶ崎、青木殿崎、浜野浦、枝道土肥村、字四軒屋、道土肥浦入江奥にて沿海打止。此より山越横切、浜野瀬戸を歴て二方領蔵ノ小島へ渡り一周測。	浜野浦内福崎より左山沿海測、大崎鼻、串島瀬鼻、ビシヤゴ鼻、ビシヤゴ瀬遠測（大岩石）、串崎、小土居島遠測、土居ノ浦、浜泊浦を歴て串島一周測終る。又地方串島瀬戸より浜野浦枝飯ノ瀬戸、ネン崎、小島遠測、地小島遠測、ヤツデ浦、小崎鼻迄測。	浜野浦逗留測。平戸領浜野浦、字向納屋場より左山沿海測、字三本松、それより枝続村、浜野浦本村、恵比須崎、コウゴ崎、伊浦を歴て小島崎、福崎にて打止。又浜野浦内折レ島一周測。又柏島一周測。	奈摩村海岸、浜熊川尻より青方村へ街道横切、青方村海辺人家入口に繋、又赤岩鼻より左山沿海順測、三ヶ之浦（平戸領は浜ノ浦枝に属、五島領は若松村枝宿ノ浦に属）、両領大入込の場に論地なり、今里浦（平戸、五島）二方領、同前現崎、平岩鼻、字野首、宮崎、大崎、小崎、小島鼻、（平戸領一円）浜ノ浦、字向納屋場に打止終。
二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
16	15	14	13	(西暦)
(13)	(12)	(11)	(10)	
同	同	同	同	宿泊地
同	同	同	同	現・市町村名
同	同	同	同	宿泊宅
テノ江奥に大浦内(地方)ヤク丸島一周測。原浦、夷崎、ヘボノ園迄測る。此より上ヶ島遠測。字小瀬戸より、右ノ浦内大浦迄測る。又坂部小手分測、宿切、コノ浦宿入。松中島へ渡り一周測。ヘボノ園より入道浦口迄測る。此より上中島へ渡り一周測。入道浦口より姥ヶ浦に入。横切、姥ヶ浦より裏海へ渡り、白河へ渡り、河蹴測。	若松浦逗留測。五島福江領若松島内、字土居ノ浦、土居鼻より左山沿海、但白崎鼻難所、今日海静に付此所より初、福浦、長崎鼻、小福浦、長鼻、高崎、針ノ目ド遠測(大岩)、小アダ浦、白崎、水垂崎、鳥ノ子島遠測(大岩)、殿崎、小加倉鼻にて打止。今日は終日大	若松浦逗留測。五島福江領若松島内、字土居ノ浦、土居鼻より左山沿海、但白崎鼻難所、今日海静に付此所より初、福浦、長崎鼻、小福浦、長鼻、高崎、針ノ目ド遠測(大岩)、小アダ浦、白崎、水垂崎、鳥ノ子島遠測(大岩)、殿崎、小加倉鼻にて打止。今日は終日大	若松浦逗留測。五島福江領若松島内、字土居ノ浦、土居鼻より左山沿海、但白崎鼻難所、今日海静に付此所より初、福浦、長崎鼻、小福浦、長鼻、高崎、針ノ目ド遠測(大岩)、小アダ浦、白崎、水垂崎、鳥ノ子島遠測(大岩)、殿崎、小加倉鼻にて打止。今日は終日大	若松浦逗留測。五島福江領若松島内、字土居ノ浦、土居鼻より左山沿海、但白崎鼻難所、今日海静に付此所より初、福浦、長崎鼻、小福浦、長鼻、高崎、針ノ目ド遠測(大岩)、小アダ浦、白崎、水垂崎、鳥ノ子島遠測(大岩)、殿崎、小加倉鼻にて打止。今日は終日大
二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	大図番号

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
21	20	19	18	17
(18)	(17)	(16)	(15)	(14)
同	日之島 日之島村	同	同	同
同	同 新上五島町	同	同	同
同	今村長兵衛 入江憲蔵	同	同	同
戻崎初の幟に繋、漁生島一周終。 小瀬戸鼻より口キレ鼻迄測。此より又有福島へ	若松村字土井浜より土井浦、白浜崎、浜泊浦、水ノ浦瀬戸を歴て田ノ小島へ渡り、若松村持田ノ小島一周測。水ノ浦瀬戸より引ノ浦、石司浦鼻、字石司浦、高崎鼻にて終。外に若松村持ヘボ島一周測。	若松村逗留測。若松島字重石鼻より左山沿ヒヨウゲ崎、坊ヶ浦、松ヶ崎、若松村枝神浦、猿浦、鬼子崎、大鹿崎、小鹿浦、鶴瀬戸、小瀬戸鼻、大平浦、字大平、立瀬鼻にて打止終。それより乗船、又浦之内、貝ノ木入江奥より若松村人家中へ横切、老松繋。	若松村逗留測。若松島内字小加倉鼻より左山沿ベ浦、下早崎、下中島渡口に繋、守崎、若松浦島渡口より加瀬ノ浦、重石鼻にて沿海打止。	若松村逗留測。浜野浦内荒川村、藏ノ小島渡口より左山沿海順測、水尻鼻、イスノキ泊浦、中ノ浦、同入江奥、越首迄測。此より裏海へ横切工印を残、越首より富松鼻を回、横切残工印に繋、大浦入江奥姥ヶ浦に繋、荒ノ浦入江奥迄測る。此より山越横切、黒木浦へ出、荒ノ浦より加瀬ノ浦迄測る。此より千切島一周測。ヒチ崎、ホツ浦、下り松鼻、宿ノ浦、松ヶ鼻、八王島渡口に繋、鳴取鼻、モチノ木鼻、黒木浦入江奥に繋、姥ヶ浦奥に繋終る。
二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
28	27	26	25	24	23 22
(25)	坂部 (24)	(23)	(22)	(21)	(20)
久賀島 久賀村	福江島 福江上町	久賀島 久賀村	同	同	同 同
同 五島市	同 五島市	同 五島市	同	同	同 同
江頭政之助、外一軒	富田屋八郎治	江頭政之助、外一軒	同	同	同 同
測定。塩竈鼻を歴て弁天島へ渡り、大野、弁天島一周	坂部病氣、福江引移る	日之島属有福島を一周測。同属相ノ島一周測。 それより舟行。	日之島逗留測。若松島内横山鼻より左山沿海、久賀村逗留測。久賀島内折紙より左山沿海、久賀浦入江を測。立神岩(大岩)、ズンキリ浦、笠瀬、赤瀬鼻、字堤之内、神崎、長瀬崎、字滝ノ河原、高崎鼻に繋終。(今日若松島済)。	日之島逗留測。若松島字大平の内、立瀬鼻沿海打止より左山沿海、ビシヤゴ鼻、ビシヤゴ瀬(大岩)、三年ヶ浦、布崎、大崎に繋終。又若松島の内、日之島枝間伏人家前より左山沿海、土ノ浦(大入江)、横山鼻にて打止終。	遠轍より左山沿海、月ノ浦、高タボ崎、若ノ浦、赤崎、日之島枝榦浦(尤若松村地内也)、白鳥鼻、貝ノ木浦入江奥(総名浦之内と云)に繫、戸口鼻、乳母ヶ浦、鶴ノ瀬浦、日之島村枝間伏(若松村地内)にて打止。
二〇七	二〇六	二〇七	二〇六	二〇六	二〇六

宿泊日・旧暦	【本隊】	文化10年7月	29
(西暦)		(1813)	(1813)
宿泊地	福江島	福江町 福江上町 福江酒屋町	福江島
現・市町村名	同	福江島 福江町 福江上町 福江酒屋町	同 五島市
宿泊宅	同	長崎県五島市	本陣客館 富田屋八郎治 吉田屋亀藏
特記・天体観測	同	本陣客館 富田屋八郎治 吉田屋亀藏 塩塚惣吉	本陣客館 富田屋八郎治 吉田屋亀藏 塩塚惣吉
大図番号	出止。此より早崎岬測遠轍に繋。江戸へ書状を打。左山沿海、横物波戸へ打出。それより向波戸へ渡を取。江川尻、丸木町、タブテを歴て山間横切向海辺、六方村字戸楽浦へ出、又タブテよ里、戸楽崎、馬立鼻、六方村字戸楽浦に繋。(従是行先海岸疱瘡人置場に付、人足船手共恐れれて人足引込、漸小人数にて巖石船測手間取)。六方浦、南河原崎、(此節大村引越疱瘡病五人ありと)、右に瀬続小島見切、奥浦村字惣津浦、大泊を歴て字早崎、干切元にて沿海打	【本隊】久賀島田ノ浦測所より曲ノ内を歴て向海辺に横切、又曲ノ内より出鼻回、明神崎(明神社有)を歴て横切に繋、船瀬崎、狹根崎、長崎、亀河原を歴て山越横切向海辺、田ノ浦入江奥、宇浦頭に繋。又亀河原より海辺(福江、富江)論所に付先日ツブラ島の例に両領人足にて測、黒崎、大下し、小瀬戸崎、中網代鼻にて左右両手合測(久賀島一周終)。【支隊】久賀島浜泊鼻より左山沿海測、百合崎、スガメ浦、魚見崎、ゲンギヨ鼻、鳶瀬、野首崎、野首浦、黒瀬鼻、小魚崎、中網代鼻にて東西手分合測。それより乗船。恒星測定	

					宿泊日・旧暦 (西暦)	
7 *	6 *	5 *	4 *	3 *	(西暦)	宿泊地
~ 2	(8. 1)	(~ 31)	(~ 30)	伊能	(29.)	福江村内寺山村鬼宿、三井楽・十二川追分より 街道測、字二ノ番町、字木場、大円寺川、枝三 尾野、福江・大浜街道追分。本山村枝吉田村、 枝堤村、枝野中、字高田、枝野々切村、大浜
同	同 富江浜ノ町	福江島 大浜村	黃島	同 大浜村	同 大浜村	同・市町村名
同	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	現・市町村名
同	本陣町年寄橋本屋仁左衛門 保田瀬兵衛	本陣御手洗喜十郎 社人森佐源	天野元五郎 中村万藏	本陣御手洗喜十郎 本陣御手洗喜十郎	本陣御手洗喜十郎 本陣御手洗喜十郎	宿泊宅
富江逗留測。 【本手】福江島田尾村、人家前海 辺より、十二川道、横切を測。江湖川小流、田 尾村枝平村、船引坂、二俣川小流、十二川 敷、岐宿村枝二本楠村、字越路、十二川街道、 宿(田尾)四辻。【小手分】黒島一周測。 村地方、字渡口より太郎島へ渡り一 島より竹ノ子島へ渡り一周測。竹ノ子 島へ渡り一周測。恒星測定	乗船、福江島内崎山村人家前浜より右山沿海、 崎山崎、中鼻、大ノ鼻、身投松鼻、蟹瀬鼻、塩 瀬、大浜村枝増田、戸垂崎、字牛石、福江 津浦、力クセン鼻、馬込鼻、水ヶ浦、弥兵衛 浦、本山村、大浦、広磯浜、経ヶ崎、里崎、大 浜村、山ノ浦、魚待鼻、大泊浦、神崎、大浜村 人家下に繋終。恒星測定	伊能は大浜に残。崎山村持赤島を測。字鵜ノ瀬 測。又赤島属板部島を測。小板部島一周測。小 板部より大板部島へ渡り一周測。小手分、大浜 村持黄島一周を測。恒星測定	伊能は大浜に残。崎山村持赤島を測。字鵜ノ瀬 測。又赤島属板部島を測。小板部島一周測。小 板部より大板部島へ渡り一周測。小手分、大浜 村持黄島一周を測。恒星測定	伊能は大浜に残。崎山村持赤島を測。字鵜ノ瀬 測。又赤島属板部島を測。小板部島一周測。小 板部より大板部島へ渡り一周測。小手分、大浜 村持黄島一周を測。恒星測定	伊能は大浜に残。崎山村持赤島を測。字鵜ノ瀬 測。又赤島属板部島を測。小板部島一周測。小 板部より大板部島へ渡り一周測。小手分、大浜 村持黄島一周を測。恒星測定	福江村内寺山村鬼宿、三井楽・十二川追分より 街道測、字二ノ番町、字木場、大円寺川、枝三 尾野、福江・大浜街道追分。本山村枝吉田村、 枝堤村、枝野中、字高田、枝野々切村、大浜 本村人家前海辺に出、測所にて打止終。恒星測 定
二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10 *	9 *	8 *	福江島 黒瀬村	伊能 同 富江浜ノ町	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	一一〇七
(5)	(4)	(3)	同 大宝村	同 五島市	福江島内富江陣屋下海辺より、黒瀬村へ街道横切測。富江陣屋表門通、富江本村、同枝横加倉、同枝山ノ手、同枝黒瀬村、山ノ手川端海辺へ出、人家前測所迄測る。又人家前測所より左浜百姓吉太百姓吉五郎百姓庄太	
同 玉之浦村字白崎	同 五島市	同 五島市	本陣真言宗 弥勒山観音院大宝寺 佐々野与八	本陣真言宗 弥勒山観音院大宝寺 佐々野与八	村役清右衛門	
同 五島市	同 五島市	恒星測定	崎、金手崎、高三郎崎、小手分と合測。【小手分】富江浜ノ町より右山沿海、鯨場町通、兩附鼻、字渡口に繋、舟廻浦、長崎鼻に至り、 幟に繋。畠尻浦、糰島崎、根瀬崎、六島崎、 頭浦、坪浦、笠山崎、高三郎崎にて両手合測。浦遠	伊能は富江より黒瀬村止宿差支に付残	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	一一〇七
会所亭主代官山口源吾 淨土宗西芳寺	琴石浜、力不崎、琴石村（在所）、崎目崎、太田村、戸懸崎、玉ノ浦村枝大宝村を歴て裏海、 佐々目浦へ横切。【小手分】大宝村より沿海、 瀬、鯨瀬（二子瀬二ツ遠測。伊能は富江より黒瀬村迄陸行、それより乗船同村に至。恒星測定	沿海、山ノ手川、丸子村、ウク工崎、丸子村（在所）、琴石村、布瀬鼻（大岩）、琴石鼻、 琴石浜、力不崎、琴石村（在所）、崎目崎、太田村、戸懸崎、玉ノ浦村枝大宝村を歴て裏海、 佐々目浦へ横切。【小手分】大宝村より沿海、 瀬、鯨瀬（二子瀬二ツ遠測。伊能は富江より黒瀬村迄陸行、それより乗船同村に至。恒星測定	福江島内富江村枝黒瀬村、山ノ手川端より右山沿海、山ノ手川、丸子村、ウク工崎、丸子村（在所）、琴石村、布瀬鼻（大岩）、琴石鼻、 琴石浜、力不崎、琴石村（在所）、崎目崎、太田村、戸懸崎、玉ノ浦村枝大宝村を歴て裏海、 佐々目浦へ横切。【小手分】大宝村より沿海、 瀬、鯨瀬（二子瀬二ツ遠測。伊能は富江より黒瀬村迄陸行、それより乗船同村に至。恒星測定	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	一一〇七
伝人撰にて測）。外批榔島遠測。恒星測定	大宝村字佐々目浦入江奥より左山沿海測、神浦、スイモン崎、井持浦、大瀬崎、小松崎、 之浦本村、（井持浦、白崎、越首、深浦）、 白崎、測所前に至る。同所裏海、字越首横切。 それよりエビス崎、字越首、字深浦、魚釣瀬に て打止終。【小手分】大宝村、黒瀬鼻より右山 沿海測、力崎、馬下り浜、馬首浜、ヲコシマ遠 測、大瀬崎、汐早崎、膳棚崎、鯛ノ鼻、島山瀬 （海岸絶壁波高大難所、手瀬遠測）。	大宝村字佐々目浦入江奥より左山沿海測、 立矢浦、別当木鼻、苦チキレ浦、トタケ 浦、スイモン崎、井持浦、大瀬崎、小松崎、 之浦本村、（井持浦、白崎、越首、深浦）、 白崎、測所前に至る。同所裏海、字越首横切。 それよりエビス崎、字越首、字深浦、魚釣瀬に て打止終。【小手分】大宝村、黒瀬鼻より右山 沿海測、力崎、馬下り浜、馬首浜、ヲコシマ遠 測、大瀬崎、汐早崎、膳棚崎、鯛ノ鼻、島山瀬 （海岸絶壁波高大難所、手瀬遠測）。	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	伊能は黒瀬村止宿差支に付残	一一〇七
	二〇七	二〇七				

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地 現・市町村名	11 *	12 *	13 *	14 *
(9)	伊能	(8)	昼休	(7)	(6)
同 荒川村	同 福江町	同 荒川村	同 玉之浦村枝丹奈村	同	同
同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同	同
遠見番役鳥巣八右衛門 遠見番役真弓甚六	客館 塩塚惣吉	遠見番役鳥巣億之助 遠見番役鳥巣八右衛門 遠見番役真弓甚六	本陣舟改役山役 鳥巣億之助	山役人中村甚助	同
の岐宿道にて打止。 歴て二本楠村内、字空穂木、福江街道追分迄測。字仁田、枝二本楠村内字粟畑、字小梅、岐宿村枝岳字坂ノ上、(但二本楠、中岳、杢山三ヶ村枝中名山内村と云)、枝松山人家前、七ツ岳越より岐宿村追る。此より岐宿道測、字小梅、岐宿村追分を江奥、十二川道追分より街道横切測、岐宿村枝分、字小梅より岐宿道測、字小田、岐宿村追江戸御役所へ書状を出す。此より先大絶壁風波強、測量ならず引取。昨十三日玉之浦にて坂部病氣不宜よしを聞、今朝當所出立、陸行福江へ着。大病に相成に付、今打止。此より外海波高測量不成。 〔小手分〕玉之浦属島山島を測。字平ノウド、一二川道追分、それよりウジボ浦、七ツ岳越追分、荒川村持権現島一周測、字白泊、キウナル崎、玉之浦村枝丹奈村、丹奈崎に打止終る。此より外海波高測量不成。 〔小手分〕玉之浦属島山島を測。字カツマ崎より左山、昼夜浦、小石浜鼻、字平瀬鼻、黒瀬崎にて玉之浦村枝荒川村より右山沿海、荒川人家前測所、字平ノウド、一二川道追分、それよりウジ印を残、ヨ印より沿海、小鼻を回りユ印に繋。土師ケ浦、銭亀崎、大瀬崎、一本杉鼻、布浦、桐崎、玉之浦村枝荒川村人家下迄測。	玉之浦逗留測。玉之浦村内童崎より右山沿海、弁天島渡口を歷て弁天島へ渡、汎測。又渡口より白ケンナ崎、笠神浦、笠神鼻、三郎ケ浦、仏崎、山ノ浦、立目崎、山ノ浦崎、夷崎に繋。代荒汐崎、赤崎、童浦、黒小浦、名古崎、ヲ浦、朝霧浦、サバキ網浦、カツマ崎迄測。	左山沿海、柴之浦、鳩山瀬戸口、築口に繋、それより往返、玉之浦村枝大宝村内、字佐々目浦より右山沿海、車崎、ケツレ浦、赤崎、瀬崎、玉之浦属島山島を測。字久瀬鼻より左山測、秋網川小流、中網代浜、同鼻、下り松鼻、藏ノ小島遠測、童浦、童崎にて沿海打止。 〔小手分〕玉力ノヲ浦、朝霧浦、サバキ網浦、カツマ崎迄測。	玉之浦逗留測。福江島玉之浦村、字魚釣崎より左山沿海、柴之浦、鳩山瀬戸口、築口に繋、それより往返、玉之浦村枝大宝村内、字佐々目浦より右山沿海、車崎、ケツレ浦、赤崎、瀬崎、玉之浦属島山島を測。字久瀬鼻より左山測、秋網川小流、中網代浜、同鼻、下り松鼻、藏ノ小島遠測、童浦、童崎にて沿海打止。 〔小手分〕玉力ノヲ浦、朝霧浦、サバキ網浦、カツマ崎迄測。		
二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七

						宿泊日・旧暦		(西暦)	
5		4		7月3日		【支隊】		今泉他三名	
(31)		(30)		(7.29)		○五島内福江島西海辺を測(坂部病氣に付福江浜町に残、医療快方跡より出立の言合)		(注)7月15日、坂部貞兵衛福江島福江町(現五島市)で病死	
同岐宿村		同		福江島戸岐浦		同五島市		同五島市	
同五島市		同		長崎県五島市		忠吉 徳左衛門		遠見番役鳥巣八右衛門	
給人西村八郎左衛門 治十郎		同		瀬崎(横、本能瀬懾に繋)、枝戸岐浦、ヲモヤ切鼻、十郎ケ浦、赤小島、大屋崎、嵯峨瀬浦、右に瀬続切鼻、忠太ケ浦に繋。右沖に弁天小島、山計岐宿村、大小島渡口を歴て、大小島へ渡り道崎にて沿海打止。それより奥浦村持小島一周測。それより乗船帰宿。		福江出立。福江島、奥浦村字子崎干切元より左山沿海、鳶ノ小島遠測、中崎、小田河原、小田崎、妙子瀬、松林崎、權現社拝殿、樺浦を歴て山越横切向海辺、泊浦に繋。又樺浦より沿海測、浜泊浦、鳥帽子崎、中鼻、仏崎、庄屋崎、一本松、ズギ浦を歴て入江奥字浦頭迄片測。又ズギ浦より沿海、女崎、左小山上に女崎宮、奥浦村人家下、大工町、忠太ケ縫を歴て山越横切向海辺、忠太ケ浦へ出、又忠太ケ縫より道崎にて沿海打止。それより奥浦村持小島一周測。それより乗船帰宿。		吉田屋龜藏	
瀬遠測、多附崎、巣浦、小長崎、岐宿村支配唐船浦、福見浦、道鳥ノ鴨		戸岐浦止宿下より沿海、左に鎮守大明神、崎、半泊浦、半泊小島、赤崎、掛橋崎、外間伏浦を歴て横切向海辺、外間伏浦に出、又間伏浦に繋。小宮原浦、小宮原崎、京崎、船隠浦、戸岐浦、戸岐浦止宿下にて沿海打止。		戸岐浦逗留測。奥浦村字道崎より沿海測、小能崎、忠太ケ浦に繋。右沖に弁天小島、右に瀬続切鼻、十郎ケ浦、赤小島、大屋崎、嵯峨瀬浦、ヲモヤ切鼻、忠太ケ浦へ出、又忠太ケ縫より道崎にて沿海打止。それより奥浦村持小島一周測。それより乗船帰宿。		此日八ツ半時頃、坂部貞兵衛病氣養生不相叶、於福江町命終。早速測量両手へ申遣し、猶又江戸表御役所へ死去届の書状を出す。		特記・天体観測	
居元にて打止、それより乗船帰宿。		戸岐浦止宿下より沿海、左に鎮守大明神、崎、半泊浦、半泊小島、赤崎、掛橋崎、外間伏浦を歴て横切向海辺、外間伏浦に出、又間伏浦に繋。小宮原浦、小宮原崎、京崎、船隠浦、戸岐浦、戸岐浦止宿下にて沿海打止。		戸岐浦逗留測。奥浦村字道崎より沿海測、小能崎、忠太ケ浦に繋。右沖に弁天小島、右に瀬続切鼻、十郎ケ浦、赤小島、大屋崎、嵯峨瀬浦、ヲモヤ切鼻、忠太ケ浦へ出、又忠太ケ縫より道崎にて沿海打止。それより奥浦村持小島一周測。それより乗船帰宿。		戸飛脚届。		セ飛脚届。	
二〇七		二〇七		二〇七		二〇七		大國番号	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
9	8	7	6	(8.1)	大曾根権現 神主阿比留日向
(一) 4)	(一) 3)	(一) 2)	同岐宿村	同唐船浦村山手浦	岐宿村逗留測。唐船浦村字鳥居ノ元より字黒崎、千鳥瀬崎、团助鼻、好物崎、大曾根浦、大曾根崎、山手浦、唐船浦村人家下浦頭に繫、トベラ崎、河原尻にて沿海打止。それより乗船帰宿。
同	同	同	同五島市	同五島市	岐宿村逗留測。唐船浦村字河原尻より御下ヶ浦、徳ヶ崎、岐宿村枝川霧村字大里、大里川尻、一ノ川尻、元ノ小島鼻を歴て前之小島へ渡り一周測。又元ノ小島鼻より沿海測、字馬回、これより街道、海辺一同、三井楽道・海辺追分、字浦ノ川を歴て三井楽道打越。字小松ノ元、三井楽道・山道追分にて打止。又、浦ノ川尻より、網揚ヶ浦、蕨崎にて沿海打止。それより乗船帰宿。
同	同	同	給人西村八郎左衛門	治十郎	岐宿村逗留測。唐船浦村字鳥居ノ元より字黒崎、千鳥瀬崎、团助鼻、好物崎、大曾根浦、大曾根崎、山手浦、唐船浦村人家下浦頭に繫、トベラ崎、河原尻にて沿海打止。それより乗船帰宿。
同	同	同	同	同	岐宿村逗留測。唐船浦村字鳥居ノ元より字黒崎、千鳥瀬崎、团助鼻、好物崎、大曾根浦、大曾根崎、山手浦、唐船浦村人家下浦頭に繫、トベラ崎、河原尻にて沿海打止。それより乗船帰宿。
沿海外打止。それより乗船、帰宿。 山越横切向海辺、字外津和浦に出、又字内津和瀬より沿海測。又地方黒小島瀬続真中より沿海測。又戸屋ノ縊浦を歴て山間を横切向海辺、字平床に出、又戸屋ノ縊浦より沿海、鯨越浦を歴て沿海、マホシ浦、小マボシ浦、出来網代崎に	横切、又字口クロ場より鼻を回り横切に繫、満用。字菜切浦、街道・海辺追分を歴て渕ノ元川ノ浦、片山鼻、折串浦、呼崎、二重ヶ浦、ハツナマツ崎、狩主崎、古里浦、岐宿越、三井楽道轆場にて打止。	岐宿村逗留測。岐宿村字蕨崎より字鰐川尻、崎、小浦、葦ノ浦、岐宿村人家下字浜蔵、左に淨土宗大黒山妙永寺、浜里、津木崎、中ノ前、左に恵日山本宮寺、宮小島一周目測、左上に岩立権現、前津浦、内山崎、海士崎、八崎、榎津崎、小渕ヶ浦、惣瀬浦、浜田浦、水垂、松ノ元を歴て地焚小島へ渡り半周測。地焚小島より沖焚小島へ渡り一周測。又松ノ元よりヨ印を歴て山越横切向海辺へ出てコ印を残置、又ヨ印より恵比須崎、行巣ヶ崎横切コ印に繫、西津浦、轆場にて打止。	岐宿村逗留測。岐宿村字口クロ場より向海辺に出、河原村となる。(これより街道、海辺両横切、又字口クロ場より鼻を回り横切に繫、満用。字菜切浦、街道・海辺追分を歴て渕ノ元川ノ浦、片山鼻、折串浦、呼崎、二重ヶ浦、ハツナマツ崎、狩主崎、古里浦、岐宿越、三井楽道轆場にて打止。	二〇七	大図番号

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
15	14	13	12	11
(10)	(9)	(8)	昼夜	(6)
同	同	同 三井楽本村浜畔村	同 貝津村	同
同	同	同 五島市	同 五島市	同
同	同	領主 仮屋 預主 代官 平山 基吉	谷川 清左衛門	同
死去の知らせ申来る。 測量不相成、浜畔村逗留。此夜八ツ時後、坂部	船、帰宿。	浜畔村逗留測。浜畔村江川尻より左江川添横切測、江迎、山子、江頭、平磐（此所より左右へ水流れ分る）、貝津村、井ノ内、釜蓋、竹山、向海辺江川尻へ出、繋ぐ。此より左山沿海測。江川尻を渡、貝津村、間瀬崎、高浜浦（蛤名物）、小長崎、丹奈村、彭泊浦、波戸崎、黒磐崎にて沿海打止終る。	浜畔村逗留測。柏村字滝崎より沿海、浜畔村枝砂間村、枝浜坂村、枝貝津村、薄崎、打瀬、白崎、江川尻にて打止。	岐宿村字小松ノ元より三井楽道測。野稻畠峠、大潟平、橘河内、元越、鰐川、楠原、三本松、松山街道・三井楽街道追分を歴て向海辺岐宿越に繋（河原村道）。又飛て三井楽道・海辺追分、菜切木場より三井楽街道測、山ノ神堂、向海辺、字内繩浦に出。此より右山にて沿海逆測。笠浦、笠崎、ドウジヤウ崎、千貫戸浦、小繩。葛籠崎、小浜浦、出来網代崎にて繋終。それより乗船。
二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七

宿泊日・旧暦	【支隊】	今泉他三名	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
7月22日	7月22日	7月22日	7月22日	7月22日	7月22日	7月22日	7月22日	7月22日
30	29	29	7月28日	【本隊】	福江島 川霧村 浦ノ川	長崎県五島市	大浦木置場	総名福江村 (本村) 三尾野村字寺山村、岐宿、久木、籠渕村字才原、字千代田、ウゼラ川、宇吉里川、大坂峠、ヒメジキ川、岐宿掛川霧村、一ノ川を渡、字馬回に繋終。
(25)	(24)	(23)	本隊昼休	福江島 本山村 字イカケ	福江島 岐宿村	福江島	福江島	○ 再び福江島西の方残を測。
奈留島東風泊	同	同 福江浜町 福江酒屋町	同 三井楽本村浜畔村	同 荒川村	同 松山村	同 五島市	同 五島市	
同 五島市	同	同 長崎県五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	
船中泊	同	吉田屋龜藏 本陣客館 塩塚惣吉	百姓忠兵衛	会所代官平山甚吉	中村五郎右衛門 中村喜左衛門	七社大権現拝殿 神主宗但馬	西村八郎右衛門	大浦木置場
福江町乗船。風波に付、奈留島、東風泊に船泊	上る。	【本隊】) 福江逗留。市中測。総名福江 (本村) 三尾野 犬ノ馬場、福江町・大浦追分より、三尾野町、本町、江川橋 手前に至る。祇園町、奥町、三辻迄測る。此よ り江川尻を渡 (即沿海測) 、江川向、字丸木町 に繋。又奥町三辻より酒屋町通を測。犬ノ馬場 人家、左に舟改番所、測所を歴て、波戸ノ元に 繋。五島侯より、一統へ国産を被贈下。此夕御 料理御酒被下。町奉行、代官度々出る。此夜家 老又野監物來て寛談、五島侯へ万國略図一幅を	【本隊】) 本山村字一ノ川端より福江街道測、 イカケ坂、字イカケ、字平山、福江村字瀬戸、 字三番町 (足軽小路) 、岐宿・十二川追分に繋 終。【支隊】姫島渡海ならず、浜之畔村出立。 無測にて福江町着。	浜畔村逗留測。姫島へ渡海の所、風波に付途中 より引取る。波砂間村より乗船、嵯峨島へ渡 る。嵯峨島人家下より左山測、海岸絶壁は山上 を測、字小井土手崎、字後平にて左右合測。	宿。西大風雨。姫島渡海ならず、逗留。	無測にて子持坂を越、三井楽浜畔村へ行て止	二〇七	二〇七
二〇六	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
文化10年8月 (西暦) (1813)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
5 * (30)	4 * (29)	3 (28)	2 (27)	1 (8. 26)
同	加喜ノ島 加喜ノ浦	江ノ島	同	平島
同	同 西海市	同 西海市	同	長崎県西海市
同	百姓 姓 藏 渡木 源右 衛門 本陣 庄屋 渡木 庄兵 衛	本陣庄屋松崎勘兵衛 一向宗善行寺 神主広江大和	同	庄屋林田十蔵 百姓源右衛門 百姓長右衛門 百姓近蔵
に阿穂へ出、又土井ノ浦より沿海入江回、内 大田字田浦迄測定。此より入江奥を歴て山越横切向海辺、下崎、永ノ浦、 小島崎、福ノ浦、清水崎、土井ノ浦、飯小島一周 にて打止。それより乗船、帰宿。恒星測定。	加喜ノ浦逗留測。 泊より右山測、浅浦崎、浅ノ浦、大津ヶ瀬、坊 主ヶ瀬、大風泊(入江巾を測)、小島、満切瀬 雨見ヶ浦入江奥を歴て山越横切向海辺、鯨瀬取 測、小島崎、福ノ浦、清水崎、土井ノ浦、飯小島一周 へ出、又雨見ヶ浦入江奥より沿海入江回、平	定江ノ島出帆、順風もありて加喜ノ浦着。恒星測 定迄測り小島一周測。又満切瀬続より沿海測、 得、五島送の船手伝、漸と出帆。江ノ島着。	奈留島東風泊出船。奈留島より引船来、竿崎迄 漕送。宮崎栄二郎は量地芸古の為此より隨身。 恒星測定。	二〇五

						宿泊日・旧暦
10 *	9 *	8 *	7 *	6 *	(西暦)	
(4)	(3) 小休共	(2) 伊能	(1) 大島 大島村	(31)	同	宿泊地
中ノ浦村	同	面高村 面高浦	大島 大島村	同	同	現・市町村名
同 西海市	同	同 西海市	同 西海市	同	同	宿泊宅
本陣川野弥右衛門 庄屋大串直治	同	本陣庄屋大串喜右衛門 大串長藏 川口伯左衛門	森柵右衛門 廣田祥助	同	同	特記・天体観測
面高村逗留測。面高村内字水尻より左山沿海、油出浦、後浜を歴て面高村人家間を横切向海辺、字中村へ出、又後浜より沿海岬回、番屋崎、左上に遠見番所あり、曲崎、難所崎、字中村横切に繋、測所を歴て、野崎浦、呼崎、弁天社あり、水ノ浦、天窪村、天崎、宮ノ浦、黒口崎にて沿海打止。それより乗船帰宿。	【今泉他四名】大島字小羅崎より沿海測、古田崎、横尾、瀬ノ渕、袋浦（横入江片測）、古田浦、洲鼻、引掛崎、間瀬を歴て雲雀崎にて左右合測。それより乗船。東嶋平橋来る。	伊能は加喜浦出立。乗船、面高浦泊	【今泉他四名】片島一周測。それより大島字立島本村測、牛ノ首、鶴瀬崎、大島村（人家下）、大島浦、田ノ浦を歴て入江片測。又田ノ浦より沿海測、尾崎（入江巾測）、櫻浦、上小羅崎にて打止。それより乗船。	加喜ノ浦逗留測。内鍬田浦より沿海測、内鍬田浦、又内鍬田入江奥より沿海測、上横浦（入江巾を測）、下横浦（入江巾を測）、黒崎、奥ノ浦、加嘉ノ浦（人家下）測所迄測る。阿古木、牟田島渡口を歴て牟田島に渡り一周測。鯨納屋場あり。当春一本取得よし。志自岐社あり。又牟田島渡口より沿海測、小田島、鶴崎、平原崎、外鍬田浦に繋、両手合測、加喜ノ島一周相済。それより乗船、帰宿。		
天窪村字黒口崎より沿海測、岩水、鯨ノ浦、雪ノ浦、黒口浦、小川左に觀音堂、字塩屋、大多和村、枝池崎、中浦村、呼子崎、魚見崎、下手崎、南風崎、江川尻、中浦村止宿下、八大竜王・正觀音合社（土塙石垣宣く見る）、小浜崎御差団にて入門。大村侯より時候見舞として御産物を一統へ被下置。						大國番号
一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15 * (9)	14 * (8)	13 * (7)	12 * (6)	11 * (5)	
三重村	同	神ノ浦村	同	松島 松島村西泊	
同 長崎市	同	同 長崎市	同	同 西海市	
池田順藏 本陣庄屋吉田左内	同	本陣庄屋一ノ瀬伊太夫 朝長清兵衛	同	前深沢与五郎 (当時は中橋才兵衛)	
下重村に繋。それより乗船。 本村、黒崎村枝永田、左に天満宮社、仏崎、三重崎、大岳の三 岐村枝出津、出津川尻、小城崎、大城崎、黒崎、黒 神ノ浦村・黒崎村境、字赤道(首)崎より沿海 順測、右沖にラビ瀬遠測、黒崎村枝賤津、黒 あり)。又止宿入口より沿海測、道徳、手水社 岳崎、相ノ川尻、雪ノ浦村枝小松、小松川尻、白 水	同	松島枝西泊止宿前測所より左山沿海、船入崎を 歴て五郎島へ渡り一周測。又船入崎より沿海 測、野崎、枝釜ノ浦を歴て山越横切向海辺、字 浦入り江口、阿漕ヶ浦に繋。又阿漕ヶ浦入り江 口よりハブノ浦を歴て山越横切向海辺、字小 瀬、小鰯場に繋。焼山崎、大鰯場、落石崎にて 終。それより乗船。恒星測定	松島逗留測。【伊能他四名】松島枝西泊測所よ り右山測、左冲に宮島遠測、浜泊(右山に石炭 掘三ヶ所)、呂渡崎、仏崎、枝外平、亀ノ浦、 大碧崎、角瀬遠測、干切櫛島、瀬戸満切真中を 歴て櫛島を測、右山測、左鬚ノ瀬遠測、談合ノ 浦、鷹ノ巣崎、右に石炭堀小家あり、即今最中 堀出す、瀬戸満切真中に繋、櫛島一周終る。又 瀬戸満切真中より沿海、馬籠浦、落石崎にて打 止。恒星測定	多井良村字清水鼻より沿海順測、字柳ノ浦、瀬 続小島あり満切の真中を歴て小島一周測。又満 切の真中より沿海、高穂崎に至る、急雨打止。 それより乗船。	二〇一
一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
1 3	1 2	1 1	1 0	9
(7)	(6)	(5)	(4)	(3)
同	同	瀬戸村	同	七ツ釜浦
同	同	同 西海市	同 西海市	
同	同	浦役人隈新	同	庄屋井手友右衛門 山方目付岩永丹内
瀬戸村逗留測。乗船、多井良村高穂崎より左山 沿海、白瀬鼻、ウバケ島遠測、二ツ小島遠測、 太鼻(測遠幟に繋)、瀬戸本村人家限、宮ノ崎源 に繋終。	七ツ釜浦、工ギリ鼻、長尾鼻、河内浦、錢亀崎に 繫。多井良村、鴨崎測遠幟より左山沿海、瀬戸 村、小鴨崎瀬戸を歴て満切小鴨崎を回る(即 沖小島遠測、板ノ浦より弥五郎浦、白瀬鼻、 ノ崎源)。親島遠測、又小鴨崎瀬戸より石火矢谷	瀬戸村逗留測。乗船、池島へ渡。神浦村持池 島、此島大村領流入人島也大池あり、池島一周 測。墓島(大村より出る真図を用遠測)。同属 島、沿海、三年ヶ浦(深入江)、女島遠測、鴨崎、 測遠幟にて打止。焼島へ渡、瀬戸村内焼島一周 手合測。石口浦、中浦村(人家下)、小浜鼻にて順逆両 測。焼島より福島の地方小瀬戸鼻へ渡を取る	七ツ釜浦逗留測。多井良村枝七ツ釜浦の内、 串浦より左山沿海、鳥越より横切に繫、字清水 鼻を歴て山合を横切七ツ釜浦に出、入江奥ノド ノ洲瀬戸に繫、それより右山逆測、多井良村枝 七ツ釜浦、四釜崎、桿ノ浦、七ツ釜の内、字鳥 崎、殿崎、中浦村、字伊佐ノ浦、ビシャコ鼻、 石口浦、中浦村(人家下)、小浜鼻にて順逆両 手合測。	大島内黒瀬出立。大島枝大子島測。大島の地方 間瀬鼻より渡り大子島一周測。又大島枝黒瀬持 島遠測、猪ノ渡鼻、屋敷鼻、赤崎、鳥帽子鼻、蓬萊 寺島測(人家なし)。字稻守鼻より右山に測、 中瀬鼻、ビシャコ鼻、横島遠測、蓬萊崎、蓬萊 稻守鼻に繫、寺島一周終。外にガラ島遠測。そ れより乗船、地方へ移、大村領多井良村枝七ツ 釜内名串崎より沿海逆測、字鳥越を歴て裏海へ 横切、字鳥越より七ツ釜浦入江奥ノドノ洲瀬戸 にて打止。
二 〇	二 〇	二 〇	二 〇	大國番号

			宿泊日・旧暦
(12)	(11)	(10) 本隊昼休	(西暦)
長崎町炉糟町	浦上渕村稻佐郷	福田浦 【本隊】	雪ノ浦
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 西海市
大同庵	忠藏 本陣庄屋志賀和一郎	本陣 庄屋佐々木代右衛門 成瀬貞助	小庄屋茂内 庄屋熊野牧太 浦庄屋富永伊左衛門
に出る。 稲佐郷出立。乗船、長崎町へ着。立山役所へ届 場前にて打止。	【本隊】式見村字螺崎、測遠幟より沿海順測、 詫摩浦、鍋崎、枝相川、式見本村人家下、左に 番所、前川尻、左に淡島大明神社、瀬続干切 島、左に鎮守乙宮大明神の社、福田村字蝶ノ 鼻、枝手熊、手熊川尻、手熊内字柿泊、後瀬、 後浜、能瀬に繋終。【支隊】式見村出立。福田 村枝手熊の内能瀬鼻より左山順測、竜崎、葛籠 浦、立目崎、福田村枝小江の内字小浦、西口 鼻、野島遠測、枝小江串毛崎、福田崎、障子 岩、福田本村、止宿下を歴て測所打上、即本陣 前。止宿下より船番所、字船津、字小浦、字大 浦、大浦川、成崎、観音崎にて打止。	福島測。同島立瀬鼻より右山測、婆崎、中鼻、 瀬戸村枝福島、焼島瀬戸、焼島より渡を取て残 小印に繋、又、松崎、測遠幟に繋終。又、瀬戸 村地方、宮ノ崎より左山沿海、雪ノ浦村、唐芋 崎(測遠幟繋)、音無川尻、奥は入江なり。川 尻口洲鼻より川向路へ渡を取る。川尻口洲鼻よ り川尻入江を回る。雪ノ浦本村入江を一周し川 尻口渡に繋、二ツ瀬鼻にて順逆両手合測。 ビ崎(測遠幟に繋)、舞ノ浜、三重村枝京泊、セ 崎、陌刈平村、亀甲島遠測、平川尻、ウブメ 障子岩、式見村内螺崎測遠幟に繋。	
二〇一	二〇一	二〇一	二〇一 大図番号

伊能図完成二〇〇年記念行事

「伊能図完成二〇〇年記念の集い」開催

今年（2021年）は、文政4年7月10日（西暦1821年8月7日）に伊能図（大日本沿海輿地全図）が幕府に上呈されてから二〇〇年目にあたる。

これを記念して、4月16日（金）から4月18日（日）の3日間にわたり、「伊能図完成二〇〇年記念の集い」が伊能忠敬の全国測量の拠点となつた隠宅が東京都江東区内にあつたことに因んで、江東区文化センターを会場にして開催された。



会場入口の案内板

及び「記念講演会」のほか、「伊能図フェスティバル」として、伊能図と伊能忠敬の測量機器の展示、伊能忠敬の測量とミウラ折りを体験するワークショップ、3D測量成績による「バーチャル富岡八幡宮」への参拝体験などであった。

一、伊能図完成二〇〇年記念式典

行事2日目の4月17日（土）の午後2時から、

「伊能図完成二〇〇年記念式典」が建物3階のレクホールで行われ、来賓、関係団体の代表等80名ほどが参加した。伊能忠敬研究会からは、菱山代表ほか、星埜、鈴木の両特別顧問、伊能洋顧問、玉造理事、新沢理事の6名が参加した。



記念式典の主催者挨拶の様子

右手奥に来賓、手前は関係団体代表者。左奥の主催者席には故渡辺一郎さんの写真が置かれていた

一香取市長、丸山聰一富岡八幡宮宮司の来賓4名から祝辞が述べられた。

最後に式のアトラクションとして、地元木場の木遣保存会「木響会」による木遣が披露された。また、参加者には記念の品として、令和の伊能大図「江戸」と「富士山」の2図が贈られた。

式典終了後、参加者は2階の展示コーナーに移動し、展示されている伊能図や伊能忠敬の測量器具などを見学したほか、ワークショップの会場に移動し、測量体験やミウラ折り、富岡八幡宮のバーチャル参拝に参加した人もいたようである。

二、記念落語会

4月17日（土）の午後5時からは、施設内のホールで「伊能図完成二〇〇年記念落語会」が開催された。

会場は500名余りの席があるが、コロナウイルス感染拡大防止のため、前後左右の席を空け、入場者数は定員の半数の250人に制限された。また、入場時には、検温と手の消毒をして、チケットも半券を自らちぎって箱に入れ、会場内でのマスク着用など、感染防止対策が徹底された。

記念落語会は、立川志の輔の独演会で、演題は「伊能忠敬物語——大河への道——」。志の輔氏自身が伊能図に出会ったところから、自身の体験を基に伊能忠敬の大河ドラマ制作に苦悩するドラマ作家を描いた1時間40分に及ぶ長編の創作落語であり、この嘶を基に映画化も進められているという。ドラマの脚本を依頼された作家が伊能図上呈の場面を見事に描いたが、伊能忠敬のドラマにはならないという下調べが待っている。伊能忠敬没後二〇〇年行事でも演じられたので、伊能忠敬研究会の会員には、馴染みのある嘶であるが、気がつけば、

式典は、開会後主催者を代表して推進協議会の会長である星埜特別顧問から挨拶があり、続いて野田勝国土地理院長、山崎孝明江東区長、宇井成

志の輔の大河ドラマに引き込まれていた。

誌1～5ページに詳細な報告がある。

四、伊能図フェスティバル

(1) 伊能図の展示

展示された伊能図は、旧陸軍が明治初期に模写した記録があり、平成13年に渡辺一郎氏によってアメリカ議会図書館で発見された大図のうち、関東地方の25枚、国土地理院が保有する1/6000の江戸実測図南北2枚、伊能小図の複製図3枚などのほか、新たにコンピュータで再描画した「令和の伊能大図」4枚（江戸、横浜、小田原、富士山）などである。



落語会の会場

入場者数は半分に制限され、前後左右の席は空席だが会場全体は来場者で埋め尽くされた



関東地方の伊能大図

地図に上って200年前の街道や地名を確認する参加者

いていたようだつた。

令和の伊能大図は、原寸大のものが展示され、見学者は、色鮮やかな地図とパソコンのフォントで読みやすくなつた地図に見入つてゐた。なお、令和の伊能大図は約二分の一に縮小したものが談話ロビーに設置された売店で販売されており、記念に購入する見学者も少なくなつた。本誌に添付した「令和の伊能大図」は、江戸の大図に南の横浜と小田原の一部を繋いだものである。

(2) 伊能忠敬の測量器具の展示

展示ロビーでは、伊能忠敬の測量で使用された器具のレプリカが展示されており、見学者は説明パネルを読みながら伊能忠敬の測量方法を確認していた。展示されていた器具は、中象限儀、小象限儀、半円方位盤、巻竜羅針、量程車、鉄鎖、間縄、梵天、御用旗などである。



伊能忠敬の測量機器の展示

手前から間縄、鉄鎖、量程車、小象限儀が並ぶ

行事3日目の4月18日（日）午後1時30分から、前日の落語会と同じホールで星埜由尚氏による記念講演会が開催された。会場のコロナウィルス感染防止対策は、前日の記念落語会と同様の措置が講じられ、参加者数も250人以内に制限された。講演の演題は、「伊能忠敬測量の日本地図を読む――100年前の日本の姿」で、講演内容は、本

このうち、関東地方の大図と江戸実測図は談話ロビーの床に敷き詰められ、その他は展示ロビーの展示パネルに掲げられた。江戸実測図は、地元の深川が詳細に確認できることから、見学者は地図の上に立つて100年前の地元の風景を思い描

このほか、展示ロビーでは伊能図や伊能忠敬の

測量を説明するパネルや富岡八幡宮の資料館で展示されている故渡辺一郎氏所有の原寸大伊能中図、測量行程を示した地図などが展示されていた。

展示ロビーと談話ロビーの入場者数は、3日間で700人以上となつた。

(3) ワークショップ（伊能忠敬の測量体験）

伊能忠敬による地図を描くための測量は、2点間の磁針による方位と距離の測定を繰り返す導線法で行われた。磁針は弯稟羅針が使われ、距離の測定には主に間縄が用いられたが部分的に歩測も使われた。この体験コーナーでは、弯稟羅針の代わりにオリエンテーリング競技で使われるシルバコンパスを使い、距離は歩測によることで、競技性もあり、親子連れや家族で参加する人の姿が目についた。



伊能忠敬の測量体験

シルバコンパスで方位角の測り方の説明を受ける参加者

コーンが設置され、参加者は指導者の説明を聞きながら測量を体験し、描いた地図の出来栄えに喜一憂していた。

会場が屋外であり、天候が気になつたが、2日目の夕方に降雨があつた以外は、予定通り実施でき、3日間の参加者は130人余りであつた。

(4) ワークショップ（地図のミウラ折りに挑戦）

「ミウラ折り」は、宇宙構造物の設計家で人工衛星の太陽電池パネルや大型の宇宙アンテナなどの設計に携わった三浦公亮氏の発案による紙の折り方で、折り畳んだ紙を一瞬で開き、一瞬で元に戻せるという特徴がある。



地図のミウラ折りに挑戦

難しそうだけど説明を聞きながら手順に従って折れば意外に簡単

多くの展示室で、3日間の参加者は120人ほどであつた。

(5) 3D測量による「バーチャル富岡八幡宮」への参拝体験

富岡八幡宮境内の3D点群データによる立体モデルが作成され、参加者は専用のゴーグルを装着することで境内の立体的な景色の中を自由に異動してバーチャルの参拝を体験していた。

会場はミウラ折りと同じ展示室で、3日間の参加者は110名ほどであつた。

本記念式典は、2年以上前から渡辺一郎名誉会員が企画・提案し、星埜由尚特別顧問と堀野正勝会員が中心になつて関係機関や地元、立川志の輔氏等と調整を行い、1年ほど前から推進協議会を立ち上げ、4回の委員会と5回の幹事会で議論を重ね、漸く実現したものである。折しも新型コロナウイルスの感染拡大の問題が重なり、実施も危ぶまれたが、3回目の緊急事態宣言が発出される直前に開催できたことが幸いであった。

伊能忠敬研究会としても、ご協力いただいた関係機関、団体に対し謝意を表するとともに、準備から運営に携わられた幹事の方々に改めて敬意を表したいと思う。

（事務局）

* 「伊能図完成二〇〇年記念事業推進協議会」構成団体（順不同）

日本土地家屋調査士会連合会、公益財団法人日本測量調査技術協会、一般財団法人日本地図センター、公益社団法人日本測量協会、一般社団法人全国測量設計業協会連合会、一般社団法人地図調製技術協会、一般社団法人日本ウォーキング協会、伊能忠敬研究会

会場は1階の中庭で、歩測の幅を確認するため、30mの基線と地図に描くポイントとなる目印の

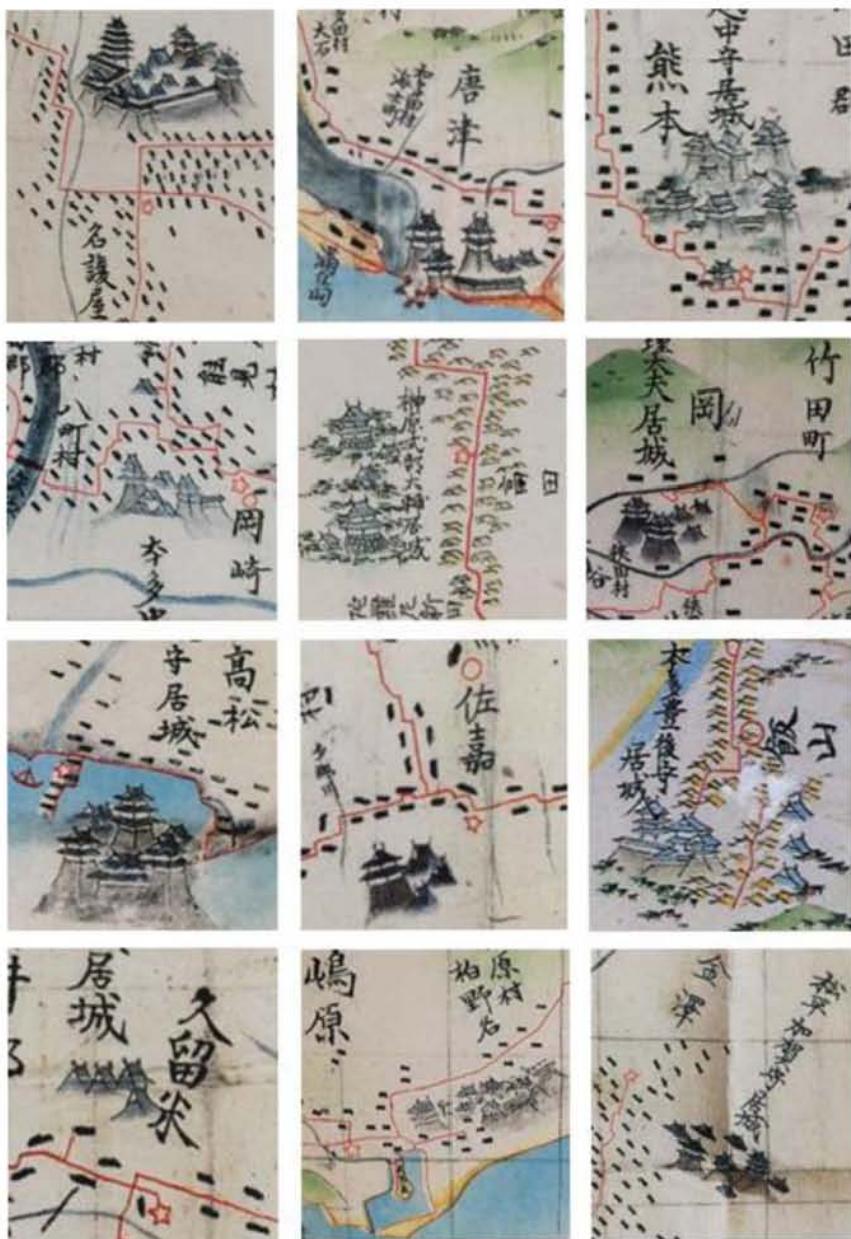
伊能図に描かれた現存十二天守

河崎 倫代

伊能図を見ていると、二〇〇年前の日本を旅している気分になる。例えば、城下町を歩く。測線に沿って今も歩ける町がある。☆印がある。この町の星空はどんなだったろう。山あいの城下だったら空は狭かったはずだ。天守が見える。しかし、今は見られなくなった天守も多い。この二百年間に火災、落雷、地震などで失われてしまった。幕末に存在していた天守は六十余りだったという。

明治維新後は、版籍奉還、廢藩置県と続き、城はその役目を終えて天守も解体された。かろうじて残った天守はわずか二十だったという。さらに、太平洋戦争中の空襲によって七天守が、戦後の失火によって一天守が失われた。こうして、現存している江戸期からの木造天守は十二となつた。今日、各地に見られる天守の多くは「復元天守」である。そこには、史実に基づいて再現された天守もあるが、外観、内部、建築資材などに疑問を持たざるを得ないものも少なくない。

伊能図に描かれた天守は、測線と文字と山並み、家並み、若干の地図記号の続く中で、ひときわ美しい、見て楽しい存在だ。しかし、錯覚してはいけない。これは実写ではないのだ。まるでドローンを飛ばして得た空撮写真を見て描いたように俯瞰的である。伊能隊が城下の街路から見上げて描いた構図ではない。城を描くに際しての基準はあつたのだろうか。それとも担当隊員の筆任せだったのだろうか。そのことに触れた研究があつたら教えていただきたい。



伊能図に描かれた城の例

これからリポートする「伊能図に描かれた現存十二天守」は、かつてその城を訪れたことのある石川県支部会員が、『測量日記』を読みながらレポートに記述する、ちょっとした紀行文である。コロナ禍の中、気軽に楽しんでいただければ幸いだ。

として引用した。

※参考文献

- ・山下景子著『現存十二天守』幻冬舎新書二〇一一年

・『伊能図大全』河出書房新社二〇一三年

- | | | | |
|-------|-------|--------|--------|
| 第4卷 | 第2卷 | 第3卷 | 第3卷 |
| 35 p. | 45 p. | 157 p. | 50 p. |
| 65 p. | 50 p. | 69 p. | 197 p. |
| 67 p. | 69 p. | 71 p. | 200 p. |
| 71 p. | 85 p. | 85 p. | |
| 85 p. | | 95 p. | |

※「現存十二天守」のうち四天守は四国にある。
第六次測量にのみ参加した幕府天文方下役柴山伝左衛門の『旅中日記』は『測量日記』を補足する貴重な記録であり、ここでも『柴山日記』

宇和島城（愛媛県宇和島市）

室山 孝

伊能忠敬測量隊が宇和島城下にやつて来たのは、第六次四国測量の文化五年閏六月二十一日（一八〇八年八月十二日）である。忠敬をはじめ、天文方下役四名、内弟子三名、従者など八名、総勢十六名であつた。

四国西南域沿岸はリアス式の海岸線が続き、そのほとんどが伊予（愛媛県域）にある。測量隊が土佐から伊予に入った六月二十五日、宇和島伊達藩の郡（こおり）方下役である都筑九右衛門・横田儀兵衛・森丈右衛門・小川五郎兵衛ら八名に出来られた。小川五郎兵衛は測量家であった父五兵衛の跡を継いで藩の絵図御用を勤めており、測量隊の作業にも加わったことが『測量日記』に記されている。伊予最初の宿所内泊浦（愛南町）の本陣には、宇和島藩郡奉行山家（やんべ）佐織も挨拶に来ている。



『伊能図大全』(河出書房新社)第3巻 264p

元禄十六年（一七〇三）の「宇和島御城下絵図」（公財）宇和島伊達文化保存会所蔵を見ると、本陣には、宇和島藩郡奉行山家（やんべ）佐織もそれに続く「堅新町通」、その東側に「本町通」、さらにその東側に「裏町通」とあって、この三本の通りが基本的な町人町であった。近代に入って城山周囲の堀は埋められ、今はバスが通る幅広い道路（国道59号線）となつたが、旧町人町は「袋町通」以外それほど道路幅は変わっておらず、当時の「本町通」は、現在の本町追手二丁目付近から、中央町二丁目、新町一丁目へ南北に抜ける細い通りである。この通りが中央分離帯のある「牛鬼すとりーと」と交差する角に、宇和島市設置の旧町名「本町」標柱が立つ



旧町名「本町」標柱。(HP「宇和島の散歩道」より)。
左上方に天守が見える。

ており、天守閣も垣間見える。

『測量日記』に、翌二十二日は朝から晴天であったが、宿所に逗留し、「地図盤を仕立てる」とある。複雑な沿岸や多くの島々の測量データを整理し、下図作成に取りかかつたようだ。郡方下役の都筑・横田・森・小川の四人が袴姿で来訪し、また下目付寺田由兵衛も来訪しているので、彼らに地図作成作業を見学させたのであろう。寺田由兵衛は「以後、案内によし」とあり、翌日の測量案内を勤めたらしい。この日の夜も天文測量が行われた。

二十三日は、朝から曇り晴れで、坂部・柴山・下川辺・青木ら隊員六名は城下町と近辺の測量に出かけた。六ツ半頃出立、「本町二丁目」から「播磨口ノ門」、そこから「大手前」を通り、「中ノ町（侍屋敷）」、「佐伯町」、「松崎新田」、「毛山村南

測量隊は複雑な海岸線や由良岬を丹念に測量し、日振島・戸島のほか、小さな島々も丁寧に測り、宇和島城下町に到着したのであつた。

『測量日記』に、宿は本陣味噌屋庄三郎、脇亭主麿屋助右衛門・灘屋貞二郎、別宿は米沢屋六右衛門、脇亭主米沢屋幸六・中屋安太郎とある。測量隊員柴山伝左衛門の『柴山日記』には、「本町三町目」の「菜種や米津（沢）屋六左衛門」方に八ツ半頃到着とあり、これは別宿であつた。『測量日記』に、翌々日二十三日の測量は、「本町二丁目測所」から開始とあるので、「本町二丁目」に忠敬らの本陣宿があつたようだ。二十一日の夜は晴れて天文測量を行つた。「輿地実測録」（国立公文書館蔵）には、「宇和島本町 三十三度一十四分」とある。

組」、「来村」（くのむら）、同村内「宮下村」を過ぎ、「九嶋浦」、「坂下津浦字午越（馬越）」まで測量し、一昨日の測点に合測させた。そこから船で城下町の北方「須賀浦の内宇川崎」まで海を渡り、さらに同浦の内「堤新田」、「須賀（本浦）」を測り、それより宇和島城下の北側「横新町」、「堅新町」、「袋町（二丁目・二丁目）」、「茶屋横町」を通って、「本町二丁目測所」に繋いだ。城の周囲を一周したことになる。

『柴山日記』にも、前半は二十一日測量の逆コース「城下市中并侍屋敷を通り、二十一日打止に繋ぎ」、後半は船で川崎並びに渡り、北側から市中を通り、今朝の出発点で終わったとある。この測量は、前測量の確認と、案内役である下目付寺田由兵衛の測量見学（案内と監視）を兼ねたものであつたと思われる。



本丸二之門跡付近から見た宇和島城天守閣

一方、宿所に残つた隊員は下図作成等に当たつたと思われるが、忠敬はこの日、城下町北側の外にある和靈神社に参拝した。『柴山日記』による

二十四日の『測量日記』に、「晴曇、この日、当城下出立の所、郡方一同の願いにつき、地図を成す」とある。出立予定を一日延ばし、郡方の依頼を受けて、地図作成に当たつたのである。何の地図か記載はないが、小川五郎兵衛も参加した、島々を含む宇和島藩領域の下図と推測される。『柴山日記』に、この日、郡奉行山家佐織來訪とあるのも、測量隊への労いのためであった。専門家ではない柴山は作業に加わらず、山家の話し相手をつとめたのである。

さて、宇和島伊達藩十万石の城下町宇和島は、リアス式海岸の宇和島湾最深部にある。元禄十六年の古絵図によると、城山は直接海に面し、そ背後に城下町が形成されていた。現在の城山北側と西側の市街地は当時海であり、天然の堀となっていた。

伊能大図を見ると、測線は宇和島城の前面（西側）を通らず、背後の城下町に回り込んでおり、海岸線は見取り図である。二十三日の城下及び周辺測量では、坂下津浦馬越から須賀浦川崎まで、城山

と、翌二十四日昼過ぎ、郡奉行山家佐織が来訪し、山家の先祖（初代伊達秀宗に仕えた家老山家清兵衛公頼）の靈を祀る和靈神社の由緒を語り、先祖は主君に諫言し「切腹」した忠臣であるとしている。「切腹」とあるが、實際は、清兵衛の財政立て直し策に不満を持つ政敵が、主君秀宗に讒言し、暗殺されたとのこと。その後、政敵や暗殺関係者が変死し、災害や飢饉も起こつたため、清兵衛の怨霊の仕業とされ、秀宗は清兵衛の靈を鎮めるため、和靈神社を創建したのであつた。

二十四日の『測量日記』に、「晴曇、この日、当城下出立の所、郡方一同の願いにつき、地図を成す」とある。出立予定を一日延ばし、郡方の依頼を受けて、地図作成に当たつたのである。何の地図か記載はないが、小川五郎兵衛も参加した、島々を含む宇和島藩領域の下図と推測される。『柴山日記』に、この日、郡奉行山家佐織來訪とあるのも、測量隊への労いのためであった。専門家ではない柴山は作業に加わらず、山家の話し相手をつとめたのである。

筆者は、城山東側（大手）の登城口から桑折長屋門（家老桑折家屋敷の門を移築）を通り、比較的急な石段の道を登り、中腹の井戸丸を経て、本丸へ上がつた。二の門跡から東南に振り返ると、本丸石垣の向こうに天守閣が優美で印象的な姿を見せていた（写真）。本丸西端と天守三階からの眺めも素晴らしかつたが、宇和島湾は市街地の向こうにやや遠く見えた。

昼食に名物「鯛の釜飯」を注文した。シンプルながらとても味わい深く、旅の思い出の一つになつた。鯛は古くから宇和島の名産であり、四泊もした測量隊の食事メニューにも当然上がつたであろうと、しきりに想像された。

の前面を船で渡つたが、この間は測量できなかつたのである。その頃迄には一部埋め立てられていましたが、藩としては幕府役人に測量されたくなかったのである。

宇和島城は、文禄四年（一五九五）、豊臣秀吉により七万石で封ぜられた藤堂高虎が、大名として初めて完成させた城であり、慶長六年（一六〇一）完成という。その後、慶長十九年（一六一四）、伊達秀宗が徳川家康より十万石を拝領し、翌二十年入部して以来、二二五年九代に及ぶ宇和島伊達家の居城となつた。標高八〇メートルの城山の本丸に建つ天守閣（国重文）は、寛文十一年（一六七一）、二代伊達宗利が大改修したもので、三層三階、白壁総塗込め造りで、高さ一五・七メートルである。

筆者は、城山東側（大手）の登城口から桑折長屋門（家老桑折家屋敷の門を移築）を通り、比較的急な石段の道を登り、中腹の井戸丸を経て、本丸へ上がつた。二の門跡から東南に振り返ると、本丸石垣の向こうに天守閣が優美で印象的な姿を見せていた（写真）。本丸西端と天守三階からの眺めも素晴らしかつたが、宇和島湾は市街地の向こうにやや遠く見えた。

※参考文献

- ・『愛媛県の歴史散歩』（山川出版、二〇〇六年）
- ・『宇和島城』（宇和島市教育委員会文化スポーツ課二〇一九年版パンフレット）

松山城（愛媛県松山市）

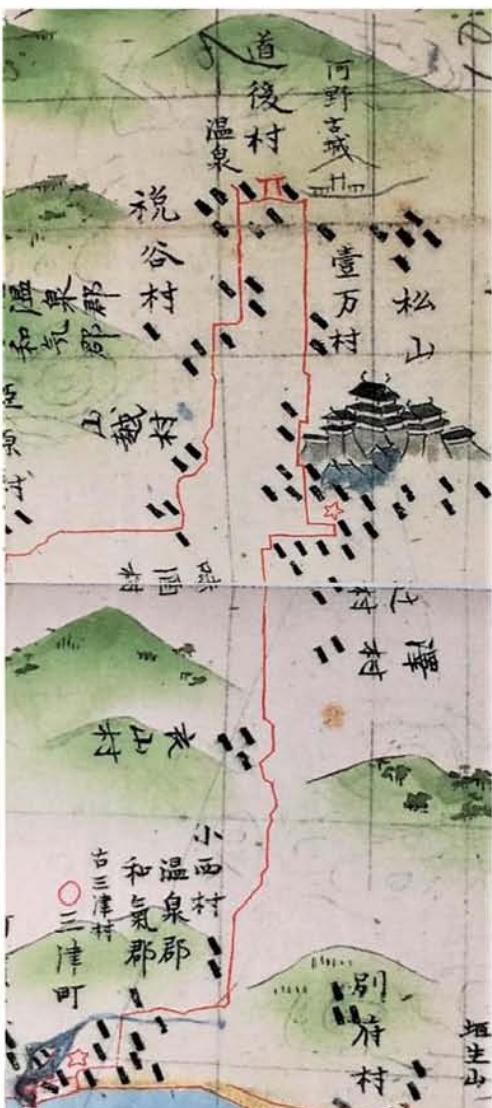
室山 孝

松山といえば、若き日に旧制松山中学校教員として滞在した夏目漱石が描いた『坊ちゃん』の舞台であり、また司馬遼太郎『坂の上の雲』で正岡子規と秋山好古・真之兄弟が青春時代を過ごした町として描かれ、これゆかりの観光名所も多い。

市街地東北にある道後温泉は日本最古の温泉とも言われ、道後温泉本館（国重文）は明治二十七年（一八九四）建立の木造三層楼であり、独特的の雰囲気を醸し出している（現在営業しながら改修工事中）。

伊能忠敬は、第六次の四国測量の時、文化五年八月十一日（一八〇八年九月三十日）から松山城下に三連泊、次いで道後温泉に二連泊した。『測量日記』は次のように記す。

十一日、七ツ頃に船で無須喜島（睦月島）を出立した測量隊は、先手の伊能忠敬らが新浜村枝村高浜村（松山市高浜町高浜）、後手の坂部貞兵衛



『伊能図大全』(河出書房新社) 第3巻

246p、247p

府中町から呉服町、新町、清水町、水口町、一万山日記』は記す。

十四日、五ツ後、大曇の中、松山城下を出立し、山府中町北極高三十三度五十一分半」とある。

十三日も晴曇であったが逗留し、地図を作成した。この延泊は、道後村に神事があるためと『柴

山日記』は記す。

らはやや北側の堀江村（松山市堀江町）に着岸。三津町を通り、両隊は九ツ半後に城下府中町（城山の西側。現、若草町付近）に到着。本陣「城下会所」に宿泊した。松山までの案内は松山藩の郡方下役・浦方下役と村役人が付き添い、城下の案内は町役人が担当した。会所の亭主役は大年寄和田屋政右衛門であった。当時、府中町の南端は松山城の西堀に接し、武家屋敷があつたが、隣接して南北二つの奉行所が道を挟んで立地し、その北側に町会所が隣接してあつたという。宿所の「城下会所」とはこの町会所のことであろう。

翌十二日は朝から晴れていたが、会所に逗留。地図を作成し江戸の暦局へ書状を書いた。夜は天文測量。「輿地実測録」（国立公文書館蔵）には「松山府中町北極高三十三度五十一分半」とある。

村と道後村まで測量。松山城の北側を東に進むコースであった。

『測量日記』に、道後村入口右手に河野古城跡（中世伊予守護であった河野氏の居城跡、現在「道後公園湯築城跡」として整備）と八幡社があると記し、伊能大図にも「河野古城」が記載される。古跡と寺社は忠敬の関心事であった。

四ツ後、本陣で温泉主（温泉場の鍵を預かる管理者）である明王院に到着。別宿は鹿島屋平吉方であった。『柴山日記』に、明王院は惣髪で身分は俗、「惣湯預り」とある。修驗者（山伏）であったようだ。

道後温泉は、寛永十五年（一六三八）、新藩主松平定行が施設整備に着手し、深さ約六五cmの浴槽を、高さ約一・二二mの石垣で囲み、六つの浴室に分



中央が大天守、左側が小天守。見えないが左手に南北二つの隅櫓があり、十間廊下（渡櫓）で結ばれる。

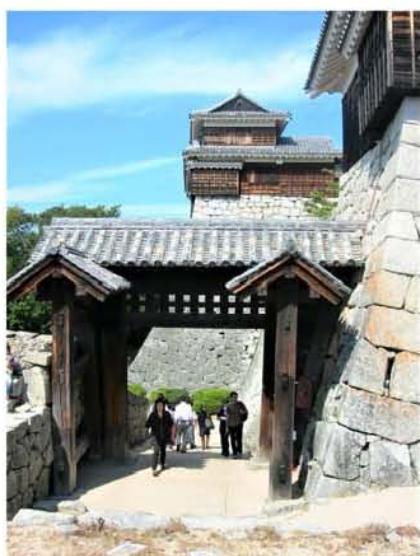
けたという。当時、大屋根の惣湯の入口は東北側の東から「一之湯」（武士・僧侶用）、二之湯（女性用）、「三之湯」（庶民男性用）、南側に「十五銭湯」（武士の妻女用）、「十銭湯」、「養生湯」（旅人・庶民用）の六湯があり、使用後の流れ湯で西端の外れに「牛馬湯」（家畜用）が設けられたという。

温泉管理は寛文頃までは町奉行の下役が務め、次いで藩主別荘の御茶屋番が引き継ぎ、元禄頃から明王院が惣湯の鍵を預かり、明治維新まで続いた。明王院は宿屋株を握つて入浴客の管理に当たり、また享保十九年（一七三三）に藩主別荘であった御茶屋が廃止された後、藩主の休息所にもなつたという。測量隊の宿所本陣になつた明王院には、そのような背景があつた。

近年旧藩主家子孫の久松家で発見された江戸中期（元禄十六年～享保七年頃）の『道後温泉絵図』は、中央に瓦葺きの温泉（惣湯）を描き、その左手（北側）に藩主別荘の「御茶屋」、手前（西側）には平屋の建物が両側に並ぶ「湯之町」があり、その北側町並の角、惣湯に面して「鍵屋」（明王院）を描いている。測量隊の別宿は、「湯之町」にあつた旅宿であろう。

忠敬は温泉に関しては何も記していないが、『柴山日記』に、「一ノ湯、二ノ湯、三ノ湯、養生湯、十五銭湯、十銭湯、馬ノ湯 都合七湯也」とあり、この構成は、寛永年間の創建時と基本的に変わつていないようだ。柴山伝左衛門は、「一ノ湯留湯」に幾度も入つたとある。また「名産 道後織柄糸、道後脇素麺」ともある。この素麺とは寛永十二年（一六三五）創業をうたい、現在も供される五色素麺のことであろうか。

十五日、朝から雨で逗留し、地図を作成。午後



戸無門と本丸太鼓楼

雨が止むと、七ツ後、忠敬は八幡社（『柴山日記』）に「湯月八幡、大社也」とある、現在の伊佐爾波神社に参詣。翌十六日、測量隊は道後村を出立し、次の宿所辻町（松山市北条辻町）へ向かつた。

このように、城下町会所と道後温泉に計五泊しながら、ほとんど宿所で地図作成に従事した。この作業はおそらく測量データを整理し、下図作成に当たつたもので、隊員の休息も兼ねていたと思われる。ここへ来る前、宇和島城下では、郡方一同の依頼に応じ、一日延泊して、おそらく宇和島藩領内の下図を作成し提供したが、松山ではそのようなことは『測量日記』にも書かれていないので、通常の下図作成作業であろう。

松山藩は十五万石（厳密にはこの頃十四万石）で、当時の城主は松平定則（松平家十代目）であった。松山城（国重文）は、市内中心部にある標高一三二メートルの勝山丘陵にある。本丸へ上がるには、東側、東雲町側からの登城道に沿つて設置されたロープウェイやリフトを利用すると便利である。筆者が乗つたロープウェイは、『坊ちゃん』に出て

手前の小天守に、南北二つの隅櫓を配置して渡り櫓でつなぐという形式で、内側に中庭ができるという防御を考慮した特徴のようだ。

もっとも、現在の天守閣は嘉永五年（一八五二）に四年かけて再建竣工したもので、伊能測量隊當時のものではない。実は、定則の父松平定國のとき、天明四年（一七八四）一月一日の夜、天守への落雷から、火災となつて焼失しており、測量隊が来た時、天守閣はなかつた。勿論、測量隊は城内立ち入りを許されたわけではなく、城下町から城山を見上げても、櫓の一画が垣間見えるだけだったのである。



大天守より見た本丸と松山市内

- ※【参考文献】
- ・『愛媛県の地名』平凡社、一九九三年
 - ・『松山城』（財）松山観光コンベンション協会二〇〇七年
 - ・『湯の町道後隅々案内』（株）エスピーシー、二〇一二年

くる「マドンナ」風装いの女性ガイドが案内した。
上がつて曲輪の左手、大手門跡を通り、戸無門から筒井門、次いで太鼓門をくぐると、正面突き当たりに連立式の天守閣が見える。これは奥の大天守と左

跡を通り、戸無門から筒井門、次いで太鼓門をくぐると、正面突き当たりに連立式の天守閣が見える。これは奥の大天守と左

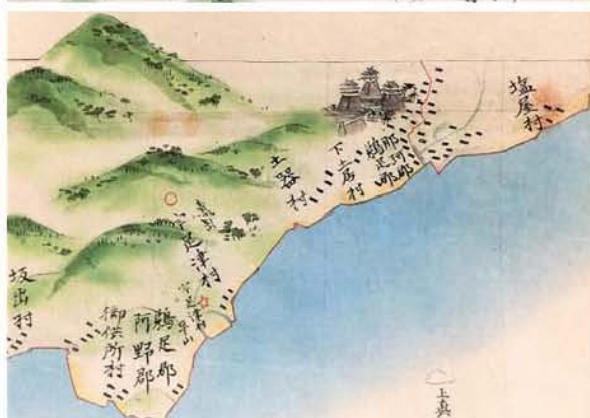
丸亀城（香川県丸亀市）

河崎倫代

伊能忠敬一行が丸亀城下に入ったのは、第六次四国測量の文化五年九月二十日（一八〇八年十一月八日）。『測量日記』によると、この日も二手に分かれて測量し、忠敬隊は四ツ前に丸亀城下に着いた。止宿先は通町の本陣高島勘右衛門。着後、郡方下役、町同心、町惣年寄、町奉行らが次々に挨拶に來た。本陣は屋号を「見附屋」とい、代々町の大年寄りを務めていた。一千坪の敷地には豪華な客殿と庭園があり、数々の著名人の宿泊所となつたが、『測量日記』には家作に関する記述はない。現在、跡地には「史蹟 丸亀本陣址地」の石碑が建っている。『測量日記』によると、柴山伝左衛門らは別宿大島屋「吉蔵」宅だったが、『柴山日記』では宗古町の大島屋「吉兵衛」と記している。

記』では宗古町の大島屋「吉兵衛」と記している。七ツ頃より雨。夜は大曇りで天文測量はできなかつた。高松藩の久米栄左衛門（通賢）が訪ねて來たが、夜も更けていたので会わなかつた。翌二十一日は二手に分かれて金毘羅社領松尾町まで測り、本陣伊予屋半左衛門、別宿多田屋治兵衛宅に分宿。夜は曇っていたが五ツ頃に晴れて天文測量をおこなつた。

二十二日は朝より晴天。『測量日記』には「金毘羅参詣。直に金光院へ立ち寄り座敷一覧」とのみ記されている。しかし『柴山日記』には、忠敬、坂部、柴山、下河辺、青木の五名が麻の絆を着用して参詣し、初穂料を下役四人で「百疋」納めたこと、茶菓子が出されたことなどが書かれている。忠敬は寛政五年（一七九三）に久保木清淵らと共に、伊勢参宮と関西旅行に出た。その際の『旅行



『伊能図大全』（河出書房新社）第3巻 180p、182p



「石の要塞」といわれる丸亀城。壮大な石垣と三層三階の天守は城下からも望めた。2018年7月の西日本豪雨とその後の台風で、城の南側にある三の丸とその下段の帯曲輪の石垣が大崩落し、現在、修復中である。丸亀城の顔ともいえる大手門側の石垣に被害はなく、通常通りの見学ができた。

記』によると、金毘羅参詣のため乗船したが、風向きが逆で波も荒かつたので参詣を諦め引き返したという。十五年ぶりに金毘羅詣でが叶つたといふのに『測量日記』の記述は随分と簡略である。参詣後、無測量で丸亀城下へ引き返し、各々前宿に止宿。宿へ久米栄左衛門が訪ねてきた。まもなく始まる高松藩領測量の打ち合わせだろう。夜は晴れて天文測量ができた。『輿地実測録』（国立公文書館蔵）には「丸亀福島北極高 三十四度一十八分」とある。

翌二十三日、城下を出立し船で塩飽諸島の測量に向かった。『柴山日記』には、大小二十六島のうち十九島を実測し、残りの七島を遠測したことが記録されている。私が丸亀城を訪れたのは、一〇一九年三月。伊能隊とは逆に琴平町に宿泊し、七八五段の石段を登つて金刀比羅宮に参拝。大門を入つてすぐに、

白い傘の下で名物の「加美代飴」を売る



「五人百姓」の露店と
「加美代飴」

乗り継いで丸亀に向かった。駅から徒歩十五分くらいで丸亀城正門に着く。城跡は亀山公園として整備され、天守までは急勾配の坂道を七、八分歩かなければならぬ。途中「日本一」の高さを誇る石垣がそびえる。天守は三層三階。日本一小さいとされ、高さ十五メートル。城下から大きく立派に見えるように、正面（北側）は幅十一メートル、唐破風や入母屋破風を施しているが、西側は幅九メートルと狭く、装飾も一切ない。昭和十八年に重要文化財に指定されている。小さな天守からは丸亀市内が一望され、瀬戸内海や瀬戸大橋、讃岐富士を望むことができる。



五つの露店があつた。本来は商売禁止の境内だが、神事への功労により昔から特別に営業を許された「五人百姓」だ。『柴山日記』にも「名物、薄く

金刀比羅宮参詣を終えて、JR土讚線・予讃線を

か。

どん学校」に体験入学してみた。粉を練り、足で踏み、麺棒で延ばして切り、茹でて食べる。約90分の行程。肝心なのは、季節によつて塩分濃度を

変えることと「踏む」と。軽快な音楽に合わせて、仲間が囁き立てる中で、踊るようにならう。

終了後は、卒業証書・うどん作り秘伝帳・古地図が一体になつた掛け軸と麺棒がプレゼントされる。上手にマニュアル化された楽しいひと時だった。おススメです。



塩水 = 小麦粉 × 42%		水	
Saltwater (中力粉)		(水)	(水)
250g	× 44%	460g	(水)
中力粉		460g	(水)
		= 110g	(水)

・参考文献

- ・山下景子著『現存十二天守』幻冬舎新書二〇一一年
- ・佐久間達夫「伊能忠敬、旅先で方位や緯度測定」『伊能忠敬研究』五十七号二〇〇九年

令和の伊能大図制作

令和の伊能大図をつくる会 横溝 高一

1はじめに

付録の地図はアメリカ議会図書館蔵伊能大図（以下、アメリカ大図）を基図として、後述するとおり国立国会図書館蔵伊能大図（以下、国会大図）等を参照しPCで着色、図1のよう90号を中心89号、93号、97号、99号の部分を接続しています。2019年に故渡辺一郎さんと仕様を決めながら試作を開始しました。渡辺さんは今年の記念事業までに35図を制作したいと言われました。横溝1人では制作は不可能であることを認



図1 第90号を中心とした伊能大図一覧

識され、稲葉さん、竹村さんの応援を得て計36図に着手しています。ただし横溝の着色作業がボトルネックで、5月末現在4図の完成に留まっています。

『伊能図大全』(2013.12河出書房新社刊)編集中から掲載大図に上呈図とは乖離があり、横溝が細々と修正を兼ねて着色をおこなっていました。フロア展着色図と同様にAdobe Photoshop(以下、フォトショップ)を使用しての着色で187号福岡、188号佐賀・久留米、180号日田、190号佐世保、62号秋田(着色順)で、渡辺さんは見せていました。2017年10月に高知新聞から制作依頼を受け、渡辺さん監修のもと、土佐國(高知県)部分

187号福岡、188号佐賀・久留米、180号日田、190号佐世保、62号秋田(着色順)で、渡辺さんは見せていました。2017年10月に高知新聞から制作依頼を受け、渡辺さん監修のもと、土佐國(高知県)部分

2いま、何故、伊能大図をつくるのか

『伊能図大全』(2013.12河出書房新社刊)編集の図群より完成度が高まり『平成の伊能大図』とされています。その後、大々的に作成しようと渡辺さんから提案があつて、現在に至っています。2020年2月19日富岡八幡宮で行つた記者発表で渡辺さんは「2021年は伊能地図上呈200年記念にあたります。アメリカ大図を基図として、国会大図他を参照し、近年のPC技法で現存大図の欠点を補い、伊能大図を制作したいと考え『令和の伊能大図をつくる会』を発足しました。昨年から試作を始めた一部をご覧にいれます。まだ3図だけですが、ご声援、ご協力をお願いします。」と述べられました。記者からの「完成は何時になるのか」との質問に、「10年後を見込んでいる」と応えられました。渡辺さんは100歳まで生きるつもりだと、頗もしくもありましたが、あと10年あれこれ指示されるのは「うんざりだあ」と思つたものです。

アメリカ大図、国会大図とも明治初期に複写され、誤りも多く、上呈図とは異なる『明治の伊能大図』であることから、新しく制作する伊能大図は『令和の伊能大図』としました。

3制作方針

これまでの大図制作や試作、伊能図大全の編集、デジタル伊能図等の閲覧等の経験でアメリカ大図、国会大図は以下の長所、短所あります。

- ①アメリカ大図を基図とすると著作権フリーで自由に使えるメリットがある。
- この長所を活かし、教育現場における教材としての要望に応えたいと思っています。



図2 平成の伊能大図 土佐國

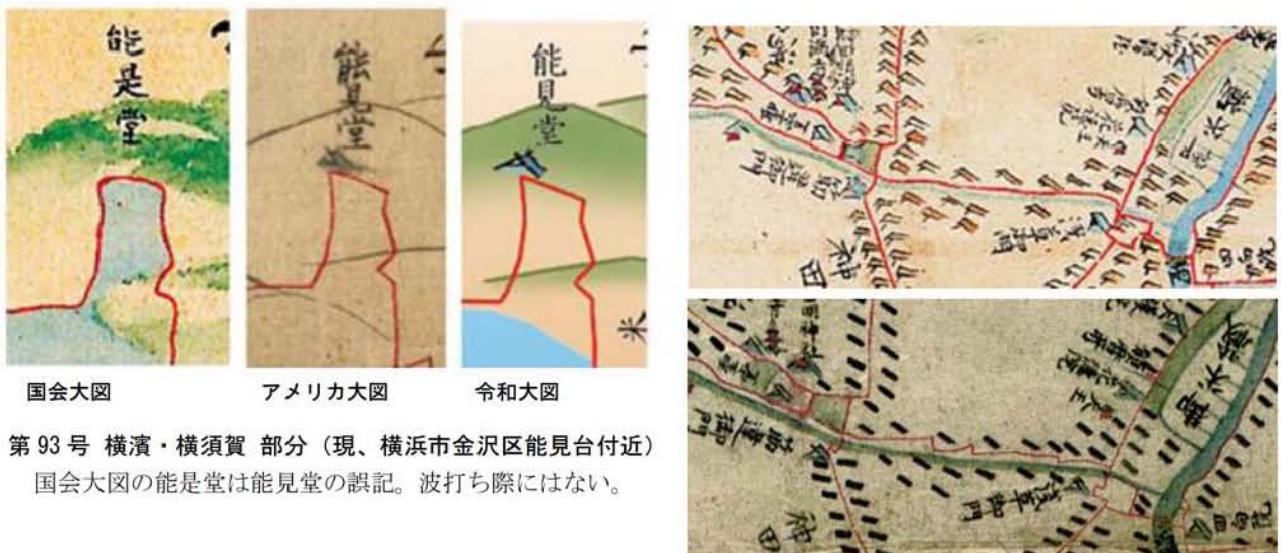


図3 国会大図（上）とアメリカ大図（下）の測線の差

- ④ アメリカ大図には幕府関係者（譜代大名、旗本）、寺社等の所領の記載がない
- 国会大図には千駄ヶ谷村、代々木村に寺社領が



図4 天測地点

右のアメリカ大図には☆印が描かれている（深川の隠宅）。
「永代橋」は判読し難い。家並みは ■ で描かれている。

- ※ 両図とも地名等の表記ミスが散見される
『測量日記』、『伊能図大全地名索引』、『角川地名辞典』、『地理院地図』を参考して修正する。ただし誤っていても測量日記にしたがう。
測量日記に誤りが発見された場合は、忠敬さんの誤記として作業記録に残す。
- ※ 本誌添付地図中の「津久井郡」は、当時の資料、測量日記を精査したところ、「津久井縣」が正しい表記であることを確認しました。

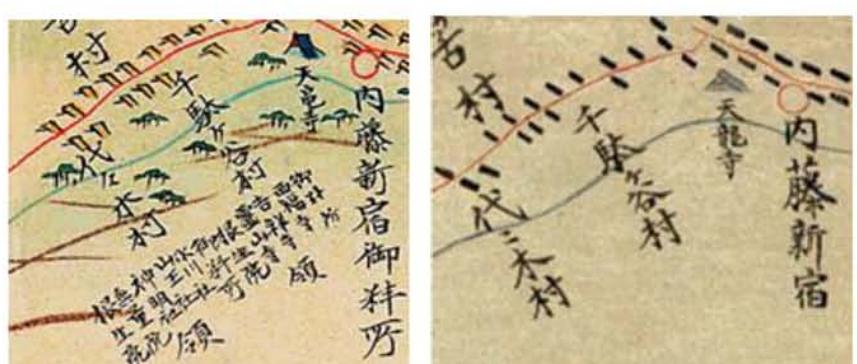


図5 国会大図（左）の寺領の記載

記載されているがアメリカ大図にはありません。国会大図を参照して記述します。

- ⑥沿道風景は国会大図の方が圧倒的に綺麗
国会大図、山口県文書館蔵伊能大図（以下、毛利大図）、松浦史料博物館蔵伊能大図（以下、平戸図）を参考に着色する。
- ⑦交会法の目標としたランドマークには+がある
(国会大図には全く記載なし)
- 上野の寛永寺中堂の屋根に+が描かれています。

- ⑧地名、所領等の文字のコード化

江戸府内から目標となっていたのでしよう。その南には黒門が描かれています。長津田村の古城跡（横浜市緑区長津田）にも+が描かれています。



図6 相模國津久井縣（左は国会大図、右はアメリカ大図）
本誌に添付の地図は「津久井郡」としましたが、「津久井縣」の誤りでした。
訂正してお詫びします。



図7 交会法の目標
山頂は\印が多いが、これも交会法の目標と思われる。

令和の伊能大図の最大の特徴は地名等の文字をコード化したことです。一般にワープロソフト（Microsoft Word等）で文章を書くように、PCのソフトウェアで記述していることです。ただし記述はAdobe Illustrator（以下、イラストレーター）で、アメリカ大図に記載されている字体に似た「HG 正楷書体 - PRO」（ベクトルフォント）で記載しています。この方式で地名等の誤記を修正でき、さらに現代人には読み易く、川筋等に記載された名称などが判読できるようになりました。また、ベクトルフォントであるため、拡大、縮小しても文字品質を保てることです。付録の伊能大図の文字は全て読めるはずです。さらに近い将来AI技術の進歩で、例えばフランス中図に書かれていたような達筆の字体に置き換えることができると思っています。

4 沿道風景の描き方

国会大図は写本としての正確さでは劣りますが、一見してアメリカ大図より非常に綺麗です。そこで毛利大図、平戸大図、さらに九州沿海伊能大図（東京国立博物館蔵。以下、九州沿海図）に倣つてフォトショップで描いています。作業中は100レイヤ以上になりますが、最終的には20レイヤ程度にまとめて、レイヤ単位に修正できるようにしています。

4.1 家並、寺社等の描画

アメリカ大図の家並は図4で示した通りです。国会大図に倣い図8のようにアイコン化しました。神社仏閣、陣屋など民家とは異なる大型の建物は新しい表現が登場する毎に描き、アイコン化も

しています。初期よりだんだん上手くなっているのが自分で分かり、いずれ置き換えるなければならぬと思っています。

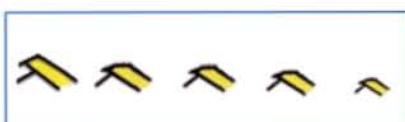


図8 家並



図9 神社仏閣



図10 地図合印



図11 小田原城と城下（アメリカ大図（左）と令和大図（右））

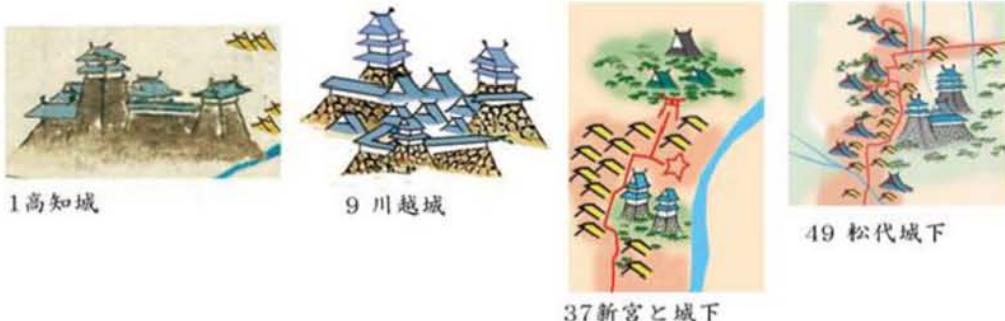


図12 城郭の描画

番号は制作順で、1 高知城は瓦だけ着色、9 川越城、37 新宮と城下あたりから城内に樹木を描くようになりました。

4.2 城の表現

添付地図の江戸の大図に江戸城は描かれていますが、全国をカバーする214枚の大図には127ヶ所に城が描かれています。国会大図などの着色された図を参考に現在49城を描いています。

せんが、全国をカバーする214枚の大図には127ヶ所に城が描かれています。国会大図などの着色された図を参考に現在49城を描いています。

小田原城および城下は図11の通りです。9城目の川越城には石垣が描かれており摸倣し、見栄えがよいので、以降描くことにしました。城の規模にもありますが、石垣の描画だけでもまる1日かかることがあります。

4.3 山を描く

図13の下が90号「江戸」、上が100号「富士山」での山の描き方です。100号は描いた山が1500mを超える高山が多く、江戸の低山とは表現を変えました。当然ながら渡辺さんからは「上のようになにペンタツチで全図、描くように」と、描く時間が下の2倍以上かかるため、課題としています。

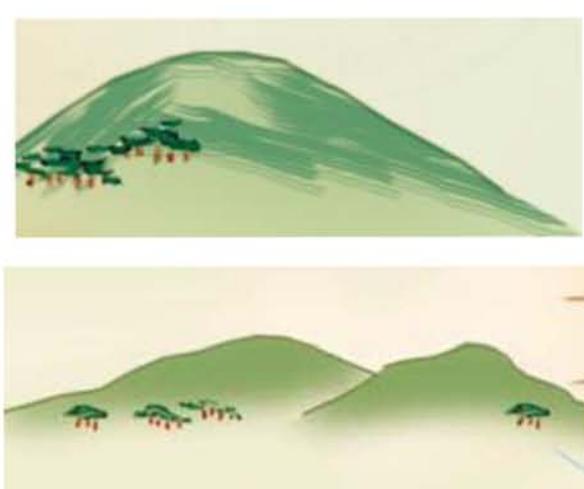


図13 山を描く

4.4 富士山の色

通常「富士」と表記しますが、忠敬さんは例外なく「富士」です。稲葉さんから90号、100号全て

見直して修正の指示がありました。富士浅間社等も対象でした。

渡辺さんと横溝で、富士山の山肌は緑か青かで互いに譲らず以下のやり取りがありました。

横溝「緑の富士山の方が綺麗だ」
渡辺「そうは思わない。北斎の富士山は例外なく青です」

渡辺「上呈図は緑だったはず。国会大図が緑の理由」
横溝「明治の画家の印象で緑にした。稲葉さんや私の周りは皆青が良いと言います」

渡辺「自分の目の黒いうちは緑にせよ」ということで現状は図の通り緑富士です。



図14 富士山の山肌の色違い



図15 樹木と田園

宝永火口が随分小さいのが横溝の印象で、国会大図の宝永山より火口を目立つようにしましたが、渡辺さんからは「忠敬さんが見たのは噴火から1

00年、現在は300年、変わっているだろう」「宝永火口を正面にした絵画や写真はほとんど見ないが、あんたのようにはこだわる必要はない」渡辺さんが亡くなり、適当な時期に青富士にするつもりです。

4.5 樹木や田園の表現

最も時間が掛かるのが樹木の描画です。地図にとって実際にその位置にあった木であるならランマークとして意味があります。国会大図をみるとかぎり、重要なオブジェクトとは思われません。ところが樹木、田園を画かないと、地図がつまらないものになるのです。

134号奈良がこの理由で公開を見送りました。

159号高知から

土佐國着色ははじめ、渡辺さんから一つ山には1本木を描くようにと指示され、言われな
がら1本じやバランスがとれないで最低でも図13のように樹木を描いています。画家の方はスイスイ描く

のでしょうが、素人ではそうは行きません。熟練すれば素早く描けるようになると思われますが、現時点では作画に手間がかかり大きな課題です。平戸大図には松原が描かれ、九州沿海図には杉並木が描かれており、上呈図を想像すると気が遠くなっています。

国会大図に画かれている田園（水田だけでなく陸稻も）は『東海道分間延絵図』も同様の表現であることから、当時は一般的だったとして図15下のように描いています。アメリカ大図しかない図は課題です。

4.6 コンパスローズの再現

隣接図との接続位置を示すコンパスローズ（忠敬さんは接続符号と言っていたか？）は毛利図、松浦図に倣い再現しました。国会大図は全て黄色のベースになっていますが、毛利図、松浦図の1

図中のコンパスローズは全て色が違つていて24方位で画かれ一目瞭然です。当

時は手書きであるため214図、全て違つていたかもしません。このコンパスローズは平成の大図で制作し、令和の大図では

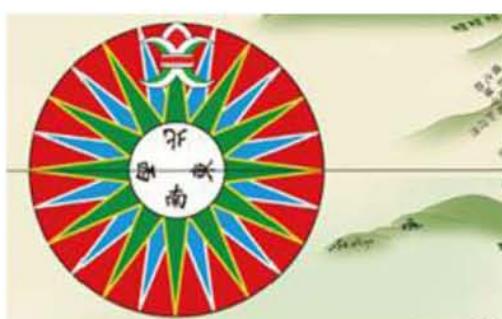


図16 コンパスローズ

40種程度を使いまわしています。

5まとめ

令和の伊能大図の作成イメージは分かつて戴だけたと思います。現在作業しているメンバーは全員70歳以上で、渡辺さんの年齢まで、頭脳明晰に生きられる保障はあります。後継者を育成しなければならないと思ってます。着色に使用するソフトウェアは高価であり、一部の機能しか使つていませんが、動作PCもそれなりの性能が必要で、ハードルが高くなっています。それでもやりたいと思われる方は大歓迎です。ZoomでKnow Howを伝授できると思っていました。また着色は無理だけど制作中の地図(図17)のチェックは出来るという方の参加も大歓迎です。地元の地図は地元の方たちにチェックして戴くのが良いと思っています。

令和の伊能大図の一般公開は「伊能図完成200年記念の集い」の江東区文化センターと保土ヶ

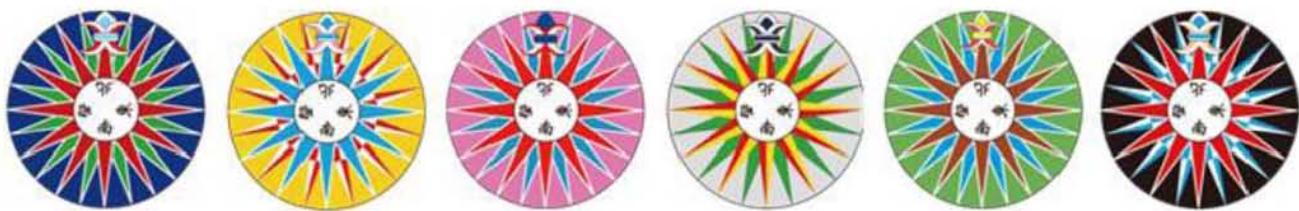


図17 令和の大図で使っているコンパスローズの例

谷区役所（横溝の地元）で限られたものでした。見て戴いた方たちから「伊能図はこんなに綺麗だったの」 「本物は火事で焼けてしましましたが、比べものにならないくらい綺麗だったはずです。妥協をしない伊能測量チーム、手抜きをしない江戸の絵師達が、高価な和紙に画いたもので、想像できると思われます。」と応えていました。また地元に住んでいる方ならでは地名の誤り、地図上の表現等の指摘や質問がありました。その場で応えられないものありました。それも令和の伊能大図が電子データであることのメリットです。

「本物は火事で焼けてしましましたが、比べものにならないくらい綺麗だったはずです。妥協をしない伊能測量チーム、手抜きをしない江戸の絵師達が、高価な和紙に画いたもので、想像できると思われます。」と応えていました。ゼンリン小図の発見は昨年の7月だったとありました。渡辺さんとの最後の電話は6月19日12時頃で30分話していました。令和の大図の進捗状況、渡辺さんの遺稿となつた『伊能忠敬の日本地図』（渡辺さんは『忠敬と伊能図復活物語』とされていました）の掲載画像の確認などで、遺言いたことは言われませんでした。もし6月初めにこのニュースを渡辺さんが知っていたら「きっと生き返った」と思っています。



図17 81号長野（姨捨付近）制作中

※「津久井縣」の呼称について

(編集子)

吉田東伍著『大日本地名辞書』昭和46年増補版（富山房）の第五巻「甲斐国津久井郡」の項に新篇相模風土記を引用して次の記載がある。

北条役帳にも「奥三保十七村、田一向無之、何も山畠迄也、千木良、与瀬、吉野、沢井、佐野川、小淵、日連、那倉、牧野、青根、鳥屋、青山、若柳、三加木、中、長竹、大井等なり」と記し、また保内とも題し、其辺住居の諸士を津久井衆と闘称せり、按するに、鎌倉將軍の頃、築井太郎、治郎義胤、相模川の東岸、宝峰（長竹村の属）に城郭を構へて居住し、其辺を築井領と闘称せしと云、是区別の権輿なるも知るべからず。かくて其後、正保中の改定に、彼津久井領の地全く分かちて津久井郡としけるが、元禄四年に至り、山川金右衛門奉はり、更に改正して津久井県と称す。

新しく5月19日に伊能小図（副本）発見の発表があり、びっくりするとともに渡辺さんが生きていたら残念に思いました。

生前から「国内で伊能図が発見されたら、何を置いても駆けつける」と事ある毎に言われていました。ゼンリン小図の発見は昨年の7月だったとあります。渡辺さんとの最後の電話は6月19日12時頃で30分話していました。令和の大図の進捗状況、渡辺さんの遺稿となつた『伊能忠敬の日本地図』（渡辺さんは『忠敬と伊能図復活物語』とされていました）の掲載画像の確認などで、遺言いたことは言われませんでした。もし6月初めにこのニュースを渡辺さんが知っていたら「きっと生き返った」と思っています。

明治期の模写図における山の表現

菱山 剛秀

はじめに

今年は、伊能図が幕府に上呈されて200年目に当たる。伊能忠敬の測量の拠点となつた東京都江東区では記念の行事も行われ、九州では国内2例目という伊能小図の発見もあつた。

一方で、幕府に上呈された伊能図や、伊能家に残されていた控図は、明治以降の火災や震災により消滅したとされ、伊能隊の手になる大図は、地方の大名などの要請で提供された限られた地域のものだけである。

伊能図は明治時代に新政府の下で需要が高まり、当時の複数の政府機関で模写が行われた。それも国内に残るのは、国会図書館に所蔵されている関東周辺の一部と旧海軍が模写したとされる海上保安庁が保有する一部地域に限られる。明治期の模写は陸軍の記録にも残されており、平成13年に当研究会の名誉会員であった故渡辺一郎氏が米国の議会図書館でこの模写図（「アメリカ大図」）を発見した。その後、この模写図はデジタル化され、国会図書館所蔵の模写図（「国会大図」）とともにWeb上で閲覧可能になっている。

この2種類の模写図は、いずれも当時の記録から伊能家の控図を模写したものとされているが、各図を子細に比較すると、地図の表現や文字の筆跡だけでなく、測線や海岸線の形状、地名の注記などに若干の違いが認められることが分かつている。ところが、地図に描かれている山の表現は、彩色が施されているか山輪郭を線で描いたかの違

いのみが注目され、位置的な差があることには注目が及んでいなかつたように思われる。



図1 左から、地理院地図、国会大図、越後輿地全図の比較

「国会大図」に描かれた山の位置
新潟在住の会員から伊能図と同時期に作製された「越後輿地全図」という国絵図について情報を提供いただいた。この図の研究者である亀井（2017, 2018）によれば、この図は、江戸時代の代表的な測量術とされる「清水流」を学んだ草間文續や内藤多郎助の測量に基づいて作製されたもので、それまでの国図に比べ極めて精度が高いといふ。そこで、現在の地理院地図を基準に、国会大図と位置の精度の比較をしてみたところ、図1のように山の表現はデフォルメされているものの、相対的な位置関係は地理院地図とよく整合することを確認した。

地理院地図と伊能図、越後輿地全図のいずれも山の相対的位置関係がよく対応する中で、国会大図に描かれている弥彦山の位置だけが大きく北にずれていた。このずれの原因が伊能隊の測量の精度によるものなのか、明治期の模写方法によるもののかを検証するため、アメリカ大図とも比較してみたが、図2に示すように、アメリカ大図の弥彦山の位置は、国会大図ほど大きなずれは認められなかつた。このため、国会大図の弥彦山の位置のずれは、伊能隊の測量によるものではなく、明治期の模写によるずれであることが想定された。これまで、国会大図とアメリカ大図の山の表現の違いは、彩色が施されているか輪郭線だけで描かれているかといった描き方の違いが注目されてきたが、描かれている位置にも差異が認められることが明らかになつた（図3）。こうした差異が生ずる原因としては、模写方法の違いが考えられる。国会大図は、骨格となる測線を原図から移写した後で、山景は見取りにより絵画的に描いた可能

性が高いと考えられる。一方、アメリカ大図は、測線の移写と同時に、基図から山の輪郭を直接移写したものと考えられる。両図は、模写方法の違いから、山の絵画的な表現は国会大図の方が原本に近く、位置の正確さはアメリカ大図の方が原本に近いと考えられ、模写図の作成目的の違いが模写方法に反映されたのではないかと思われる。

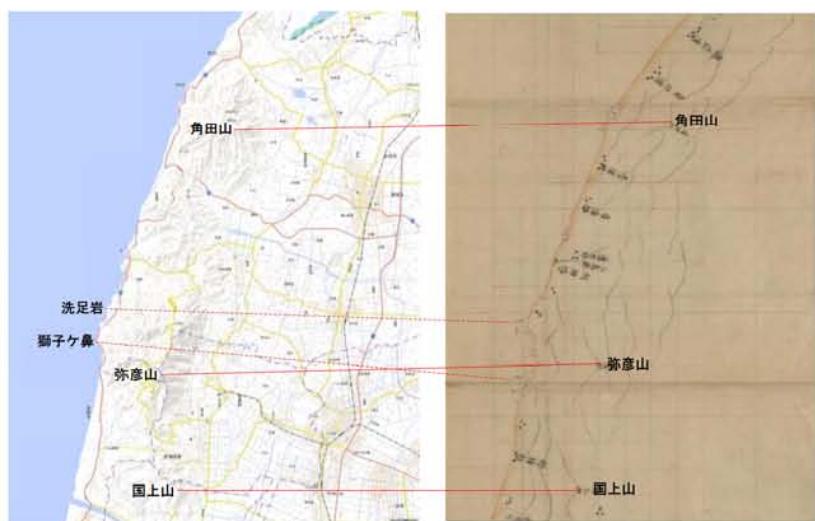


図2 地理院地図（左）とアメリカ大図（右）の比較

海岸線を測量できずに既存の地図等を参考に描き入れたと考えられ、模写の際のずれではなく、現地の測量ができなかつことによるものである。

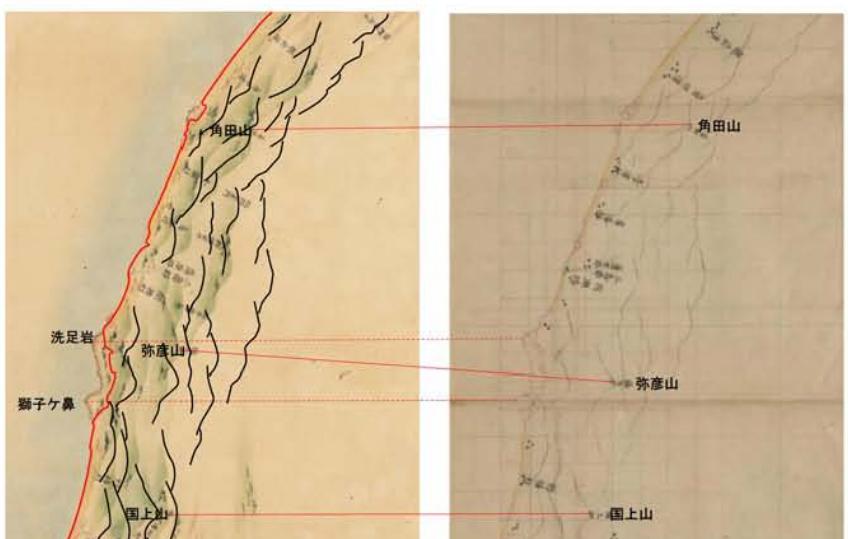


図3 国会大図（左）とアメリカ大図（右）の山の位置
国会大図にアメリカ大図の山形を重ねて比較

伊能図の原本ともいべき、上呈図やその控図が現存しないことから、伊能図の研究には現存する模写図を参考するしかないが、後世の模写図には、模写の目的や方法により原本と異なると思われる表現があることに注意する必要がある。

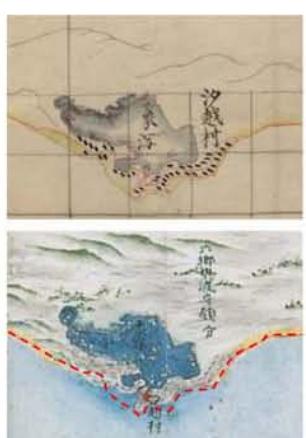


図4 象潟付近の大図
(上) アメリカ大図
(下) 記念館大図
朱破線はアメリカ大図の海岸線

の大図（記念館大図）は、アメリカ大図の海岸線と異なり、湖水と海が水路で繋がっていることから、アメリカ大図は、象潟地震による海岸線の変化を反映したことが推測される（図4）。

文献	亀井功	2017	文人の測量家内藤多郎助
明治期に陸軍が模写したアメリカ大図は、原図と異なると考えられる箇所が指摘されている。	亀井功	2018	在野の地理学者草間文績・合理精神越後を歩く・二〇〇年も早く生まれてしまつた男・日本一の『越後輿地全図』を作つた男
山形県の象潟付近は、伊能隊による第三次測量後の大文化元（1804）年に発生した象潟地震による海岸付近の隆起が知られている。伊能忠敬記念館が所蔵する測量当時のものと考えられるこの付近	精道	2018	『越後輿地全図』を作つた男
なお、両大図とも弥彦山西側の海岸線の形状が地理院地図と比べるとずれが見られるが、両図間ではずれは無く、アメリカ大図は、海岸を未測量の線で描いている。この箇所は海岸が急崖のため、	精道	2018	『越後輿地全図』を作つた男

画像データ

越後輿地全図：新潟県立文書館「文書館だより」

第17号（2012）

国会大図：国立国会図書館デジタルライブラリ
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286626?tocOpened=1>

アメリカ大図：伊能忠敬e資料館
https://inoarc.tokyo/02dataRm/ino_map_check/ino_dai_zu.php

記念館大図：伊能忠敬記念館
<http://www.city.katori.lg.jp/sightseeing/museum/>

銅像建立と広報の必要性

日本地図の第一歩は吉岡から～伊能忠敬

北海道福島町 中塚 徹朗

伊能忠敬翁没後2000年の平成30年（2018年）、私の住む北海道福島町吉岡の地に測量姿の伊能翁の銅像が誕生した。建立者は福島町鳴海清春町長。伊能研の地元会員である私は、当時名誉代表の故渡辺一郎先生に銅像建設の御指導をいただくべく、僭越ながら町とのパイプ役を仰せつかった。銅像作家には酒井道久先生をご紹介いただき、お陰様で4月27日、伊能洋先生御臨席のもと除幕式が盛大に執り行われ銅像完成を祝った。

だが、不思議なもので銅像ができてしまふと、「なぜ銅像が建つたのか？」という疑問の声が町内各所から聞こえてきた。町は議会や回覧板等で銅像建立を町民に説明していたし、なんと言つても銅像には伊能翁による当地上陸と蝦夷地測量開始のいきさつを渡辺一郎先生に十分に紐解いていただけの解説板が添えられている。しかし、より多くの町民に理解を得るために、もっと分かりやすい新しい広報の必要性が感じられた。同年6月、タイムリーにも福島町教育委員会（現在、小野寺則之教育長）は、町の歴史をわかりやすく振り返る『北海道ふくしま歴史物語』の町民全戸配布事業を立ち上げ、編集委員長に私（福島町史研究会会長）が任命された。編集方針は、福島町にゆかりのある人々の挑戦と活躍の足跡を、絵や資料を用いてわかりやすく子供たちや町民の皆さんに理解していただき郷土愛を育むこととし、できるだけこれまで知られていないローカルな内容で表現

することとした。当町が誇る「国民栄誉賞に輝く横綱・千代の富士」物語をはじめ計8本のテーマで歴史物語全体は構成されているが、ここではそのうちの一つ「日本地図の第一歩は吉岡から～伊能忠敬」について、簡単に、お知らせしたい。1800年（寛政十二年）江戸を出て奥州街道から三厩へ至つた伊能測量隊一行は、蝦夷地吉岡（現福島町吉岡）に運ばれ上陸した。翌日、最初の蝦夷地測量が開始される。これを記念し、没後200年の年に測量姿の銅像は建てられた。

さて、この「歴史物語」の中で「伊能忠敬の銅像はなぜ建つたのか？」という疑問に分かれやすく答える工夫をいくつか用意した。漢字の少ない文章表現はもちろんのこと、一枚の絵に、銅像・

地球・星座、そして当町地名の入った伊能大図をそれぞれ配置して作家に描いていただいた。銅像の下には子供達との教育の現場風景も書き入れ、分かるように工夫した。（絵1）。また、史実を示す写真資料を読者の目で確かめていただく工夫をした。その価値が分かれば銅像建設の必要性や意義も自然と理解されるだろう。町内で銅像建設の気運が高まつたのが2017年、ちょうどこの年の11月、私は香取市の伊能忠敬記念館を訪問させていただいた。記念館では福島町と関連のある書状・日記・下図・地図など21点の国宝を見せていたとき許可を得て写真に収めていた。この中

さて、この本の全戸配布がいま完了し、「伊能忠敬翁の銅像がなぜ建つたのか」と疑問に思う町民の皆さんへ着実に理解が届いたらどうか？ 伊能銅像建設と「歴史物語」編集作業に関わった一人としてその効果達成を願わずにいられない。

本文完成をご支援くださった戸村茂昭会員と今回執筆の機会を与えて下さった河崎倫代理事にこの場をお借りして感謝申し上げます。

なお、本文は「北海道ふくしま歴史物語」で検索するとWEBで閲覧できるのでぜひご覧ください。（文中の写真、資料が掲載されています。）

<http://www.town.fukushima.hokkaido.jp/book/l.html5.html?page=1>



右から2番目の絵が「伊能忠敬」

員会の様々な工夫のもと『北海道ふくしま歴史物語』の「日本地図の第一歩は吉岡から～伊能忠敬」は完成した。

伊能図完成二〇〇年記念 「伊能ウオーカー」開催

九州支部 馬場 良平

はじめに

昨年の夏、伊能忠敬研究会会報担当者から「地元図書館・公民館等で『伊能図完成二〇〇年記念』のミニ展示会などを企画していただけないか」というお話をいただきました。

私自身は「伊能図完成二〇〇年記念」で何かをしなければという思いはありました。何分コロナ禍であり、決断が出来ずにいました。今年に入り、企画展の提案はともかく「伊能忠敬測量隊が残した足跡を辿って、その業績を顕彰しなければいけない」との思いは日増しに募っていました。

一、「伊能ウオーカー」開催

令和三年三月、やっと重い腰を上げて伊能忠敬の業績を顕彰する「伊能ウオーカー」を開催することにしました。「伊能図完成二〇〇年」記念イベント「新型コロナウイルス感染症退散祈願」伊能ウオーカー」と題して、伊能忠敬測量隊が肥前国測量時に参詣した神社三社を巡る「伊能ウオーカー」

です。

①第一回目令和三年四月一日

唐津市呼子町加部島・田島神社

②第二回目令和三年五月九日

三養基郡基山町宮浦・荒穂神社

③第三回目令和三年六月一三日

杵島郡白石町辺田・稻佐神社

いずれも、伊能忠敬測量日記に詳しく記述されている処です。

二、第一回目「伊能ウオーカー」

四月一日(日)第一回目の「伊能ウオーカー」・田島神社は、天気にも恵まれ、コロナ禍の中でも五〇名の参加があり、呼子大橋を渡つて加部島へと向かいました。呼子大橋は橋梁延長約七二八mあり、加部島振興の農免道路として

開通した橋ですが、風光明媚な呼子町のシンボルとなっています。呼子が交通の要衝地として発達してきたのは、加部島が呼子湾の沖に位置し、天然の防波堤としてあつたからだと云われています。



伊能図重ね合わせ図



田島神社への行程図・当日配布資料

文化九年（一八一二年）八月一七日二手に分けて筑前国から肥前国入りした測量隊は、神功皇后社（現在玉島神社）へ打上、両手はここで合流して神功皇后社へ参詣して、肥前国測量の第一歩を印しています。その後、伊能忠敬測量隊一行は、唐津城下から東松浦半島を北へと進み、呼子浦や名古屋村に逗留して、小川島、加部島、松島、加唐島、馬渡島など玄界灘の島々を測量しています。

八月二三日呼子浦に入った伊能本隊は藩主の御茶屋にて昼食後、弁天島へ渡り、弁天島一周一

丁十八間五尺（約一四三m）、また、二子島へも渡り一周一丁二十三間（約一五一m）と記しています。加部島へは八月二十四日小川島測量後、二五日には田島神社へ打上、測量日記に田島神社の祭神、創建、鳥居のことなど詳しく記しています。また、二七日には別隊が田島神社へ参詣しています。

田島神社は肥前国四式内社のひとつに数えられる格式ある神社で「名神大」の格があり、「佐賀



田島神社をバックにマスク着用での参加者

「県神社誌要」の第一ページに掲載されるほどの肥前国で最も古い神社の一つとして知られる由緒ある神社です。また、松浦佐用姫伝説の佐用姫神社を祀っています。

「・・・外に田島神社へ打上四十四年。田島神社式内祭神湍津姫命田心姫命市杵島姫命三座、外大山祇命稚武王命、天平三未年鎮座、華表に天元三庚辰年縣令波多氏修造之と。文化壬申迄八百三十三年になる。又、佐与媛社御朱印百石、神主平野内蔵丞望夫石あり。此地にてヒレフス山と云。・・・」と記しています。

田島神社では、呼子地区春祭りのため、宮司不在で「コロナ退散」祈願祭は行うことが出来ませんでしたが、参加者全員による合同参拝をいたしました。

田島祐社参拝を済ませて帰路
呼子大橋の袂から弁天島遊歩橋
へ下つて弁天島の女島に渡りました。
北の男島には潮の加減で渡ることは出来ませんでしたが、伊能測量隊が足跡を残した弁天島
に立つことが出来て、参加者は大いに満足された一日となりました。

方々には、事前に「参加はご自重下さい。」とのメールを送るなどコロナ対策をして開催しました。開催当日集合場所の基山駅には、コロナ禍にもめげず二〇名が集まりました。伊能忠敬研究会古参の河島悦子様も参加していただきました。

三、第二回目「伊能ウオーグ」

二、第二回目「伊能ウオーク」

能ウオーク」・荒穂神社は、大型連休明けのコロナ感染症の拡大

傾向の真直中があり、中止すべきか大いに悩みました。高齢者の方々には、事前に「参加はご自重

下さい。」とのメールを送るなどコロナ対策をして開催しました。開催当日集合場所の基山駅には、コロナ禍にもめげず二〇名が集まりました。伊能忠敬研究会古参の河島悦子様も参加していただきました。



弁天島遊歩橋をゆく御用旗

荒穂神社は伊能忠敬測量隊が
街道測量の途中、街道をはずれて
足を延ばして参詣した神社で、肥

前国四式内社のひとつに数えられる格式ある神社です。

荒穂神社のことは、文化九年九月二十五日の測量日記に「・・・荒穂社、打止二十六町三十間。荒穂

神社、式内祭神一座、彦火々出見尊、瓊々杵尊、相殿、加茂八幡、住吉宝満、春日和魂、別雷、孝德帝大化年中基肄山に鎮座、天正十七年為兵火、炎上して其後此所に移すという。社人禾田美作守、と詳しく述べて記しています。



基山町・薦穗神社への行程図

荒穂神社では「新型コロナウイルス感染症」退散祈願をしていました。祝詞奏上では文化九年九月二十五日伊能忠敬測量隊が荒穂神社へ参詣したこと、「伊能

図完成二〇〇〇年記念イベント・”新型コロナウイルス感染症”退散祈願「伊能ウオーカー」のことなどをお読み上げていただき、参列者一同大変感激しました。

梶田（のきた）宮司は伊能忠敬測量隊が参詣したことはご存じでなく、われわれの訪問を「鳥肌が立つ思いで待っていた」と挨拶されました。何より宮司が自分の先祖の名前が「社人禾田美作守」として、伊能忠敬測量日記に記してあつたことに、感慨深いものを



荒穂神社への道 (伊能図重ね合せ図)

お持ちでした。伊能忠敬とのご縁で二〇〇年の時空を超えて新しいドラマが生まれました。

寄っています。



荒穂神社の宮司も入り記念写真



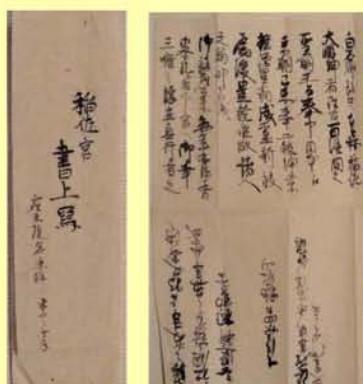
稻佐神社への道
(伊能図重ね合わせ図)

この時のことは測量日記に
「・・・稻佐神社へ打上る。二十
二町十五間、稻佐神社祭神百濟國
聖明王、九月十九日祭礼、白石郷
鎮守、別當普門坊觀音院、座主坊、
吉藏坊、觀智院、講堂。・・・」と
記しています。

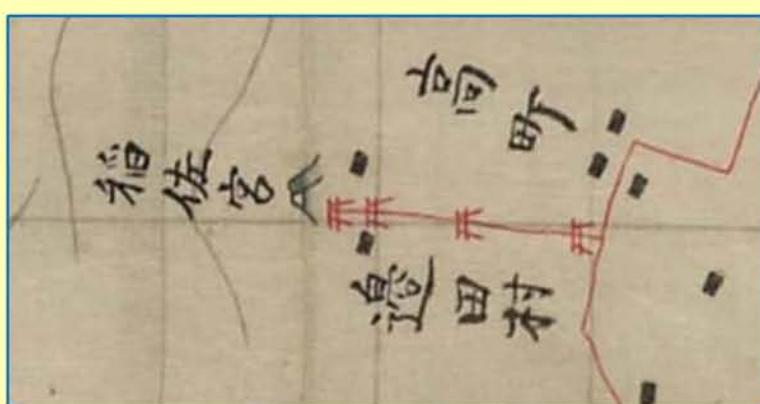


白石町・稻佐神社への行程図

現在、千葉県香取市（旧佐原市）伊能忠敬記念館に所蔵されている国宝「伊能忠敬関係資料」二、三四五点のなかに「稻佐宮由緒書上」（国宝・文書・記録類539）が残っており、それによつて測量日記が記されていることがわかります。



稻佐宮由緒書上（右：折紙）
千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵



伊能大図第190号・佐世保
稻佐神社へ四つの鳥居が描かれている

喜んでおられました。約八kmを歩いた往復三時間の「伊能ウオーカー」は、午後〇時二〇分無事終了する事ができました。

お持ちでした。伊能忠敬とのご縁で二〇〇年の時空を超えて新しいドラマが生まれました。

四、第三回目「伊能ウオーカー」

六月一三日（日）第三回目の「伊能ウオーカー」・稻佐神社は、梅雨時の蒸し暑い曇天の中、四四名の参加を得て開催しました。新型コロナウイルス感染症の状況が少し落ち着いて来たことから、長崎県からの参加者があり、久しぶりの再会を喜びながら稻佐神社をめざして歩いてゆきました。

文化九年十月二十四日、伊能忠敬測量隊の本隊は多良越長崎道を南下している途中、高町宿から街道からはずれて稻佐神社へ立ち

稻佐神社では、笠原宮司によつて「新型コロナウイルス感染症」退散祈願をしていただきました。宮司挨拶の中で、伊能忠敬が参詣したことは初めて知ったと話され、私たちの「伊能ウオーカー」で新たな歴史が解明されたことを

おわりに

この三回の「伊能ウオーカー」で訪ねた田島・荒穂・稻佐の三神社では、いずれも「伊能忠敬測量隊」が参詣したということを知らないことが多かった、記録が残っていないということでした。私たちは伊能忠敬

※伊能図と現代の地図重ね合わせ図は、長崎市の人江正利様に作成していただき使用しました。

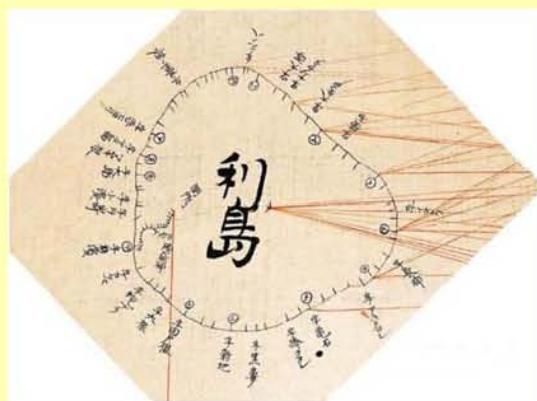


稻佐神社コロナウイルス退散祈願後、記念写真

測量隊の足跡を辿りながら、伊能忠敬の業績を一般の方々へ伝え、伊能図に描かれた地名を誇りに、豊かな郷土の歴史を紡いでいかなければならぬと深く実感しました。今後は「新型コロナウイルス感染症」退散祈願による沈静化を期待して、コロナ感染症の心配のない、マスクのいらない伊能忠敬顕彰の「伊能ウオーケーク」を、定期的に開催してゆきたいと思っています。



香取市立伊能忠敬記念館HPから



国宝：地図・絵図類 177
伊豆七島利島・新島・式根島・地内島下図
香取市立伊能忠敬記念館所蔵

伊能忠敬記念館HPで 初のオリジナル動画を公開！

玉造 功

千葉県香取市の伊能忠敬記念館のHP（ホームページ）では、始めて動画を作成公開しました。内容は伊豆七島の利島の下図から針突法をつかって自分だけのオリジナル大図を創ろうというものです。対象年齢は小学校中学年から大人まで。ステイホーム対策に絶好です。

使用する下図は伊能忠敬記念館HPからダウンロードできます。針突法の手順が詳しくかつ易しく紹介されています。最後には、伊能図の特色である絵画的表現についても、簡絵図の代わりに使う地理院地図の利島の航空写真を表示する手順まで示されており、とても親切です。

山道の部分の狭い間隔の針穴で測量の苦労と作図の苦労を追体験することも出来ます。

新たに「伊能小団」副本確認

事務局

5月18日に日本地図学会からこれまで知られていない「伊能小団」が確認されたと発表があり、テレビ、新聞等が一斉に報道した。

確認されたのは、九州の福岡県小倉駅近くにある「ゼンリンミュージアム」に寄託された「實測輿地圖」とされる3枚揃いの伊能小団の副本（以下「ゼンリン小団」という）である。確認したのは、伊能忠敬研究会の特別顧問でもある鈴木純子さんと星埜由尚さん等で、鈴木さんは、日本地図学会の古地図を専門に研究する「地図史料・地図アーカイブ専門部会」の主査でもあり、星埜さんは、日本地図学会の会長もされていた。

記者発表は、オンラインで行われ、発表の様子は現在もYouTubeで視聴することができる。
<https://www.youtube.com/watch?v=EHvYosE57P0> (6月20日確認)

3枚揃いの伊能小団は、国内では、東京国立博物館所蔵の「日本沿海輿地図」（以下「東博小団」という）のみで、この図は国の重要

文化財に指定されている。

海外を含めると、幕末の文久元年（1861）に幕府が英國測量艦に与えた小図（以下「英國小図」という）が英國ナショナルアーカイブズに所蔵されていることが知られているが、原図から直接針突法により移写した副本ではなく、贋写等により筆写された写本である。

この度確認された「ゼンリン小図」は、3枚揃いの伊能小図の副本であることが確認され、地名の筆跡も「東博小図」と酷似していることから、同図と同じ時期に、同じグループによって描かれた可能性が高いと考えられる。

ゼンリンミュージアムでの展示

3図のレプリカを展示

展示期間：2021年6月5日～8月29日
10:00～17:00（最終入館16:30）
月曜休館（祝日の場合は翌平日）
所在地：福岡県北九州市小倉北区室町1-1-1
リバーウォーク北九州14F

詳細：<https://www.zenrin.co.jp/museum/event/>

他の小図には見られない凡例が北海道の図の北東部に記載されているのもこの図の特徴といえる。凡例の内容は、上図に添えられた「沿海實測錄」に記載されている凡例と同じ内容とのことである。

渡辺一郎 著

『伊能忠敬の日本地図』

昨年6月に亡くなった渡辺一郎氏の遺稿「伊能忠敬の日本地図」が5月20日に刊行された。



れでおり、伊能忠敬研究会の25年余に及ぶ歴史もある。事典としても利用できる内容だが、文庫本なので嵩張らず持ち歩くにも便利である。

本書の構成

序 章	伊能図の時代
第1章	伊能忠敬の生涯
第2章	伊能図を読む
第3章	測量の方法
第4章	天体観測
第5章	日本全国の測量 東日本編
第6章	日本全国の測量 西日本編
第7章	最終版伊能図の完成
第8章	伊能図の復活
第9章	伊能図の探検と発見の旅1
第10章	伊能図の探検と発見の旅2 (事務局)

河出文庫「伊能忠敬の日本地図」

発行 河出書房新社
2021年5月20日発行
本体 990円（税込1089円）

ゼンリン小図の緒元

図名：「實測輿地圖」

地図の構成：3図幅1組

地図の寸法：

第一（蝦夷地）151.9×160.5cm
第二（東日本）256.6×161.0cm
第三（西日本）203.7×160.0cm

縮尺：43万2千分1（1里3分）

地名の数：約13,500箇所

「ゼンリン小図」は、「東博小図」に比べ、虫損が少なく、保存状態がよく、複製の際の針孔も確認できるとのことである。また、

伊能図探訪から始まった国外にまで及ぶ伊能図発見の経緯が追加されている。

第9章と10章に掲載された「伊能図の探検と発見の旅」は、渡辺氏のみが知る裏話も掲載さ

新入会員の自己紹介

石川県 隅田 晓



に至っています。

伊能忠敬の生き方には感銘を受けており、以前から非常に興味がありました。会社の朝礼で、伊能忠敬が55歳という高齢から17年間で日本の精密地図を作ったばかりの時に、地元紙（北國新聞）の市民のお知らせ欄に、海みらい図書館で伊能忠敬の講演があるという記事を見てビックリしました。

早速、申し込んで講演会を聴講し、それがきっかけで伊能忠敬研究会の存在を知り入会しました。伊能忠敬に非常に興味がありますが、皆さんの様に伊能忠敬研究会にお役に立てる知識はありません。伊能忠敬を通じて皆さんと交流したいと考えております。

今年9月で68歳になります。
隅田 晓（すみだ さとる）と申します。現在、石川県金沢市に住んでおります。

【趣味】城めぐり、サイクリング、ドローン撮影。

生まれは石川県鳳珠郡能登町鶴川というところですが、高校を卒業してからは建築技術者としてある建設会社に入社し、全国・海外とあちこち駆け巡りました。がら48年間勤めてきました。一昨年地元の会社に転職して現在

兵庫県 田中 正子



はじめまして。第92号表紙の島原半島にゆかりある、兵庫県在住の田中正子と申します。

古都奈良の大学の鹿の集うキンバパスで社会学を専攻した後、大阪府内での埋蔵文化財調査に補助員として従事、遺跡発掘現場で泥んこになつておりましたが、昨年より、コロナ禍の中、実家の医院（尼崎）にて、事務全般を担当しています。

写真のような平板測量の日々からは離れましたが、長年気になつておりました伊能忠敬研究会への入会を思い立つた次第です。

伊能隊第八次（九州第二次）測量の長崎県島原半島小浜村における宿泊宅が、私の高祖母の実家（正確には、島原藩主の庶子であった高祖母の養家）、本多家・本多湯太夫家であるという由縁を、

近年知ったこともあって、ますます伊能忠敬師匠（万歩計「新・平成の伊能忠敬」を通じて弟子入りしているもので、こう呼ばせていただきます）への敬意と興味を深めています。

関心ある医史学や我が先祖の歴史調査も含め、いろいろと探究していきたいと思っています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

日本地図学会主催・伊能忠敬研究会共催により、伊能図完成200年記念集会「『伊能図』の現代的価値を考える」を開催します。

開催日時は、2021年7月10日（土）午後1時30分から午後3時までの1時間30分を予定しています。

講演会としてWebで配信します。参加ご希望の方は、次のホームページからお申し込みください。（参加申し込みアドレス）

<https://www.academyhills.com/seminar/detail/20210710.html>
※次ページのポスター参照。



—「大日本沿海輿地全図」幕府上呈 200 年記念集会 —

「伊能図」の現代的価値を考える



伊能図の作成は、我が国が近代化を成し遂げることに欠かすことができない基盤となる日本地図の「礎」となった偉業です。世界的にも国土の精密な実測に基づいた伊能図の価値は計り知れないと言えます。

伊能忠敬等は 1800 年より 17 年間をかけ、10 度に渡る全国の測量により全国を実測しました。その結果を測量終了後に 3 年間をかけ、彼の死後も弟子たちが引き継ぎ、3 種類の縮尺の異なる日本地図を完成させ、文政 4 年 7 月 10 日(1821 年 8 月 7 日)に幕府に上呈しました。今年は、伊能図が完成し、幕府に上呈してから 200 年になります。

今回、「伊能図の幕府上呈」から 200 年を記念し、上呈の日 7 月 10 日に合わせて伊能図の全容、価値、作成の意義を明らかにする集会を開催します。

まさに現代に通じる「伊能図」の偉業を讃える会にしたいと考えています。

多くの皆さんの参加をお願いします。

日 時：2021 年 7 月 10 日(土)午後 1 時 30 分～午後 3 時(1 時間 30 分)

実施方法：リモート講演会として Webinar で配信します。(無料)

詳 細：<https://www.academyhills.com/seminar/detail/20210710.html>

(Web ページからお申し込みください。)

基調講演

鈴木 純子(元国立国会図書館、日本地図学会名誉会員、伊能忠敬研究会特別顧問)

星埜 由尚(元国土地理院長、元日本地図学会会長、伊能忠敬研究会特別顧問)

司会・進行

太田 弘(日本地図学会常任委員)

主催：日本地図学会(地図史料・地図アーカイブ専門部会)

共催：伊能忠敬研究会

協力：アカデミーヒルズ

後援：日本地図センター、東京地学協会、測量協会 等(申請中)

背景図：伊能小図(ゼンリンミュージアム蔵)

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。
長い原稿の場合は連載として分割していただきともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。
トアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合 T 153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真的の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取つておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

伊能忠敬研究会 入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

T 153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール

郵便振替口座 〇〇-五〇-六〇七一八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

次号（第95号）は2021年10月発行、**原稿締切は8月31日**の予定です。
第95号は特集号を予定しており、一般記事の掲載は2022年2月発行予定の
第96号になる場合もあります。